晩　秋

秋の空に映えるマユミ（御池岳丸山山頂）

世界の山旅
秘境の旅

「一人ではいけない…でも行きたい。」
それにお応えするのが実体験に基づいたアルパインツアーの旅づくりです。

ヒマラヤ越えフライトで行く ネパール（大阪発着）

出発日：11/12、12/24、12/29（下記4コース共通）
■エベレスト展望トレッキングとシェルパの里10日間
旅行代金：¥320,000～¥398,000
■アンナプルナ・ダウラギリ・パノラマ・トレッキング10日間
旅行代金：¥312,000～¥398,000
■ランタン・ヘリ・トレッキング10日間
旅行代金：¥360,000～¥448,000
■ヒマラヤ山脈8,000m級の展望とハイキング10日間
旅行代金：¥398,000～¥462,000

▲機窓から迫力のエベレスト(8,848m)

パタゴニアの山旅

2010～2011・カタログ発表

■長大な氷河、連なる岩の彫刻、刻々と形を変える雲、見たこともない風景が広がる最果ての地パタゴニア。11日間のコンパクトなツアーから、15日間のたっぷり満喫できるツアーまで、全4コースをご紹介しています。

コンパクトな日程で楽しむ厳選のハイキング
地の果ての大自然 パタゴニア・ハイキング11日間
出発日：11/20、12/13、12/21、1/15、2/13、3/5
旅行代金：¥568,000～¥674,000（東京発着）

パタゴニアを代表する2大山群で絶景の候況に迫るトレッキン
パタゴニア・スーパー・トレッキング パイネ&フィッツロイ山群15日間
出発日：11/25、12/16、1/13、2/11、3/3
旅行代金：¥736,000～¥754,000（東京発着）

オーストラリアの山旅

2010～2011・カタログ発表

■世界で最も水と空気の美しい島・タスマニア。面積は小さいながらも自然や文化の多彩な顔を持つビクトリア州。オーストラリア大陸最高峰・Mt.コジオスコなど、魅力たっぷりのオーストラリアの山旅を満載しています。

自然豊かなタスマニアの島と、メルボルン近郊の美しい海岸線をたどる
タスマニア島・クレイドルマウンテンとグレート・オーシャン・ロード、メルボルン10日間
出発日：1/7、2/11、3/4
旅行代金：¥488,000～¥498,000（大阪発着）

ユーカリの大地及のハイキングと、豪州最高峰への登頂を楽し
オーストラリア大陸最高峰 Mt.コジオスコ登頂8日間
出発日：12/11、1/8、1/22、3/5
旅行代金：¥376,000～¥396,000（大阪発着）

アルパインツアーのホームページをご覧ください。　http://www.alpine-tour.com

効率よく憧れの4,000m峰登頂を目指す
マレーシア最高峰 Mt.キナバル登頂5日間
出発：大阪・東京
出発日：11/20
旅行代金：¥176,000

山小屋に2泊することで、余裕ある日程で登頂可能
Mt.キナバルゆったり登頂と南の島の休日6日間
出発：大阪
出発日：12/24、1/8、2/18、3/18、4/8
旅行代金：¥194,000～¥216,000

山小屋2泊でゆったり登山の後は、ボルネオ島の自然を満
Mt.キナバルゆったり登頂とネイチャーリゾート・スカウ8日
出発：大阪・東京
出発日：11/10、1/22、3/26
旅行代金：¥238,000～¥262,00

掲載のツアー以外にも多くの企画がございます。まずはカタログをご請求ください。

アルパインツアーサービス株式会社
〒550-0003 大阪市西区京町堀1-4-3 TCF肥後橋ビル2F
東　京／☎03(3503)1911　大　阪／☎06(6444)3033
名古屋／☎052(581)3211　福　岡／☎092(715)1557
札　幌／☎011(711)7106　仙　台／☎022(265)4611(転送)
(㈱)りんゆう観光)　広　島／☎082(542)1660(転送)
e-mail:osaka@alpine-tour.com

岩崎元郎さんと行く"地球を満足"シリーズ第26回
初夏のニュージーランド・南島パノラマ・ハイキング9日
旅行期間：12月3日(金)～12月11日(土)
旅行代金：¥498,000(大阪発・東京着)
※大阪/東京間国内線割引運賃制度あり
"地球の箱庭"とうたわれるほど、多様な自然の姿
見せるニュージーランド。連泊型のゆったりした日
で、初夏の南島の変化に富んだ大自然を満喫します

出張説明会　山の仲間がお集まりのときに、当社社員が海外トレッキングのスライドを上映し

近江の山　花暦 ―晩秋―

山本武人

晩秋の山中に彩る果実

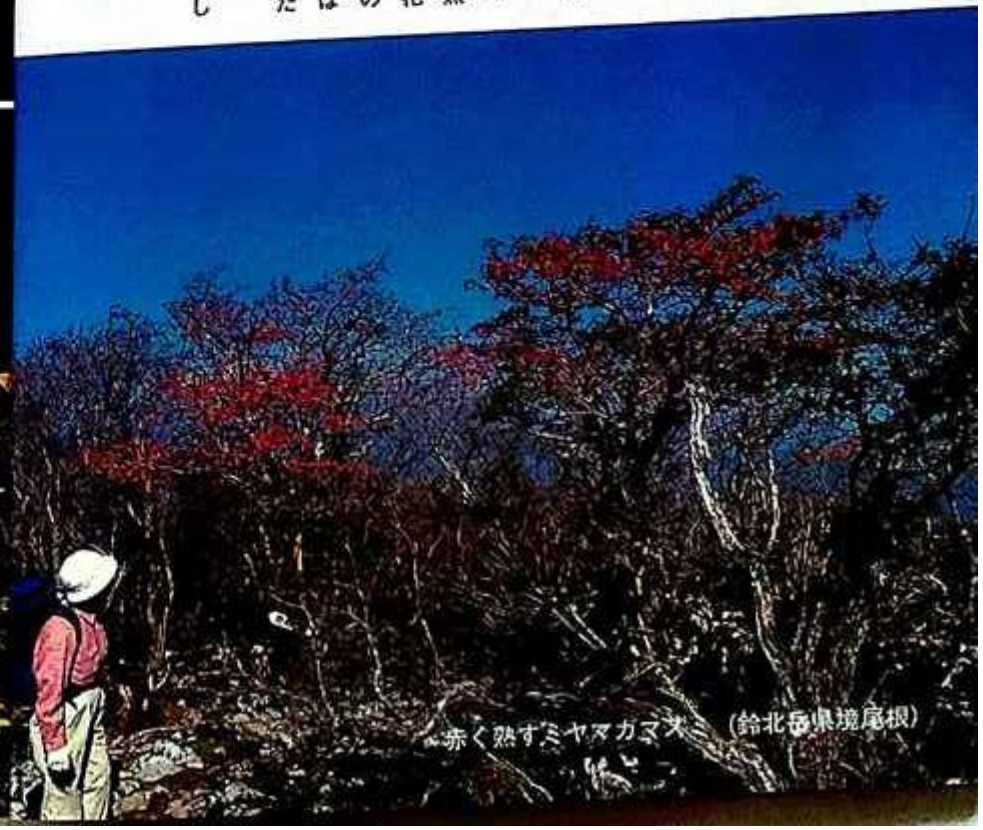
秋も深まると春から夏にかけて咲いた花たちが果実をつける。

鈴鹿・最高峰、御池岳丸山山頂では淡紅色のマユミの実が目立つ。ミヤマガマズミの実も赤く熟す。ヒオウギ（アヤメ科）の花は黄赤色。この花の実を見た時、花の時とは想像もつかない光沢のある黒色のかたまりであった。ムラサキシキブは近江の山ではよく見られる。真っ赤な花が咲いたように見えるのがタマミズキ。

今年の秋も山中でどんな果実に出会えるか楽しみである。

花が咲いたように見えるタマミズキの実（大津市・長等の自然歩道から）

晩秋の尾根にあったムラサキシキブ（鈴鹿・リョウシ尾根）



赤く熟すミヤマカマズミ（鈴北岳県境尾根）

Photo essay

熊蟄穴

題字　中田蘭石
撮影　由井　収
文　松永恵一

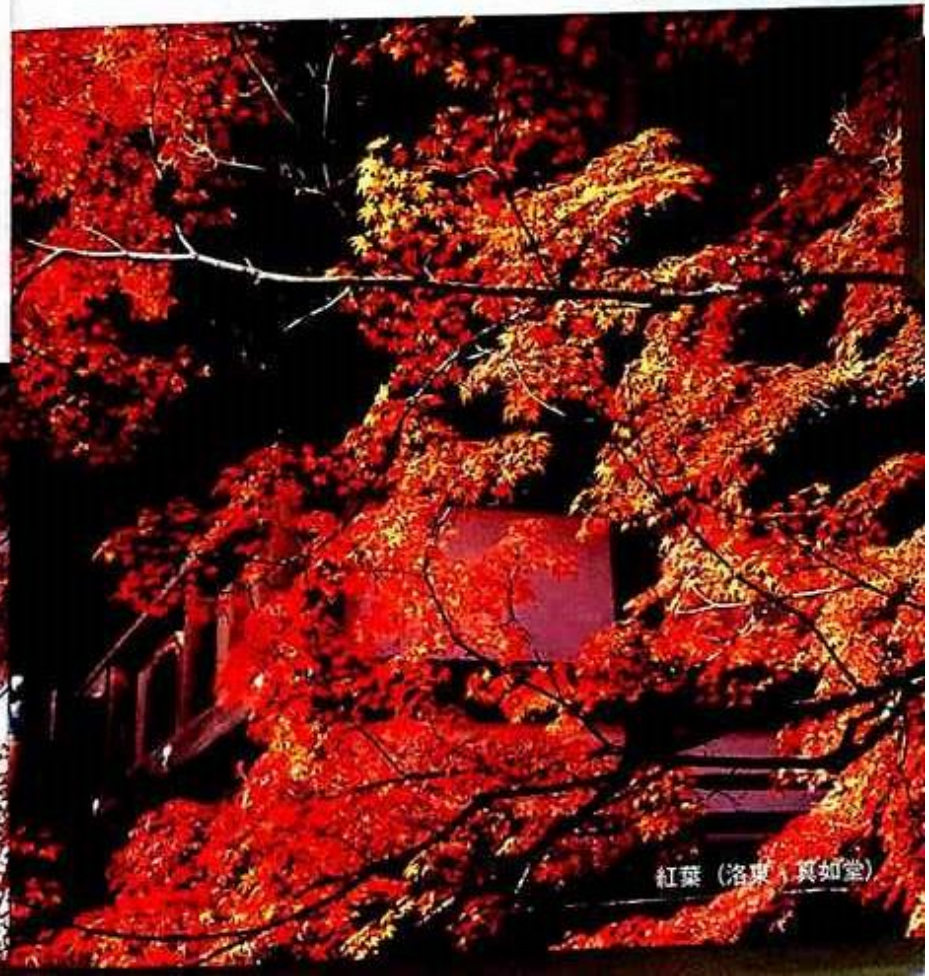
文殊塔を望む

青葉　色づき始め　色づく
一部見ごろ　見ごろ
真如堂の紅葉は20日を過ぎてから
「今年は期待できるかも・・・」
「おお！」「わぁー　綺麗！」
「う～ん　今年はよくないなぁ」
紅葉は一期一会
綺麗でハッとするような一葉
赤・黄・緑の三色に染まる花の木
一雨ごとに寒くなっていく

熊蟄穴（くまあなにこもる）

いっぱい食べて　蓄えて　冬眠
脂肪を溜め込むと腸内は異常発酵
血液は汚れ毒素が身体中に回る
クマザサを大量に食べ浄化する

燃える紅葉



紅葉（洛東 真如堂）

季節の実景

妙高

撮影　武市通治

晩秋

白樺

午後の時間（乙見湖）

妙高山朝景

水面きらめく（乙見湖）

朝映えのいもり池

権田山にて（四国・剣山系）　松田敏男

晩秋の杉峠（鈴鹿）　稲垣勝義

霧氷の尾根を行く（蓼科山地・平倉峰）　芝義

秋の能登ヶ峰（鈴鹿）　稲垣勝義

新ハイキング
関西の山
11・12月 2010（晩秋）
No.115

●表紙 「南アルプスを見ながら眠る」(山梨県) ……松田敏男
●口絵 近江の山「花暦」—晩秋—…… 山本武人
Photo essay「熊歯穴」…… 松永惠一
季節の実景「妙高」…… 武市通治
稲垣勝義・松田敏男・一芝義雄
「晩秋が美しい村」…… 奥田英一郎

三島池より伊吹山
(西村文男)

特集 晩秋に歩く山 3コース……編集室 12
①黒味岳……藪木伸人 14
②三国岳……奥田英一郎 16
③鎧倉山から峰床山……金谷昭 18

紀行
島岳と富士見ヶ原……田中明 22
八方尾根を八方池へ……木村太郎 26
ドライ・チンネ一周ハイキング……松田敏男 31
菜畑山・御正体山……磯部純 36
塔ノ岳・丹沢山・蛭ヶ岳……吉見英樹 41

連載紀行
標高による山の紹介 △△15㍍の山……松永惠一 47
三角点を訪ねて 池内山・池河内遥原へ……長宗清司 59
韓国登山シリーズ「道遥山」……磯部純 64
文学歴史ハイク「鹿ヶ谷・法然院を訪ねて」……飯木伸人 74

随想
天地境……鷲見守康 76

研究
旗振り通信の新研究「テレビで紹介された旗振り山1」……柴田昭彦 80

レポート
山の地名を歩く「赤石岳」……西尾寿一 82
無限江山「南の山、移行帯の山、北の山」……植上俊雄 84

コースガイド
①飯盛山周辺の散策道……松尾一郎 87
②高畑・猿ヶ山・比婆之山・イワス……
③石巻山……
④熊野古道松本峠（伊勢路）……

せせらぎ……84
サービスチェーン……87
山行計画・報告……91
会員の皆様へ……110
会員募集・新入会員紹介
訂正とお詫び……111
原稿募集・編集後記
広告案内……112

巻頭言

昨年2月、末期の胃がんと宣告されたが、済陽高穂（たかなり）著『今あるガンが消えていく食事』に取り組んだおかげで、1年8ヶ月を経過した今でも体調に何ら問題なく、元気に山歩きを続けている。9月の三連休は好天に恵まれ、剱岳を望みながら「立山三山から別山・大日岳」を楽しんできた。

9月25日、済陽先生が「がんの食事療法」の講演で関西に来られた際、わが家にも立ち寄ってくださった。「元気そうでとてもがん患者には見えない。でも、くれぐれも無理はされないように」と先生本人からお言葉をもらいうれしかった。これからも「食事療法」を続け、改善した体調を維持し、登山を楽しみたいと思っている。

そこで、今まで通り気を遣う編集を続けることには無理があると判断し、来年度からは雑誌としての書店販売をやめることにした。「新ハイキングクラブ関西」の会報誌としてなら編集も気楽にできるだろう。

（詳細については110ページ参照）

新ハイキング関西（代表）村田智俊

晩秋が美しい村 —木曾開田高原—

奥田 英一郎

御嶽に初雪が！

マナーのよい子供らのよう、カラマツ林

特集

晩秋に歩く山　3コース

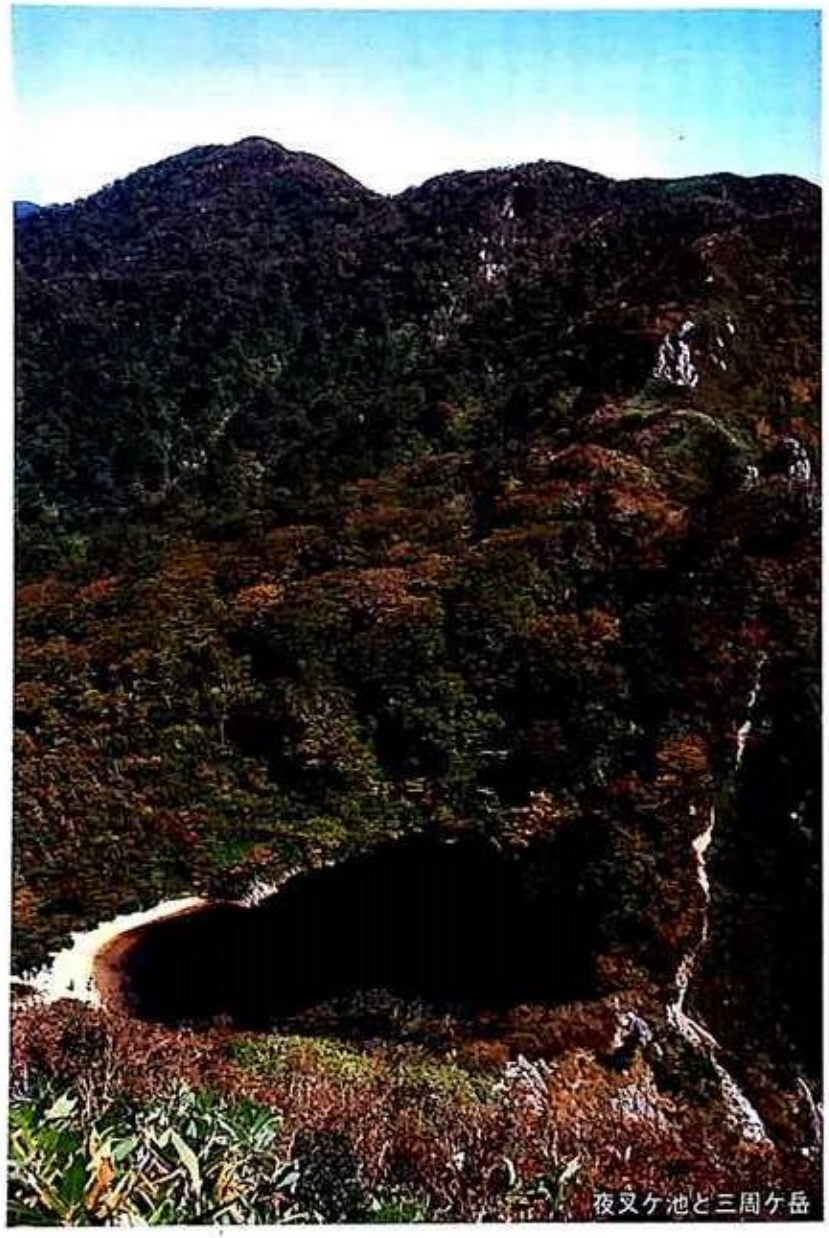
— 編集室—

① 黒味岳（屋久島）

② 三国岳（湖北）

③ 鎌倉山から峰床山（京都北山）

淀川の秋



夜叉ケ池と三周ケ岳

特集①　屋久島

黒味岳

淀川源流から花之江河を経て巨岩の頂に立つ

健脚コース（★★★★）

台風が来ない晩秋が屋久島登山のベストシーズン。さわやかな秋空のもと、ヤクスギに着生する広葉樹の紅葉を探し求めての山旅は、ここならではのもの。

いくつもの山小屋があるが、水源の森にある淀川小屋こそが屋久島にふさわしいものであり、ここで静寂の一夜を送ればすばらしい山旅が始まることだろう。何度も来れない山だから欲張って宮之浦岳から縦走する計画を立てる人が多いが、この島の登山の醍醐味は最高峰の頂に立つことだけではなく、森のヤクスギや巨岩、渓流、さらにはサル・シカなどの生きものとの会話にあり、それには体力的にも精神的にも余裕が必要であり、無理のない往復登山がおすすめだ。混雑する縄文杉や新高塚小屋、宮之浦岳よりも静かな山旅が楽しめるこのコースなど、晩秋の屋久島にふさわしい。

林道の淀川入口から森に入ると、いきなり原生林の真っ只中となって先への期待が膨らむ。ひと汗かくころに接道がくだり道となって淀川小屋へ着く。

翌朝、淀川源流に架かる立派な橋を渡り、急斜面の登りが始まる。急とはいっても屋久島の登山道は歩道と名がつくように山仕事のためにつくられた道で、一定の傾斜で登るので快適に高度を稼ぐことができる。尾根に出て森の中をひたすら進むと、木立越しに巨岩を乗せた山が見えてきたら小花之江河は近い。展望所を過ぎてひと登りで尾根を越えると湿原が現れる。時が止まったような静寂に包まれていて、屋久島へ来たことを実感するだろう。

さらにひと登りすれば大きく視界が開け、スケールの大きい花之江河の湿原と、その背景に堂々とした姿で黒味岳がそびえる。頭にはやはり巨岩を頂いていて印象的だ。ここは栗生、湯泊歩道やヤクスギランドからの登山道が集まる場所。思い思いの場所でゆっくりしよう。木道脇には山の神を祀る石の祠があって、この島に伝わる岳参りの風習を知ることができる。また運がよければ湿原にたわむれるヤクジカを見ることも。地域に根ざした山の歴史に接したり、生きものがいる自然の風景ほど心が和むものはない。

ここから宮之浦岳への縦走路となるが、立派な木道を登り切った所が黒味岳分かれ。一転してワイルドな道に登山者のモチベーションは上がることだろう。樹林のトンネルを抜けると巨岩の鎮場が現れたりでちょっと不安になるが、登り切ると岩尾根へ出て視界が開ける。岩の割れ目伝いに踏跡をたどると、垂直に立つ巨岩下の岩の台地に着く。

どうやって山頂へ登るのだろうとまたまた心配になるが、踏跡を裏へ廻り込んで難なく山頂へ。とはいえ岩の上は狭く、慎重な行動が望まれるが、そのぶんだけ感動は大きいものがある。

この島では雨で表土は流され花崗岩の一枚岩が地表へ姿を現すことが多い。その最大級がこの山にあって、最高峰宮之浦岳より100㍍ほど低いが、屋久島に最もふさわしい山頂といえるだろう。（榎上）

黒味岳山頂

▲コースタイム▼

淀川入口（40分）淀川小屋（1時間50分）花之江河（50分）黒味岳（40分）花之江河（1時間30分）淀川小屋（40分）淀川入口

＜地図＞

昭文社＝「屋久島」

花之江河と黒味岳

特集②　湖北

三国（みくに）岳

近江美濃越前を分ける藪山は余呉の中央分水嶺最高峰

健脚コース（★★★★）

淀川の源は栃ノ木峠であるが、流域最高峰三国岳の三角点ピーク左千方は展望皆無で水源の山にふさわしい。鳥首峠とも呼ばれ、尾羽梨や奥川並の人達が奥美濃へ行き来したルートのひとつにあたる。

地元の人達によって古道復活がはかられていて、今年じゅうには開通する見通しだ。このコースは来年の楽しみとして、今号では美濃側の紅葉が見事な夜叉壁を愛でながら夜叉ヶ池コルへ出て、中央分水嶺伝いに登るコースを紹介しよう。

夜叉ヶ池へは越前側の岩谷から登る尾根もブナ林が見事で、美濃側と甲乙つけがたいすばらしいコースであるが、池ノ又谷源頭の夜叉壁は関西では貴重な岩壁であり、秋は特に美濃側からがおすすめだ。

池ノ又谷の登山口は広い駐車場となっていて、標高は約760㍍。夜叉ヶ池コルが約1100㍍であるから標高差340㍍の登高となり、さらに道は最初と最後に急坂があるものの大半は搦道で登りやすい。ブナ林越しの夜叉壁を愛でながら進むと、道脇に幽玄の滝や昇龍の滝も現れたりして休憩場所に恵まれている。

コルに出て池を往復した後は、夜叉ヶ丸への岩がちで急な尾根を登る。振り返ると池が姿を現す。登り切ると尾根一角の小さな広場に出る。この山を、地域研究に熱心であった福井県の武生山岳会などでは夜叉ヶ丸と呼んでいたが、最近は夜叉ヶ池山ともいうようだ。

この先はササが道をふさぐようになるが、よく踏まれているのでかき分けて足元を確認しながら進む。登り返した所が独標1206であり、木立越しに目指す三国岳が見えてくる。再び分水嶺尾根を徐々にくだるが、1090㍍の鞍部までは思いのほか長い。登り返しは一気の登りとなるが、ひと汗かく頃に傾斜がゆるくなり、背丈程の深いササの円頂ピークへ着く。

展望もササの上にわずかに西隣の上谷山や周囲を取り巻く山が望めるだけで芳しいものではない。かつてやぶを漕いで立ったことがある左千方の大パノラマの頂とは残念ながら比べものにならない。三角点は南峰左千方にあり、ここ三国岳には枝に下がる標識板しかない。別名鳥首峰の名の通り、空に突き出た左千方への道が整備される日が待ち遠しい。とはいえ三国岳は淀川水源最高峰であり、江越美の重畳とした山並に囲まれ、静かな山の頂きに立った感慨にひたることができる。

さあ山頂の憩いもそこそこにして往路を戻ろう。道のりは長い。（榎上）

▲コースタイム▼

池ノ又谷登山口（2時間）夜叉ヶ池コル（30分）夜叉ヶ丸（1時間）三国岳（1時間）夜叉ヶ丸（30分）夜叉ヶ池コル（1時間30分）池ノ又谷登山口

▲地図▼

余呉トレイルマップ（2万5千分の1）

三国岳山頂

夜叉壁

特集③　京都北山

紅葉のブナ林が続く尾根を歩く

鎌倉山から峰床山

一般コース（★★　）

登山口は、比良武奈ヶ岳の登山基地で知られる坊村。京阪出町柳駅から京都バス（7時45分発）、JR堅田駅から江若バス（8時45分発）が運行されている。それぞれ9時前後には坊村に到着するので乗客は登山者が多い。いわば登山者のために運行しているようなものだ。

多くの登山者は比良の山へ登っていくが、鎌倉山へは反対西側に安曇川の橋を渡り、車道すぐの鎌倉山登山口に行く。

途中のブナ平までは尾根コースと鎌倉谷コースがある。どちらをとっても約1時間でブナ平に到着するが、尾根道コースのほうが急登も少なく歩きやすいので、谷コースよりは早く着けるだろう。

ブナ平から尾根道を上り1時間で鎌倉山（△950・5m）へ到着する。展望は期待できないが、自然林に囲まれて静かな山頂だ。登山者にめったに出会わないのでひとりで行くと心細くなるほどだ。

鎌倉山

ここからオグロ坂峠を目指して尾根道を進む。やぶが繁っていた頃は、オグロ坂峠まで2時間近くかかっていたようだが、今は約1時間もあれば十分である。ブナ・モミの大樹が多く、自然林のなかにアップダウンを繰り返して切り開きの登山道が続き、迷うような箇所はない。

オグロ坂峠は北の久多集落から八丁平湿原に越えてゆく峠だが、このコースを歩いていると、鎌倉山から峰床山への途中の単なる鞍部にすぎない。

ここから峰床山までは尾根道がまだ40分続くので、雰囲気の好ましいこの峠で昼食にしよう。峠から八丁平湿原側に少しくだれば水場があるので、ゆっくりするにはもってこいだ。

オグロ坂峠から峰床山までは尾根を徐々に登高するような形でしっかりと登山道が付いている。自然林が美しく紅葉もきれいだろう。左側に八丁平湿原も見えてくる。峰床山（△970・0m）の山頂が近づくとややきつい登りとなり、それも少しの辛抱で山頂広場に到着する。

いつ来てもここは登山者で賑わっている。八丁平湿原から、花背交流の森から、これからくだる峰定寺からと、峰床山を目指す登山道が集約している。皆子山に続く京都府標高第二位の名高い山だからであろう。

下山は、右記のコースのいずれをとってもよいが、晩秋で日暮れが早いので最短コースで安全な林道に下り着くことができる峰定寺を目指す。

南尾根道から俵坂峠を目指してくだる。すぐに八丁平湿原との分岐鞍部に下り立ち、まっすぐ登れば展望の良い高みに着き、フノ坂峠との分岐になる。右に俵坂峠への道をとってくだれば林道に下り立ち、林道を横切ってそのまま尾根道をくだっていけば俵坂峠だ。峰床山から俵坂峠まで30分もあればよいだろう。

峠を右折して下の林道に下り立ち、まっすぐに進めばナメラ谷の登山道になる。自然林がすばらしく、晩秋の頃は紅葉もきれいだろう。やがて寺谷林道出合に着き、後は夕暮れの林道を峰定寺にくだっていこう。

京都バスの大悲山口バス停（最終17時16分発）までは、峰定寺から約20分はみておく必要がある。　（村田）

＊このコースは、11月21日の新ハイ例会で実施する。

＜コースタイム＞

坊村バス停（5分）鎌倉山登山口（1時間）ブナ平（1時間）鎌倉山（1時間10分）オグロ坂峠（40分）峰床山（10分）分岐ピーク（20分）俵坂峠（50分）寺谷林道出合（15分）峰定寺（20分）大悲山口バス停

＜地図＞昭文社＝「京都北山」

随想 山のエッセイ ――

天地境

鷲見　守康

富士山には突然風景の変わる地帯がある、と言われている。標高2200㍍から2500㍍付近のあたりで「天地境」とも呼ばれている。要は、森林限界線のことだと思うのだが、実際にこの地帯に立ってみれば、昔の富士講信者などの間で天と地の境と呼ばれ続けた意味がわかる気がする。

この森林限界線に沿うように、御中道というものがある。富士の山体を一周する全長25㌔の登山道で、富士講の信者の中では、富士山頂に三回以上の登頂経験のある者のみに許された修行の段階だそうである。

この御中道コースの最大の難関は「大沢」であり、崩れが拡大すると共に、江戸時代には標高2800㍍付近にあった経路が、昭和30年代には2300㍍の下方へと移され、昭和52年に起こった滑落事故を契機に、ついに大沢の通行は禁止されてしまった。

したがって、現在では一周することは無理だとされており、一般的には富士吉田口五合目から大沢崩れまでの往復コースとして歩かれている。昔歩かれていた全体コースの四分の一から三分の一位に縮小されたことになろうか。

富士吉田口五合目からの前半は、瓦礫地帯ではあるものの、よく整備された水平の遊歩道であり、展望のすばらしさは圧巻である。

特に「御庭」と呼ばれる付近から眼下に朝霧高原と天子山塊、富士五湖と御坂山塊、その背後に南アルプスと八ケ岳を見下ろし、雄大な富士の山肌を仰ぐ景観は、まことに壮快である。この遊歩道は、御中道から離れてくだり、天狗の庭と言い伝えられている「奥庭」に達しているが、このあたり、富士山の中でも屈指の美しさだと思われる。

御庭を過ぎたあたりからの後半は、樹林帯と突然眼前に現れる崩壊沢の繰り返しである。そして、コース最終の大沢崩れは、頂上の剣ケ峰直下から広がる大崩壊であり、まさに地表の割れ目といってもいい。

富士には、地球のドラマチックな風景と息吹とが存在する。こうした富士の森林限界の驚くべき風景を、古人は「天地境」と感じたのかもしれない。そして、天地境に立つことで、おのれ自身を見つめようとしたのだろうと思うのだ。

最近「山ガール」とか「山ボーイ」と呼ばれる若者達が富士山を目指しているという。テレビの取材に答える彼らの「山登りもまずファッションから」という発想にはとまどいを禁じ得ないが、30歳代の胸元も露わな女性が、レポーターの「なぜ富士山に登るのか」、という問いに対し「自分の何かが変わるかもしれないから」と笑顔を返したのが印象的で、日本人にとっての富士山というものがいくらかわかったような心持ちであった。

ところで、富士山は氷河期以降の新しい火山であるがために植生等は未発達であり、高山植物も乏しい。

しかし、天地境を歩くと、立派なダケカンバとナナカマドの林が出現し、低木にはハクサンシャクナゲの大群落、林床には、おびただしいコケモモの群落があり、目を見張るばかりだ。コケモモの群落はとにかくすごいもので、奥庭山荘では、このコケモモの実を大量に収穫し、手づくりのジュースを提供しているほどだ。コケモモの群落には、ベニバナイチヤクソウも混在し、その群落もまた見事である。

そんなダケカンバ林を抜けると林は突然消え、今度は頂上まで続くスコリア（火山礫）の斜面にカラマツとオンタデなどしか見られない、荒原となる。

天然のカラマツ林というと、他では浅間連峰で出合うくらいであるが、富士の天然カラマツ林の規模は、たぶん日本一なのだろう。あちこちの山で見る植林のカラマツとは異なり、天然カラマツの姿はいかにも個性的でかつ野性的である。様々な姿をしたカラマツを眺めて歩くだけでも実に楽しい。

緑濃いダケカンバ林と、火山性の荒原とが交互に出現する天地境の植相は、実は地質と密接に関係しているのだという。ダケカンバ林は溶岩が地表に現れている場所であり、カラマツとオンタデはスコリア原というように、大変鮮やかに分かれており、興味は尽きない。

率直に言って、富士山の自然はおもしろい。富士登山の人々のマナーの悪さと砂埃のひどさに閉口した体験から、今は、再び山頂を目指すつもりはないが、富士山の自然を見つめ続けた後、いつか改めて登頂の必要性を感じることがあるかもしれない。

紀行

櫛田川中流の展望台

烏岳と富士見ヶ原

薮木伸人

飯南

烏岳は、松阪市飯南町と多気町（旧勢和村）との境に位置し、その三方で櫛田川が曲流している。登りやすく、豊かな自然環境を有するこの山には、これまでに十回登っている。うち五回は飯南町立梅から、あと五回は多気町波多瀬から往復した。

波多瀬からの道が整備される前は、西側の立梅登山口に車を置いて登っていた。国道166号から櫛田川対岸へ桑瀬橋を渡り、左折すると、少し先に登山口がある。この桑瀬橋下から下流の崖にかけて中央構造線が広い帯のように通っていて、緑色片岩、ミロナイト、石墨千枚岩の露頭を見ることができる。烏岳を取り巻く櫛田川の流れも、地殻変動の影響を受けてきたことだろう。

五箇篠山城跡から見た烏岳

立梅登山口から登り始めて少しの間、舗装された急坂があるが、その後は山道になる。50分程で稜線のT字路に達し、右折して15分進むと、反射板と東屋のある展望台に出る。西側と南側の展望がよく、蛇行する櫛田川と、棚田や茶畑の広がる景色がすばらしい。

飯高山地の東端に連なる局ヶ岳から白猪山の稜線上には、尼ヶ岳、大洞山など美杉・伊賀の山々が頭を出し、南西方向は、はるか台高主稜、大峰まで見通すことができる。昔は、反射板の下から眼下に櫛田川の流れが一望できたのだが、今は樹木がのびて少し見づらい。しかし、川に育まれた茶どころの風景は、変わらず眼前に広がっている。

烏岳山頂の展望台

T字路まで戻って、そのまま10分も登れば烏岳山頂である。標高は545㍍。こちらは、十数年前にはほとんど展望がなかったが、その後の間伐で南西から北東の展望が開けた。丸太製の展望台も設置されている。台高、度会の山並や旧勢和村の集落、五箇篠山城跡などが見える。櫛田川が曲流しているため、同じ場所から南と東の川面を遠望できるのがおもしろい。

山頂から北東へ少しくだると、大日如来の祠があって、大日山とも呼ばれているようだ（波多瀬からの登路は、山頂と大日山との間に上ってきている）。ここにも東屋があり、立木の間から波多瀬の集落や松阪の市街地、大明神山などを望むことができる。

波多瀬からの登路は、集落の最奥にある八柱神社が起点（駐車地）となる。舗装路を7分進み、三叉路になった所が登山口で、右手の西コースが、よく整備されている。7分程入ると水場があり、この後は林間の登りが続く。ハリギリ・ホオノキ・ミズキなどの木々のなかにあって特に目をひくのは、さくれ立った樹皮をもつアサダの木だろう。水場から登ること50分程で、No.12送電鉄塔下に出る。

ここから山頂までは5分だが、景色を眺めて一服したくなる場所だ。局ヶ岳から白猪山、尼ヶ岳や大洞山の頂が、ここからも見える。

烏岳は植林に覆われているものの、雑木林も残っており、多様な動植物が生息している。蝶に限っても、キアゲハ・クロアゲハ・コミスジ・クロコノマチョウ・アカタテハ・アサギマダラなど。鳥では、ウグイス・メジロ・ヤマガラ・アオバト。ホトトギス・ツツドリなど。キツツキのドラミングやサンコウチョウの声も聞いたことがある。

春から秋にかけては、草木の花が数多く見られる。春は、ヤマザクラを始め、五種類程の木苺、クロモジ・シュンラン・キランソウ・ヒメウズ・アケビ・キジムシロなど。5月には、ウツギ・エゴノキ・マタタビ・スイカズラ・タツナミソウの花。6月には、コアジサイが咲き誇り、波多瀬道では、サワギク・シライトソウ・アカショウマ・イチヤクソウ・ギンリョウソウも見られる。7月下旬には、オカトラノオ・キ

キョウ・オミナエシ・カワラナデシコ……。

十年以上前に秋の七草を探しながら登ったときには、フジバカマ以外の六種が見られたが、今もあるだろうか？10月中旬から下旬には、そのフジバカマの近縁種ヒヨドリバナや、キンミズヒキ・ツリガネニンジン・コウヤボウキ・リュウノウギク・アキチョウジ・ナギナタコウジュ・ヤクシソウ・イヌショウマ・リンドウといった秋の花々に彩られる。山頂直下ではヤマハッカ、大日山手前ではヤマシロギクとシロヨメナの群落が目立っていた。

秋には、茸もたくさん姿を現す。中でも、ホコリタケやシロッチガキは、おもしろい形だ。

紅葉は遅く、12月になってから、波多瀬道がよい。この波多瀬は、江戸時代の本草学者、野呂元丈（1693～1761）の生誕地である。集落内の中山（120㍍）に、「薬草薬樹園」が整備されているほか、「元丈の館」で、薬草入りの足湯に浸かることができる。歩いた後、立ち寄るのにもってこいだ。

波多瀬と立梅とはけっこう離れているので周回コースを歩くのは難しいと思っていたが、あるガイド本に、立梅用水沿いを歩いて1時間50分かかる旨の記載を見つけた。立梅登山口から用水沿いの道に出るためには、一度桑瀬橋を渡り、しばらく左岸の国道166号を歩かなければならない。国道に至る直前に、「粥見井尻遺跡」がある。ここでは、96年9月に、縄文土器や石器とともに、日本最古の土偶が発見されている。竪穴住居が復元されており、中も見学できる。ここから茶畑越しに見る烏岳の姿は、なかなかよい。

国道沿いには道の駅「茶倉駅」がある。小高くなっているので、ここからの烏岳と櫛田川の眺めもなかなかのものだ。川の両岸で高低差がずいぶんあるのは、ここに中央構造線の断層帯が通っているからだそうだ。

（平成16年6月5日、平成17年10月12日他歩く）

＜コースタイム＞

立梅登山口（1時間）烏岳

波多瀬登山口（1時間10分）烏岳

＜地形図＞2万5千＝横野

烏岳の南に、国道368号の桜峠を隔てて、富士見ヶ原の「原生つつじ園」が広がっている。この辺りには、元々ヤマツツジやモチツツジが群生していたらしいが、今では植栽も含め、3・7㌶にわたって咲くという。02年頃、一帯が整備されて、木のチップが敷かれた遊歩道や立派な展望櫓が出来た。

桜峠から上っている車道を終点の駐車場まで進むと、そこから10分も登れば展望櫓に着くが、桜橋の近くからと、旧勢和村車川からも、歩いて登れる道があるようだ。桜橋近くから登る道は、六丁半まで舗装路で、残り六丁半が山道のようだった（「点の記」記載のルートと思われる）。友人によれば、勢和側からの道も、ほとんどが舗装林道だそうだ。富士見ヶ原に至るまでにも小さな展望台があって、そこは「高根山」と呼ばれているらしい。

駐車場に立つ案内板を見ると、「冬の晴れた日、富士山が見えます」とあり、これが山名の由来になっている。ある本によれば、徳川家康は、「不死身」に通じる「富士見」地名を重要視していたというが、古人の富士信仰には、そのような祈りも含まれていたのだろう。

富士見ヶ原の展望櫓

標高386㍍に立つ展望櫓から東には、伊勢、多気、勢和方向、北には、翼を広げたような穏やかな山容の烏岳が見える。ツツジの頃には、規模は違うが葛城山から金剛山を眺めたときのようだ。圧巻は、西側に目を向けたときだ。櫛田川の対岸、茶畑が広がる粥見の里の背後に立ち並ぶ山々は、鉄塔を載せた畑井の頭、鋸鋒局ヶ岳、栗の木岳、修験業山と連なっている。地元飯高では、局ヶ岳を「だけさん」、栗の木岳を「西だけさん」と、親しみを込めて呼んでいた。二山の裾野に川霧が立ち込めたときなどは、幻想的な景観が広がる。

展望櫓から林に入り、南の尾根にのって高所を目指すと（道らしい道は無いがやぶ漕ぎはせずに済んだ）、10分程歩いた所に、二等三角点「桜峠」（441・1㍍）がある。展望はない。登頂プレートには「富士見ヶ原」「富士見山」「富士見台」と、三通りの表記があった。「点の記」には、「桜橋より東方約300m」から「小径」を「約50分（約2㌔）」登って到達する旨が記されている。（平成14年11月30日、平成22年4月29日ほか歩く）

＜コースタイム＞

駐車場（10分）富士見ヶ原展望台（10分）三角点「桜峠」

＜地形図＞2万5千＝横野

烏岳や富士見ヶ原から見えている五箇篠山城跡は、旧勢和村中心部の朝柄、古江の境に位置している。「ゆとりの丘」駐車場に車を停めて案内板を見ると、「頂上まで250m」とあり、階段を登って10分とかからずに登れる。

頂上からは、櫛田川の流れや堀坂山が望めるほか、烏岳山頂の間伐地も見えていた。初夏には、斜面にササユリの花が開いている。近くの川原では鶏冠石を産し、鉱物観察のポイントとなっている。

紀行

夏の思い出

アサギマダラと冬衛の詩に触れて

八方尾根を八方池へ

奥田英一郎

白馬

今年は「花と展望と温泉」の山旅はどうでしょうと、逗子に住むHから5月に早やばやと計画書が届いた。

昨年はミズバショウが見事な山里の鬼無里奥裾花を歩いて、翌日は大糸線沿いの「ちひろ美術館」「碌山美術館」などを訪ね、近くの可愛い道祖神などを巡り歩いた。

大学時代にワンゲル部に所属して、けっこう厳しい登山をしてしたHだが、職を退いて10年にもなるとそんなにハードな山歩きもしていなかったようだ。そんな彼が半病人の私に気を遣ってか、あまり無理のない楽しい計画だった。

白馬にある行きつけのペンションに三連泊し、アルプス平にある高山植物園とか岩岳のユリ園とかを訪ね、八方尾根を歩いて山の花を楽しみながら、できれば姫池も行ってみたいというものだった。しかも下山後は温泉に浸るという魅力ある計画だった。

後日、具体的な日程と共にきれいな写真の入った資料も送られてきた。

8月初旬の暑い日に大阪を発った。特急「しなの」には大阪の泉北に住むY嬢もいっしょだった。京都からM、名古屋からは浜松に住むK嬢も乗り合せた。Hは長野新幹線で長野に出てバスで白馬に向かい、同夜ペンションで会うと言っていたが、南神城駅で降りると、ペンションの主人とふたりが笑いながら私達一行を迎えてくれた。

早速姫川源流へ。清流に揺れる水中花バイカモを訪ねた。緑陰の冷たい流水に咲く花は心洗われる気がした。ここは残雪の季節にはフクジュソウが、5月にはニリンソウの群落が咲き誇る

想いの源流である。

その夜は久しぶりに会うオーナーの家族達と、近所でスキーのインストラクターをやっているFさんの奥さんも交えて和やかな歓談で時が経つのも忘れる。マナーのよい園児達10人ばかりも若い女性の先生に連れられて可愛らしかった。

翌朝、天候はいまひとつだったが予定通りアルプス平へ。テレキャビンと展望リフトを乗り継いで、標高1676mにある「地蔵の頭」に登る。赤いシモツケソウが咲き乱れていた。あたりは濃いガスに覆われていて山の稜線は見えなかったが、一瞬雲が切れて唐松岳山頂が姿を現した。

地蔵の頭は3mばかりの大ケルンである。上部に遭難防止の鐘が、下部には遭難者の霊を弔う地蔵が安置されている。小遠見山へ少し山道をたどると、小さな台地に何体かの慰霊碑が建っている。"山を愛し　山に溺れ　永遠に眠る　魂あわれ　父母"と刻まれた文字が痛ましく胸を打つ。

眺望も期待できないとかで小遠見山は割愛し、小さな鞍部から地蔵沼への道をたどる。ギボウシ・キンコウカ・オニユリなどが咲き乱れるなかに小さな沼があった。ニッコウキスゲも彩りを添えていた。沼の中にはお化けのようなばかでかいミズバショウの葉株が幾つかあった。

霧のなかの木道をさらにくだると五竜。高山植物園の上部に出た。周遊路が整備されていて歩きやすかった。ヤナギラン・ハクサンイチゲ・クワガタホトトギスなどが分類されて群植されていたが、何となく不自然で野趣に欠けるのが惜しかった。しかしアルプスの女王といわれるコマクサだとか、ヨーロッパアルプスに咲くエーデルワイス、さらにヒマラヤに咲く青いケシも咲いていて、少し時期が遅かったが珍しくて楽しめた。

午後はペンションの主人の車で岩岳に向かう。ゴンドラリフト「ノア」で一気に山頂（1289m）あたりまで登る。広い円頂一帯には色とりどりのユリが咲き乱れていた。しかしなぜかユリの香は薄かった。山稜は相変らず見えなかったが、反対側の山麓には集落が木細工のように見下ろせた。それがユリの花のかなたに望まれ、景観はな

岩岳のユリ園

かなかのものだった。ユリは50種、50万株というから咲き誇る眺めは圧巻であった。

下山後はもちろん温泉である。「倉下の湯」は古い趣の木造の建物で、湯槽の半分が屋根で半露天といった感じだが、緑の自然を眺めながら黄土色の源泉かけ流しの湯に浸るのはぜいたくだった。その夜はわれわれ一行と翌日五竜岳に登るという若い夫婦だけだった。

3日目の天気もさえない日だった。それどころか早暁にひと雨降ったようである。予報ではのち晴れるとかで、思い切って今回のメインディッシュの八方尾根へ出発する。ありがたいことにこの日も宿の主人が黒菱平まで送ってくれて助かる。第3ペアリフトとグラードクワットリフトを乗り継いで八方山荘前に着く。昔、クワットリフトが無かった頃、残雪期にぐっすりと雪に覆われた尾根を唐松岳まで歩いた時は快晴の日だったが、きょうは厚いガスに覆われている。登るにつれてガスが濃くなってくるようだった。まるで夕闇のような中を歩いているようだ。しかし視界がきかなかったことが逆に幸いしたのかもしれない。それは、帰りにくだってきて同じ場所から尾根を振り仰いだ時、八方池のあたりははるかな高みのさらに奥だった。この時、あの高みを見上げていたら、あっさりとリタイアしていたかもしれなかった。

登るにつれて少しずつガスが薄らいできた。下界の方は雲が切れてフォッサマグナ（大地溝帯）の広い沢筋が開けてきたのである。歩きづらい転石と木道は早朝の雨に濡れていて気を遣った。だが急坂の両側に咲くハクサンシャジンとかキンコウカなどの花には慰められた。第二ケルンには雪田が残っていた。

次第に高山の気配が漂ってきたと思った頃、八方池の近くだった。池の手前にも残雪があった。草地にはマツムシソウだとかミヤマアズマギクだろう、それによく見ると可愛いチングルマ・イワカガミ・ユキワリソウなどがひっそりと咲いていた。自分が好きなせいか、マツムシソウが優しい風に揺れているのを見ると心が和んだ。

池に着いてほっとした時、周辺が少し明るくなってきたようだ。だが正面に見えるはずの不帰の険は姿を現わさなかった。しかし花の多い池畔に立つと何となく心が癒された。

日が池をバックに記念写真を撮ろうと言って、近くにいた若いカップルに声をかけたのだが、何とふたりが喋っているのは中国語だ。思わず背学んだ中国語で話を交わしたのである。お互いに思わぬ機会となって話が弾んだ。ふたりは香港から来ている学校の先生で、夏休みを利用して日本を旅行しているということだった。京都や高山へも行ったと話していた。別れ際に「日本はどうか」と尋ねると、親指を突き上げて「タイハオラ（すごくいい）」とニコニコしながら答えてくれた。

池をぐるっと廻る時、突然目がきれいな蝶がいると言うので近づいてみると、アサギマダラが薄紫色のクガイソウの花の上で羽を休めていたのである。「これはアサギマダラという蝶で、海を渡るそうなのだ」と言うと、いっしょに見ていたY嬢がすかさず「蝶が一匹ダッタン海峡を渡って行った」ですねと言う。安西冬衛の有名な一行詩を知っていたのだろう。おそらく学校で学んだのを覚えていたのに違いない。ふたりはゆっくりと羽をひらひらさせる蝶をまじまじと見つめていた。知らない人も珍蝶に見入っていた。

あれは何年前になるだろうか。初夏の大峰の和佐又ヒュッテ前の草むらでこの蝶を初めて見た。その時は名前も知らなかったのを、ヒュッテの奥さんが教えてくれた。家に帰って図鑑で調べたが、海を渡ることは書かれていなかった。何年か後にこの蝶がマーキング調査で長距離移動することがわかったと新聞で報じられた。それからしばらくは忘れていたのだが、つい3年ばかり前の7月末、金剛山の展望所の裾の台地で久しぶりにこの蝶に出会った。ゆっくりと舞い上がっては白い花に止まるのを繰り返しているのをじっくり撮影したのである。

帰りに千早園地にある「星と自然のミュージアム」に立ち寄って職員にアサギマダラのことをいろいろ教えてもらった。生態はまだよくわかっていないということだったが、捕蝶してマーキング後、放蝶するイベントを考えているということだった。その後あの計画はどうなったのだろう。

八方池畔にいたアサギマダラはどこへ移動したのだろう、気になることである。その日結局、不帰の険は姿を現すことはなかった。私達はあきらめて第三ケルンまで上って、元来た道をくだった。ストックを二本使いながら登りと変わらないくらいの時間をかけてゆっくり下りた。稜線の眺めはだめだったが、山麓と東側の山並は薄っすらとではあるが眺められた。雨飾山・焼山・火打山・妙高山・高妻山・戸隠山・黒姫山などを探しながら楽しんだ。それらの山はいずれも曾遊の山々で懐かしかった。

その日は飯森駅近くの「岳の湯」に寄った。二つの湯槽とサウナがある透明の湯だった。この白馬山麓にはたくさんの温泉があるが、私は白馬雪渓に行く途中の「おびなたの湯」が素朴な露天風呂でお気に入りである。

山旅の最後の夜は鹿児島から来たという勤労者山岳会グループとの同宿で

賑やかであった。

大阪に帰る日も天気は晴れなかった。榛池を巡るという一行と別れて、ひとり塩の道を歩いた。千国街道といわれる古道を歩きながら、安西冬衛の詩を思い出していた。「春」という題のこの詩の正しい表記は「てふてふが一匹 韃靼海峡を渡って行った」。韃靼海峡はアジア大陸とサハリン（樺太）との間の海峡である。タタール海峡ともいわれている。韃靼はモンゴル族の一種族のことである。一匹の蝶という小さな生き物が、茫洋とした大海原、しかもどこか異境を連想させる広大な海峡に向かって挑んでゆく姿は実に感動的な驚きを覚えるのだが、冬衛はそんな蝶を見たのだろうか。冬衛が当時海を渡る蝶がいることを知っていたとは考えられないのだ。モンシロチョウが白い雲のような群れになって海を渡るのを本で読んだことがある。冬衛の蝶は「一匹の蝶」である。ウラナミシジミという小型の蝶が津軽海峡を越えたということも聞いたことがあり、北海道までは行っているが果たして宗谷海峡を越えるかどうか。私が出会ったアサギマダラはいずれも山間の高地である。ならばひょっとするとダッタン海峡を渡ったのはアサギマダラかも？　それにかの蝶はいつも単独だった……などとひとりよがりなことを思ったりしながら里道を歩いた。

クガイソウとアサギマダラ

千国街道をひとりで歩く気分はよかった。百体観音、牛方宿・番所……と往時の面影を偲びながら歩く。その時ふっとポエジーに大切なことは詩人のイマージネーションである、と思った。ダッタン海峡を蝶が実際に越えるかどうかなんて詮索することはあまり意味がないことなのだ。奥行きと広がりに不思議な感動を感じさせる詩だと思うことこそ大切なのだろう。

この詩にもし私見を加えるならば、15年間にわたる大陸住まいの大速において創作されたものだということを思うと、海を隔てた冬衛の深い望郷の想いを感じるのだがどうだろう。

南小谷駅の近くの店でトロロ汁でビールを飲み、昼食用に野沢菜の入ったおやきを買った。大糸線では深い姫川の流れと、濃い緑の山々を感慨深く眺めていたのだが、糸魚川で北陸線に乗り換えたあとは、日本海も、鄙びた名前の駅々も全く知らないで眠ってしまったようだ。

富山から快適に走る特急の中で気持ちのよいリズムに揺られながら山旅のことを振り返った。優雅な山旅？　やいやそんないいものではない。懶惰な山遊びと言ったほうがいいかもしれない。私なりの夏の山が終わったのである。

紀行

北イタリア・ドロミテ山塊

ドライ・チンネ一周ハイキング

ヨーロッパ

金谷　昭

平成18年の新ハイ関西の海外例会「スイス・アルプス」に参加し、ヨーロッパ・アルプスの山岳景観は言うに及ばず、美しい山村風景、多くの世界遺産を初めとする歴史の重み、交通の利便や垢抜けした宿泊施設にはすっかり魅了されてしまった。

ヨーロッパ・アルプスの東端に当たるオーストリア南部やイタリア北東部にもスイス・アルプスより高度は低いものの魅惑的な山塊が多くある。イタリア北東部のドロミテ山塊は高度は3000メートル前後。一部を除いて氷河は無いが、乾燥した石灰岩の灰褐色の峨々たる異様に荒れた岩峰群で構成され、ヨーロッパ屈指のロック・クライミングの本場として世界中のロック・クライマーを虜にしてきた。クライマーでなくても、ドライブウェイやロープウェイ・ゴンドラ等の交通機関が発達しており、一部の岩峰の頂上や、それら岩峰群の山腹に広がる緑の草原にアプローチでき、比較的容易に山歩きを堪能することができる。

その中にあって最も人気のハイキングコース、三つの岩峰をもつドライ・チンネを巡る一周コースを歩く機会を得た。

標高約2300メートル内外のテーブル状の高原台地に突き刺すように最高峰をチマ・グランデ（日本の剱岳と同高度の2999メートル）とする、三つの岩峰がそびえ立っており、その付け根の比較的平坦な高原台地を1日で歩く。

トランペットゲンチアン（リンドウ科）

前夜の宿泊地はかつての冬季オリンピック開催地コルチナ・ダウンペッツォ。そこから快適なドライブウェイを行くと、よく宣伝写真となっている、ソラビス峰を湖面に映す、美しいミズリーナ湖が出現する。湖を過ぎ、しばらく行くと料金所（普通車20ユーロ）を過ぎ、急な山腹を這い上がって行く。この地域は夏ともなればツーリングのオートバイやマウンテンバイクの走行が盛んで、カーブではドライバーは彼らを優先して慎重で安全運転に徹している。

オーロンツォ小屋は夏休み前の小学生の団体ハイキングも行われているらしく、大勢の観光客やハイカーで賑わっている。小屋前から灰褐色の大岩壁を見上げると首が痛くなるほど、あまりの大きさで近くからでは岩峰が三本には見えない。岩峰の裾野には高山植物が咲き、白い石灰岩で埋め尽くされている。

定石通り、反時計回りにラヴァレド小屋に向かって東方向に行く。緊急車輌も走行可能な平坦な幅広の砂利道となっているので、次のラヴァレド小屋（2390㍍）で引き返す大勢の観光客やマウンテンバイクに混じって、乳母車の家族連れや車椅子の身障者ハイカーが多く見られた。さすがに福祉先進国だけのことがある。

ラヴァレド小屋まではスニーカーでも歩け、周囲にはドロミテ山塊の見飽きぬ大展望が、道脇には高山の花が楽しめた。さらに左の大岩壁に目を凝らすと、黒い点となってよじ登っているクライマーが間近に望めた。

今は初夏の花シーズンの始まりだけに、濃紺のアルプス三大名花のひとつであるトランペットゲンチアンを始め、日本の皐月に似たアルペンローゼ、黄色のアルペン・ホビー等の高山植物が咲き乱れていた。

ラヴァレド小屋に来てドライ・チンネの三つの頂がよくわかる。トレ・チーメ（三つの頂き）デイ・ラヴァーレとも言われ、手前東からピッコロ（小2792㍍）、グランデ（大2999㍍）、オヴェスト（西2973㍍）と名付けられている。

この小屋から先はハイカーの世界となってぐんと人が少なくなった。少し登りとなってラヴァレド峠（2454㍍）では、今まで見えていたドライ・チンネの南面に代わって裏側（北西）の圧巻の山容が現れ始めた。

次のロカッテリア小屋へは、右のパ

ターノ峠（2619㍍）を捲いて行く中級者向きの水平道と、いったんくだって登り返す一般道とに分かれている。時間的に短いと判断して水平道をとったが岩屑だらけ。一般道では多く見られる高山植物は全く見られず、細かいアップダウンがあり、時間的に大差はなかった。なお、峠からバターノ峠に向かって10分も登ると、岩壁に第一次大戦当時のオーストリア兵の要塞塹壕跡があり、今日この平和な山岳地帯にも地続きの国境の過去の歴史が残されている。

ロカッテリア小屋はドライ・チンネ小屋とも言われ、意外に大きく三階建で一階は売店、二階は食堂、三階は宿泊棟となっている。この小屋の手前にイタリア山岳会の小屋が、そして少し背後には小さな池があり、優れた景観を醸しだしていた。

昼食を小屋前の屋外テラスでとっていると小雨が降ってきた。大きな小屋でも小学生の団体などで大混雑となったが、幸い軒下ベンチで先に昼食をとっていた日本人ハイカーのグループに同朋の誼みで譲っていただき、濡れないですんだ。

昼食が終わる頃、小雨も去って日も差してきた。小屋からはカール状の凹地（ピアン・ダラン）への急な下りとなる。ここが時計回りの際に急登となる所である。大岩壁を前にして下り立った谷は、運動場が大きくとれるぐらいに広い。ドライ・チンネからの小沢が流れていて、その湿地には高山植物が咲き乱れ、小休憩には最適であった。

小沢を渡っての登り返しはゆるやかで、次のフォルチェリーナ峠とメッソ峠とは大した高低差もなかったが、メッソ峠でドライ・チンネの北面とはお別れで、その山容を十分に目に焼き付けた。

峠からは周辺のドロミテ大岩峰群の眺望を楽しみ、牛が放牧されている花の多い草原の平坦道をたどり、スタート地点の駐車場に帰り着き、宿願のドライチンネ一周ハイキングを終了した。

（平成22年7月6日歩く）

《コースタイム》

オーロンツォ小屋10・20—ラヴァレド小屋11・00—要塞塹壕跡11・10—ラヴァレド峠11・15—ロカッテリア小屋12・40（昼食）13・30—ピアン・ダラン14・15—フォルチェリーナ峠14・50—メッソ峠15・05—オーロンツォ小屋15・50

ロッカテリア小屋からドライ・チンネ（北面）

標高による山の紹介シリーズ55

松田敏男

新ハイ関西115号

標高△△15mの山

八経ヶ岳（1915メートル 大峰山脈）
立山（3015メートル 北アルプス）
権現岳（2715メートル 八ヶ岳）

八経ヶ岳

八経ヶ岳は、比良の武奈ヶ岳や南アルプスの甲斐駒ヶ岳などと共に、繰り返し登った山のひとつだ。

残雪の多い3月末の雪の降るなか、弥山小屋の前でテントを張った単独山行は思い出深いし、オオヤマレンゲが咲く7月初旬は、二度共びったりの開花期に行けた。

秋に行った山の会でのテント泊初山行も八経ヶ岳だったが、何度も山頂に立ったわりに、山頂そのものの印象というのは、あまりない。

あのゴツゴツと岩角が出ている山頂が雪で平坦になっている頃を見計らって、テントでひと晩明かせば印象深くなるだろうなぁと思っている。

近畿地方最高峰の夜は、さぞすばらしいことだろう。

（平成5年7月4日歩く）

＜コースタイム＞
行者還トンネル西口（4時間）八経ヶ岳（3時間）行者還トンネル西口

＜地図＞昭文社＝「大峰山脈」

立山

雷鳥沢のテント場のいちばん奥にテントを張った。立山がさえぎるものなく見える位置だ。翌日は真砂岳を目指す。登山者の多い立山でも、このコースを登る人はほとんどいないようだ。別山を隔てた谷に向かって落ちている雪渓の上端が眩しく光り、その周りには黄や白の花々が咲き競っていた。真砂岳の山頂に立つと、別山の奥に隠れるような形で剱岳が望めた。

内蔵助カールの雪渓を見下ろしながら、立山の一角の富士ノ折立へ登る。富士ノ折立からは真砂岳の上に別山、そしてさらにその上にかぶさるような形の剱岳の姿があった。

最高峰の大汝山を越え、都会のようにごった返している雄山を通過する。団体客とすれ違いながら一気に一ノ越へくだり、右折してジグザグに数百㍍くだった所で右に分岐があった。その道に入った途端、また静寂が戻った。

真砂岳より剱岳

立山付近略図

しばらくは室堂への道から行き交う人々の声が聞えてきたが、ひとつ小さな尾根を越えれば完全な静寂が待っていた。見上げる立山の形は、ミクリガ池などから見上げるのとほぼ同じ形のおなじみの姿なのに、あたりに人影がさっぱり無いのが何とも不思議だった。

チングルマの群落のなかに下り立つと、小さな谷の向こう側に雷鳥沢のテント場が見え始め、また人を身近に感じる場所に戻ってきた。

（平成19年8月6日歩く）

＜コースタイム＞
雷鳥沢テント場（3時間30分）真砂岳経由大汝山（2時間30分）一ノ越の下より山腹道経由雷鳥沢テント場

＜地図＞昭文社＝「剱・立山」

権現岳

権現岳は2700㍍の標高がありながら、八ヶ岳核心部から少し南に外れているためか、登山者が少ない静かな山という印象だ。直接登るには火山特有の長い裾野の単調な道を登らなければならない。

山の会4人と夏の終わりに行った。車で標高1600㍍付近の観音平まで入ったから、長い裾野歩きもずいぶん軽減された。編笠山へ直接登る道を左に分け、青年小屋への道を登る。青年小屋横の乙女平テント場は広々としていて風情のある所だった。近くには清らかな水が流れる乙女の水場がある。

テントを張ってから権現岳を往復した。大岩で出来た山頂部は独得の雰囲気があった。北には赤茶けた岩肌の赤岳がそびえ立っている。その名前の由来に納得する姿だった。

翌朝、累々と重なる大きな岩塊の中を編笠山に登る。権現岳の左に赤岳などが望めたが、逆光で平面的な青墨色の世界だった。

（平成12年8月26日歩く）

＜コースタイム＞
観音平（4時間）青年小屋テント場（4時間）権現岳往復

＜地図＞昭文社＝「八ヶ岳」

紀行

テント山行

菜畑山・御正体山

田中明

道志

いつの頃からか、富士山は登るのではなく見る山だと勝手に思い込み、静岡・山梨県などの富士周辺の山へ通い続けてきた。

今回は、道志山塊の西方にある菜畑山を目指した。自然林が多く、登山者は少なくて静かな山歩きが楽しめるようで、黒々とした御正体山の左方に富士山が望める山とガイドブックが誘ってくれた。山と渓谷社の富士山から50キロ圏内の「富士の見える山ベストコース」の53座最終章の山旅でもあった。

アクセスの悪さから道志の山が最後になってしまい、テントを担いでの和出村到着は18時前になっていた。あたりは薄暗くなってきたが、水場のある登山口まで行って幕営することにした。

菜畑山山頂

このルートは、途中で水が期待できないので荷が重くなってしまう。菜畑山への登りは2時間弱、のっけから急登が続くが、送電鉄塔まで上がると、ヤマラッキョウ・ヤクシソウ・ノコンギク・タケニグサなどの山野草が見られるようになった。二分する道では直登ルートをとり、あたりに赤松が目立つ自然林が続くようになってからも急登が続くが、階段状の道になると山頂は近かった。

ヤマラッキョウ

コウシュウヒゴタイ

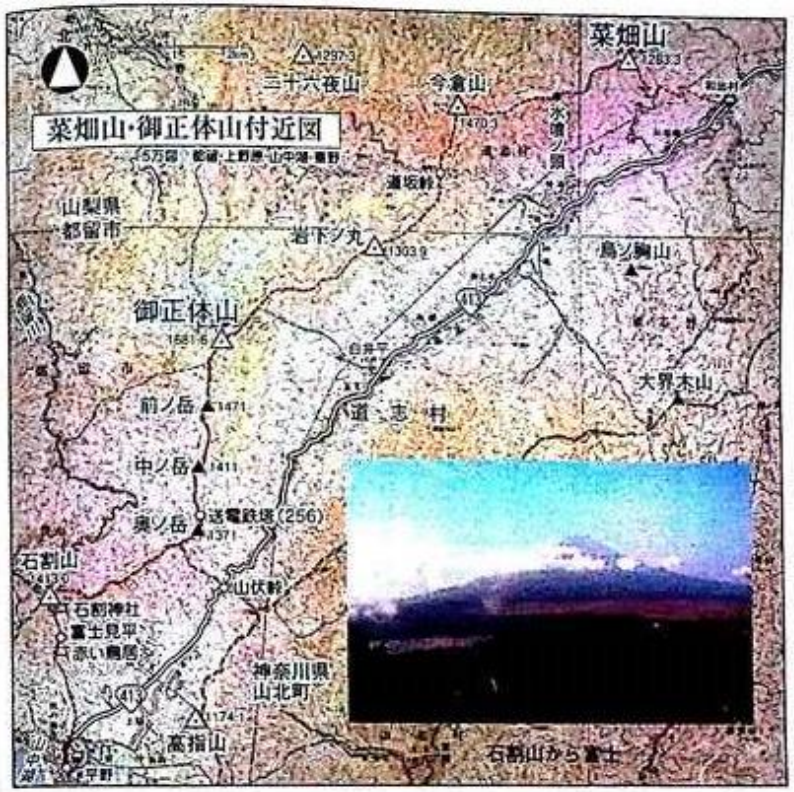
富士見山行最後の菜畑山に着き、コンクリート製の小さな東屋で湯を沸かしてのんびりすればすぐに元気回復だ。でも、南西の御正体山の肩に見えるはずの富士はいくら目を凝らしてもどこにもない。曇り空に加えてガスが立ち込めている。

一方、西丹沢の加入道山の向こうには大室山が頭を見せている。その奥の蛭ヶ岳はガスでやや苦しい。丹沢山塊の加入道山から大室山もそろそろ片付けねばなるまい。南の烏ノ胸山ははっきり見え、左奥には畔ヶ丸から大界木山に菰釣山の稜線も懐かしい。そんなことを考え、うなだれた目の先を見ればヤマラッキョウが咲き誇っているではないか。

このヤマラッキョウは、秋の山歩きに観察したい野草の中ではお気に入りのひとつである。草むらの中につんと突き出るように咲く様子はユーモラスである。こんな花姿が好きだ。さらにリュウノウギク・シラヤマギク・ノコンギク・アズマヤマアザミなどうれしい花畑があった。富士が見えなくてもこれだけのお花に囲まれたのだからと、満足の菜畑山を後にして唐沢尾根の稜線歩きの幕が開く。

ほぼ西向きに今倉山への稜線漫歩と決め込んでもまだ紅葉にはちょっと早い。レンゲショウマが登山道沿いに覆いかぶさるように咲き誇る8月にも来たいと思いながら、若いブナ林を楽しんで歩く。ゆるく登り出すと、北側にカラマツが立ち並ぶが黄葉には早い。大きめのブナに足が止まる。そこは水喰ノ頭のようだった。コースタイムよりずっと早い。30分で着いたが、これは地図の50分が誤りだろうと考えながら、自然林のなかを15分も行くと、コウシュウヒゴタイがちらほら見られた。軽快に何度かのコブをこなして今倉山へ到着した。9時という中途半端な時間帯の頂上だから人影はない。

この後も御正体山への長い行程が待っているので、ここでまたしっかり腹ごしらえをする。翌日の食料を考えず荷を軽くするため、可能な限り早めに



食料を減らしていくのが私の主義であり、どんどん消費していく。ここで25分を費やしてしまった。

急ごう、のんびりしすぎると予定の石割山までに暗くなる。気は急くが足がままならない。本来ならこの下り道から富士がしっかり顔を見せてくれるのであるが素通りも仕方ない。道坂峠までよく踏まれた坂道を一気にくだる。峠からは踏跡がすぐに細くなってしまうが、十分に調べているので気にならない。

やがてササ道になってきた。古いネット情報ほどでもなく、手入れされていて比較的短時間でササを抜け、またアップダウンを繰り返し、四等三角点に着く。無名峰だろう。

やせた尾根は伐採され、東側の眼下に道志集落が見え隠れする、松のある付近は檜が植林されたばかりであった。その中にナギナタコウジュが寂しそうに咲き残っている。さらに三等三角点でここが岩下ノ丸だろうが、それにしては標示もないなあと思いながら通過

した。その先の牧ノ沢山は標示にも出合わなかったし、その地点だろうということにも気づかなかった。

雑木林のやせた峠らしき所には白井平分岐の標示板があり、現在地が確認でき、この後の御正体山への登りに備えることができた。

登り一辺倒の御正体山までをフウフウ言いながら登っていると、あたりは樹林で暗かったが、そこだけ黄色い所があり、ヒトツバカエデが黄葉していてひときわ輝いていた。

樹林のなかの広い御正体山に着けば、「小田原さんぽ会」の旗を正面に集合写真を撮っている15人程のグループで賑やかであった。今倉山から3時間の歩程だった。

昨夜から誰にも会っていないわが身にとっては、長い長い寂間からの別世界の出会いのような気がし、かけられた声に元気に答えている自分がいた。真ん中のベンチが空いたので遅めの昼食をとる。デカザックを見たそのグループの人達から矢継ぎ早にいろいろと質問してくるが、わが方は昼食の準備が忙しい。

グループは、こちらが先ほど登ってきた白井平へくだると言って去っていった。小さな祠が祀られた御正体山に静寂がやってきた。リュウノウギクにヤマトリカブトが空間を飾っている。(ここで幕営したいな)との思いにかられたが、展望は得られない。満点の星空も狭くてどうかなと思い、やっぱり食事を早く済まそうと、熱いうどんにコンビーフやレタスなどを腹に収めた。

200名山であり、皇太子も平成16年10月15日に訪ねられたとの看板を確認し、御正体山を辞すこととした。

ほぼ真南へカラマツやブナなど樹林帯の続く細いがしっかりとした道をくだりにくだって標示のはっきりしない前ノ岳、暗い中ノ岳を過ぎ、ぱっと明るくなった鉄塔の芝生広場で一本たてた。あたりは手入れされていて見通しがよく、本来ならここからの富士がすばらしいとあるがきょうは悲しい。地図を広げると石割山まであと1時間45

写真で見る 京都自然紀行

石田志朗 監修／京都地学教育研究会 編著
A5判オールカラー 二二四頁 一九九五円
京都の自然と人のかかわりを写真で
「地学」の目で景観や歴史を見直すと、
魅力がより明らかに。アクセスマップ付

西国三十三所道中案内地図

(上)(下)(二冊本) 森沢義信 著 B5判 各二五二〇円
いつどこでも／日帰りで身近な札所から！

姉妹編

西国三十三所道中の今と昔

(上)(下) 森沢義信 著 A5判 各二三一〇円

ナカニシヤ出版
京都市左京区一乗寺木ノ本町15
tel 075-723-0111 〒606-8161
www.nakanishiya.co.jp/ 通販受付

分とある。バテバテだがそんなことは言っておられない。御輿を上げることとした。

だが、これより後の道は比較的歩きやすく、誰かが助けてくれたのだろうかと思えるほどで、にっこりしながら「石割、石割」と口にしながらとんとんと歩き、1時間ちょっとで山頂のテン場へ到着した。結局、きょう一日で朝から10時間もかかってしまったことになる。

石割山三等点1413㍍だが、頂上は斜面である。何とか場所を選んで幕営し、夕食準備がこれまた楽しい。

山中湖は少しだけ見えるが、富士はやっぱりいない。もちろん南アルプスなどとうてい無理な話である。せいぜい杓子山、鹿留山、足和田山、十二ケ岳など、御坂山塊の山しか見えない。18時頃から横になるとすぐに寝入ってしまった。

夜半、テントを叩くような音で目が覚めたが、訪問者は風であった。外に出て見るとチラホラの星空であり、富士のシルエットも薄っすらと目に映った。「よしこれであすはいいぞ」と当てにならない観天望気だが、すぐにテントに潜り込んだ。

5時に目覚めるとすぐに外へ出て驚いた。富士の頭にはまだ雲がかかっているではないか。おかしい、もう少し待ってみようと8時までねばったのだが、結局雲は完全に取れず、目立つ富士山とはならなかったのである。

帰りのJRの関係からやむなく切り上げ、石割神社からくだる。このコースは何度も歩いているので心配ない。神社の天岩戸伝説の地で御神体の大岩を巡って幸運が開けるのをお願いしていたので、以後の石割山は大丈夫だろうと、くすくす笑いが出る始末であった。

その下の富士見平までは、ブナ・ミズナラ・イタヤカエデなどの紅葉が始まりかけていた。足元にはリュウノウギクが大群生で、ヤクシソウ・シラヤマギク・イナカギクなどの秋花が、四百段もあるという石階段歩きを慰めてくれた。赤い鳥居からは、別荘のオーナー気分になってしまうほどにあたりの別荘を眺めながら、山中湖の平野でテン泊山行を締めくくった。

さぁ、これからも雪がくるまで徘徊の宿を求めてテント山行を楽しもう。

（平成21年10月13日～15日歩く）

＜参考タイム＞

（1日目）JR御殿場駅バス停16・10（バス）旭日丘（バス）和出村17・53―登山口18・10（幕営）

（2日目）テン場5・35―薬畑山7・20～37―水喰ノ頭8・06―今倉山8・58～9・23―白井平分岐11・45～55―御正体山12・40（昼食）13・15―送電鉄塔14・16～24―日向峰14・47―石割山15・38（幕営）

（3日目）石割山8・06―石割神社8・15～22―赤い鳥居8・45～55―平野9・33

＜地図＞昭文社＝「高尾・陣馬」「富士山・御坂・愛鷹」

紀行

丹沢主脈を歩く

塔ノ岳・丹沢山・蛭ケ岳

丹沢

木村太郎

1日目は、丹沢山系で最も入山者が多い大倉尾根をたどって塔ノ岳へ。さらに、一等三角点丹沢山を踏み、丹沢最高地蛭ケ岳山荘にて宿泊。2日目は、東海自然歩道の姫次を経て黍殻山と焼山を越え、津久井町の焼山登山口へくだる。丹沢主脈を歩く計画を立てた。

丹沢には古い歴史があり、華厳宗の良弁が天平勝宝七年（755）に大山（雨降山）を開基してより、今では丹沢大山国定公園に指定された名高き山域である。

その丹沢の地へ初めて自分の山靴を乗せる時がきて、期待に胸が高鳴り、眠れない前夜を過ごした。

JR大阪駅桜橋口を出た高速バスの夜行便で早朝の新宿駅前に着き、小田急新宿駅から渋沢駅へ廻り、神奈川中央交通バスを乗り継ぎ、大倉到着は8時30分頃。山岳スポーツセンターから三ノ塔尾根へ向かう人、県民の森に向かう人などと別れ、私はロッジ峠の正面を塔ノ岳登山口へ歩いた。

わくわくする気持ちで山道に入れば、丹沢の愛好者や塔ノ岳の信仰者が集う、地元の丹沢ベース小屋を見る。霊山として知られた石尊大権現の大山がそうであるように、同じ裏丹沢の塔ノ岳も古くからの信仰登山の歴史をもつ日向薬師の山伏により、塔ノ岳の道が開かれたという。

日向坊中の常連坊による「峯中記略控」には、塔ノ岳について「是ヨリ峰ニノボルト塔ノ峰ナリ、此所ニ弥陀薬師ノ塔有」の道文がある。日向薬師の修験道として山伏が日向山から大山を越え、さらには塔ノ岳への長大な道が開かれたという。続けて「富士山ハスグ西ノ方ナリ、是ヨリ北エ行黒尊

仏岩有」と、山頂の様子を記している。

宝文館刊「日本山岳風土記」第三巻「富士とその周辺」の中に、武田久吉の「四十年前の丹沢を語る」が収録されている。文の初出は「山と渓谷」（昭和26年4月号）なので旧聞に属するが、丹沢における近代登山の草分けである武田の文で、明治の頃も塔ノ岳は信仰のために登られていたことがわかる。

塔ノ岳の「頂上の北裏に、黒尊仏又は御塔と呼ばれる巨巌があって、雨乞いその他の信仰の為」に登られていたと武田は記している。黒尊仏については「新篇相模国風土記稿」の「玄倉村」の項に、この山に「土俗黒尊仏ト唱フ大石アリ。其形座像ノ仏体ニ似タリ。故ニ此称アリ」と伝えている。

石に祈請して雨乞いを行い、石上に生える苔を煎じて熱病薬に用いるなど、信仰の拠りどころにされていた尊仏岩は、大正12年の大震災で沢下へ落ち行方が知れない。跡地には板碑が立ち、尊仏岩は塔ノ岳の尊仏山荘の名に伝えられている。武田が紹介している100年程前と、今の丹沢とは様変わりしている。

武田久吉が語る旧きよき丹沢、彼が仲間と明治38年9月に玄倉から登った塔ノ岳の山嶺には、小さな石祠のまわりに「ウメバチソウの白い花とウスユキソウの白い葉」が一面に密生していたと報告している。今とは比較にならないほど、塔ノ岳は植生豊かで多くの草花と自然林に覆われていたようである。

植物学者でもある武田は、途中「岩壁に咲いたイワツリガネソウや、砂地に生えたシラヒゲソウ」を採取するなどして、未踏の道を歩いている。大倉

から塔ノ岳への道については、当時は「この辺に来る者は山麓から駒鳥を取りに来る少数の者」が、尾根を上下するくらいの未開発の山域だと語っている。

私が体験した塔ノ岳への登山道は、いたるところに枕木が埋め込まれていた。かつては美しい草道であったのだ

塔ノ岳

ろうが、押し寄せる登山者の山靴から植生を守るため、また道の崩壊を防ぐために階段を敷きつめている。あちこちの道でカエデ科の木やブナ科の苗木などを植樹しており、山の自然復旧に取り組む活動が始められている。

大倉高原山ノ家のキャンプ場の先で、見晴茶屋を通過した尾根道にモミジの道づくりがされている。イロハカエデの上辺は紅葉しているが下辺にはまだ青葉が残る。高みを求めてひたすら歩いて、ケルンを積んだ所で一枚の変色したモミジを拾った。

モミジの葉脈の中心はまだ青いのに、葉縁が赤い彩りの変わった落ち葉だ。風に吹かれて枝から散ったのか、人の手に取られて捨てられたのか、青葉から紅葉に変容していく過程で、ひとひらのモミジ葉は季節を先取りするように生命を終えていた。

塔ノ岳への最短コースである大倉尾根には入山者が多い。土留めの枕木で保守され、道標が完備していて初めての入山者には親切で優しい。駒止茶屋、堀山ノ家、花立山荘などの小屋でいつでも休むことができる。バカ尾根と呼ばれる長い登りが続くが、側面に丹沢表尾根の山並、背後に相模湾のパノラマが開け、眺めもすばらしい。

長い階段を登り終えてザレ道を歩き、花立の台地に来て腰を下ろす。霊場があった頃は神仏に花を手向けた所なのだろう。登高中、最初の姿を見た時は冠雪の頭だけだった富士山が、いまは裾部を広げている。逆の方向に目を移せば、表尾根の塔ノ岳から三ノ塔・二ノ塔にかけての峰々が連なっている。

金冷シで鍋割山への道を分け、ゴヨウツツジが混じるブナ林の尾根筋を行く。山頂直前で階段が待ち構え、青息吐息のていで塔ノ岳（1491m）へ12時20分に登り着く。途中で多くの登山者に追い抜かれ、標準歩行タイムよりかなり遅い。寝不足のうえに古傷の膝関節に痛みが出て、2日間で30kmの踏破できるか少し不安になる。

丹沢山塊、箱根の山々、富士山などを眺めながら青空の下で昼飯にする。

淡沢駅で買ったコンビニ弁当だが、お腹を満たすと元気になった。はやる気分で休憩を切り上げ、丹沢山を目指して出発する。日高を過ぎ、深山の雰囲気に満ちたブナ林に入る。草原の竜ケ馬場を通り越し、一等三角点の丹沢山（1567・1㍍）へ14時近くに着く。

塔ノ岳山頂では多くの登山者が屯していたが、丹沢山では「日本百名山」の立札のそばでひとりの登山者が富士山を眺めていた。津久井・愛甲・足柄上の三郡の境界にあり、古くは三境ノ峰と呼ばれた丹沢山地のほぼ中心に当たる位置で、私と見知らぬ他人とふたりだけで山頂を占有した。

秋色を彩る華麗な宴を終えたブナ林をくだり、初冬の足音を忍ばせて果てしなく続くササ地を登る。誰ひとりすれ違わないので、奥山に迷い込んだ気分になる。鹿除けに張りめぐらした金網が現れ、人手の入った風景に気持ちが安らぐ。不動ノ峰を通過し、ユージンの道が合う棚沢ノ頭まで来ると、前方に蛭ケ岳山荘が見えてきた。

目の前に見えていたはずが、蛭ケ岳への距離がなかなか縮まらない。狐狸にだまされたのかと呟く前方に、長大な沢を広げた深い谷からガスが吹き上がり、行く手を目隠しする鬼ケ岩が尖る。ガスの向こう側に蛭ケ岳があると信じて、真新しい鎖を張りめぐらせた岩場を慎重に渡り、再び登り返して丹沢最高峰の蛭ケ岳（1673㍍）に立つ。

山頂の中程に、薬師如来を祀る小祠があり、蛭ケ岳には薬師ケ岳の別名がある。南アルプスも中央アルプスも見えるという山頂からの眺めは、薄い霧の幕であいにく見通すことができない。山頂のまわりをぐるりとひと廻りしながら、はるばると来た丹沢最高地を山靴で踏みしめて感慨にひたる。

山荘の扉を開ければ16時前、丹沢山から2時間ほどでどうにかたどり着けた。宿泊者の中でいちばん遅い小屋入りとなり、大部屋で自分の居場所を探していると、ひとりの登山者が空いている布団を教えてくれた。

カレーライスの夕飯を食べ、痛みのでた右膝の手入れをして早々に布団にくるまる。夜中に起きた時、硝子戸越しに無数の宝石を散らしたような下界の灯りが瞬いていた。あすの上天気を約束されたようで、安心して布団にもぐりこんで寝不足を解消する。

岳人達の朝は早い。私も皆に負けじと5時30分に起床。朝飯を済ませ、6時40分に山荘を出発する。雲海に浮く富士山の朝日に輝く姿を見届けながら、その光景を「黎明富士」「玲瓏富士」とか勝手に名付けて、感動を味わっていた。

「蛭ケ岳に泊まってよかったです」の声がした。見ると、昨夜空いている布団を教えてくれた人が私の横に立っている。私も彼に「こんなに美しい富士を見たのは初めてです」と、名も知らない登山者に素直な気持ちを伝えた。これから檜洞丸に廻ると話した登山者と別れ、私は単独で姫次の道標へくだり始める。

風雨で痛んだ枕木が外れている道、

春秋を過ごしたブナが眠りにつく道、落ち葉の上に霜柱が重なって踏跡がわかりにくい道に静寂が立ち込める。突然森の大気を震わせ、子鹿を連れた親鹿が駆け去った。落ち葉を腐らせ地を肥やす自然の循環が図られる森で、新しい生命を山の動物たちが育んでいる。

何となく見聞した山道の感じがする

蛭ケ岳

と思いながら、地蔵平から原小屋平へ野越に富む森のなかを彷徨していく。ブナ・ウツギ・イタヤカエデ・ヤマボウシ、それらの植生の類似性などでなく、いつか晩秋にどこかで遭遇した光景だ。人工造林の森では見られない、自然林の落葉広葉樹が営む瑞々しい生の讃歌が聞こえ、懐かしい山の匂いがする。

それは関西でいえば「鈴鹿の匂い」それとも「台高の匂い」なのか。否これこそ「丹沢の匂い」というべきものだ。その丹沢の匂いというものが独特のものなら、特に北丹沢の山域にその特徴が出ているのだろう。

原小屋平にあった山小屋が無くなって北丹沢の入山者が減り、山は昔の風景に戻り始めている。山の自然がそのまま今に残されている稀少な山域、遠い昔に嗅いだ山の匂いが香しい。丹沢が丹沢であることの証の樹林は、寒々しい裸木姿になっても凛々しく天に向かって立っている。

高原風のササ原が広がる姫次（1433㍍）は、東海自然歩道の最高地でカラマツ林に囲まれ、神々しい富士山が望まれた。武田久吉が「姫岳」の字を当てた姫次の地から、道幅が広がり遊歩道の趣になる。

「ヤマビルに注意」の看板の立つ道でも丹沢の匂いは薄れることがない。ヤマビルの嫌な記憶を封印し、カラマツ林の風情に浸り、焼山へ向かった。北原白秋が『明星』に寄せた「落葉松」の詞章を思い浮かべて歩いたが、行先の道標だけは見落とさない。

姫次から逆方向に進めば、道志川の支流神ノ川の折花橋の近くに、甲斐武田一族の折花姫ゆかりの折花宮がある。神ノ川の長者舎と呼ばれる場所で、世間から隠れて長者の老夫婦と折

姫次

花姫は住んでいた。追手に見つかり、長者の館は社宮司沢で、婆はエビラ沢で殺害されてしまう。折花姫は神ノ川の深い淵に身を投じたとも、山中に逃がれ突き落とされて絶命したとも、地元では語り継がれている。『津久井町郷土誌』に記された「姫次」とは「姫突」が起こりという。この山名にまつわる昔話に一抹の哀愁を感じさせる。

長者舎の長者がキビづくりをしていたと伝わり、『新篇相模国風土記稿』に君ケ谷峰とある黍殻山を捲いて行けば、カエデ類の木やヌルデ・ウルシの紅葉の仲間たちが、林間を色彩あざやかに染めている。

焼山（1059・6㍍）の頂上には、鉄製の展望台がある。螺旋状の階段を上って台上から眺めると、右手に寝泊まりした蛭ケ岳が見えた。左手に宮ケ瀬湖、中央には丹沢三ツ峰と思しき山並が続いている。山頂に三つの小さな祠があり、烏屋と青根と青野原の各集落の境界を線引きするものという。

焼山一帯が将軍家の御狩場の頃、草木が茂りすぎると狩猟の妨げになり、山を焼いたことで焼山の名が付いている。集落に近く焼山のかなりの山城は植林されているが、山頂周辺にはまだ自然林が残る。秋日に染まるシラカバが目に新鮮で、関西の山と違った雰囲気に包まれる。

梢に残る赤い実を何の木だろうと眺めていると、下から夫婦連れが登って来た。山荘を出て初めて出会う登山者で声をかけてみると、ふたりは「姫次へ登り、八丁坂ノ頭から青根へくだる」と言った。その話を聞いた私は「姫次からは富士山が見え、黄葉のカラマツがきれいでしたよ」と伝えた。

奥さんが「おひとついかがですか」と、チョコレートを差し出した。遠慮せずに一粒いただいて私はすぐ口に入れた。甘い食感を味わいつつ、お礼の言葉と丹沢へ初めて入山したと打ち明けた。そして私は「丹沢が好きになりました」と言い足した。

道標は西野々へとあったが、焼山登山口バス停の木標を見つけて林道に出る。どこからか時報の鐘が聞こえた気がして、津久井神奈交バスの諏訪神社前バス停に12時10分に着く。三ケ水行き13時18分発まで神社の石垣に腰をかけて待つが、次発は16時23分で便数は少ない。三ケ木でJR橋本駅行きに乗り換えねばならないが、三ケ木からは便数が多いので、帰阪の目途がついた。

ひとりバスを待ちながら、丹沢主脈の道程を振り返っていた。私は「丹沢が好きになりました」と、誰に言うともなく胸のなかで呟いた。

（平成19年11月14日～15日歩く）

＜コースタイム＞

（1日目）大倉（3時間40分）塔ノ岳（1時間20分）丹沢山（1時間50分）蛭ケ岳（泊）

（2日目）蛭ケ岳（1時間30分）姫次（1時間50分）焼山（1時間40分）焼山登山口

＜地形図＞2万5千＝秦野・大山・青野原

紀行

三角点を訪ねて ㊼

長野尾峠から

連載

池内山・池河内湿原へ

湖北

礒部 純

池内山は、滋賀県最西北部の木之本町と福井県敦賀市の県境にある山である。この山は滋賀県の未踏の三角点峰のひとつで、いつか登りたいと心に決めていた山でもある。何年か前、この山へ登る高島さんの例会があった時、所要が出来て涙をのんで欠席した苦い思い出があるが、今回、登ることができ、長年の念願を果たすことができた。

前夜の予報によれば、滋賀県中・南部は晴れだったが、北部は降水確率が40％。万一雨に遭ってもよいように寒さ対策も万全にして6時に家を出た。湖西道路を走ると、比良の山々の頭を隠すように雲が垂れ込め、山の上部には雪まで積もっている。

池内山三角点から西へ

「本当に天気は大丈夫だろうか」と思いながら車を走らせ、白鬚神社まで来ると、フロントガラスにポツリポツリと水滴が。今津を過ぎる頃には大雨になり、ワイパーはフル回転。こんな雨の日の山行はたまったものではない。ただただ晴れ男の高島リーダーの念力に頼るしかなかったが、この願いが通じたのか、野口から奥琵琶湖トンネル、永原から岩熊トンネル、塩津から賤ケ

岳トンネルを抜けるごとに回復し、木之本へ着くと今津での雨が嘘のように青空が顔を出していた。

国道365号に左折すると雨は上がっていたが、今度は雪が姿を現す。道路は雪掻きされ、田畑や山腹にはベッタリと雪が積もっている。椿坂峠を越えると、あたりは晩秋というより冬そのもの。集合場所の中河内の広場へ着くと、雪が20㎝程積もっていて車は入ることができない。仕方なく雪掻きされた道に駐車した。時間は8時25分だったが、リーダーは到着していた。

寒さ対策を万全にして来ているので、雨具の上にスパッツを付け、足廻りを厳重にして雪山歩きに備える。9時には全員が集合し、12名の参加。東京の新ハイ会員、初めて会ったスペイン生まれの彼女の顔もあった。

中河内を通る、木之本から栃ノ木峠を経て今庄へ抜ける道は、安土桃山時代に柴田勝家が整備した道で北国街道と呼ばれている。当時の中河内は、峠下の宿場として二軒の本陣を置くほど繁栄していたそうだが、今は本陣跡の石碑が残っているだけで昔の面影はない。当時、この宿場から池河内へ越える敦賀道（庄野峠越）があったが、この日のルートは、その峠道を登って長野尾峠へ至り、県境尾根を伝って池内山へ登ることになる。

9時10分に出発。広峯神社脇から田道を南へ向かい、村外れの地蔵尊の立つ所から峠道を登る。一歩車道を外れると20㎝は積もっていて最初から予想外の雪中山行となってしまった。登り出して四度もジグザグを切ると、背丈以上に切り込まれた溝状の道となる。あたりの光景は全く見ることができず、ひたすら下を見て登るしかない。新雪で足が雪にもぐり、先頭を交代しながらのラッセルであった。登り始めて20分、ふと上を見ると、ミズナラの木にびっしりとナメコがある。リーダーは帰りに採ろうと言ったが、昨年の石留山では帰りに採り損なった苦い経験があったので、ひとり残って採取する。大満足の気分に浸りながら皆に遅れて10分も登ると、展望のきく尾根にのった。後ろを振り返ると、大黒山から北へ流れる尾根が連なり、小音波のピークも見えている。その山腹は朱や茶色に彩られ、晩秋の光景が一面に広がっている。ゆるく左へ捻いて尾根にのり、尾根道を西へ向かうと、道の両側はミズナラの多い雑木林で朱く染まっていて美しい。紅葉を見てナメコを探しながら尾根道を歩くと、すぐに長野尾峠に着いた。

長野尾峠は中河内から池河内へ越える峠である。村から村への生活の峠道であるが深い切れ込みを見ると、繁栄していた北国街道の人々が、中河内から敦賀へ海産物を仕入れに足繁くこの道を通ったことが偲ばれる。峠に地蔵尊は無かったが、円錐形の屋根をした高さ3㎝程のボックスが立っている。入口上部に〒のマークがあり、郵政省の前身である逓信省の小屋であるという。小屋の中には、電話が置かれた形跡が残っていた。

この峠から峠道を離れ、北西の尾根

に踏み込む。この峠から池内山、送電鉄塔までの尾根は中央分水嶺になっている。尾根の左手に降る雨は敦賀湾へ注ぎ、右手に降る雨は高時川に集まり琵琶湖へ注ぎ、太平洋へ流れるとは、信じられない思いがする。尾根は道の無くササやぶであるが、高島リーダーが刈ってくれたお陰で、やぶの切れた箇所があって歩きやすい。この尾根に入るとミズナラばかりでなく、ブナも目立つようになってきた。茶色や朱の葉が残る木々を見て、ササやぶの雪の尾根を歩く。

尾根が細くなると、標高差70㎝程の最後の急登が始まる。たいした斜面ではないのに雪が張りついているだけに後ろを歩く人ほど滑りやすい。いらん足の力を使ってフウフウ言いながら10分も斜面を登ると、平坦な広い尾根へのる。ササの繁った雑木疎林の尾根を歩き、ちょっとしたピークを越えて西へ向かうと、広い疎林の盛り上がりに三角点が埋められていた。池内山、標高646・7㎝、点名「網谷」で三等三角点。標石は北東向きで北から60度東へ振っている。近くの木には文字の消えた山名標示板と、「ラウンド琵琶湖、滋賀県境縦走」と書かれたアクリル板が下がっている。三角点から情緒溢れる林を西へ歩き、鉄塔広場で早い昼食タイムとなる。

広場の西方が開け、目の下に敦賀の街と敦賀湾が広がり、その向こうに蠑螺岳、西方ヶ岳、三内山が連なっている。左手の林の間からは野坂岳の姿が見えていた。

雪が積もっているが寒さは感じられない。この日は守山の彼が参加しておらず、誰もアルコールを口にする人はいない。ふと見ると、この日初めてお会いしたスペイン生まれの彼女が、500㎖入りのブルガリアヨーグルトを食べている。「昼ご飯は？」と尋ねると、「毎日昼には、このヨーグルト一箱に林檎一個で済ます」と言うから、初めていっしょに歩いた人はみんなビックリ。それにしても所変われば習慣も変わるもので、昼ご飯をそれだけで済ますとは、われわれ日本人には考えられないこと。皆が食べ終わると、恒例の「千の風になって」を合唱して、昼食時間は終了。12時前の出発となった。

鉄塔から巡視路を南西へくだる。二つ目の鉄塔まではゆるい尾根で快適にくだれたが、その鉄塔を過ぎると急坂や斜面に切られた巡視路が続く。雪で足が滑りそうになりながら、微妙なバランスを保って歩かなければならない。急斜面をジグザグにくだり、四つ目の鉄塔まで下りると、北電の5～6人が

送電線の点検作業中。最後の鉄塔からの急斜面のジグザグの下りは、北電の人達が歩いたこともあり、雪はザクザクに解けて巡視路は雪と泥でドロドロ。ひたすら足を滑らせて転ばないようにくだるのが精一杯。そんな急坂を、先頭を歩くリーダーと重心の低い彼女達はドンドンとくだり、すぐ姿が見えなくなってしまう。後から男性達が滑って転ぶのを気にしながら、ソロソロとくだってゆく。

山頂から50分で車道へ下り立つ。雪が積もっているので、計画を変更して池河内湿原へ直接向かうものと思っていたら、リーダーにそんな気は全くなく、標高差140㍍もある南の尾根へ登り始める。地形図で見ると、先ほどのくだりの傾斜よりゆるいとはいうものの、足の筋肉を酷使した後での急な雪の巡視路の登りは死ぬほどに辛い。足を上げるのもおっくうで、尾根の鉄塔には皆からだいぶ遅れて到着した。この日は雪歩きなので防寒のパッチを履き、ズボンの上には安物の通気性のない雨具を付けていたので、ズボンばかりでなくパッチは汗と雪でビショビショ。上の鉄塔へ皆に遅れて最終に到着したのは、「着衣が足に巻きつき、足を上げるのも重かったのだ」と言い訳せざるを得なかった。

鉄塔に着いたら、休む間もなくザックを置き、西のピークへ向かう。ササを掻き分け雪の中を80㍍も歩くと、ササやぶのなかに三角点が立っている。標高441・5㍍、点名「岳山」で、四等三角点である。通常、四等三角点標石はシッカリ南を向いているのに、ここの三角点はどうしたわけか東向きで、南から70度東に振っている。こんな四等三角点を見たのは初めて。このササやぶの低い盛り上がりの山を、粟谷山と呼ぶそうだ。

鉄塔から疎林の尾根を東へくだる。雑木林の紅葉を満喫しながらくだって行くと、やがて道へ下り立った。この道は、池河内から敦賀の谷口へ越える道で、この峠を「坂の頭」と呼んでいるという。峠には「善六地蔵」と呼ばれる地蔵尊が祀られている。池河内区長の杉田稔さんの話によると、「昔、飢饉のあった頃に、杉窯の長である中山善六という人が、敦賀の代官へ池河内の年貢減免の嘆願に出かけたが、その帰りにこの場所で何者かに殺されてしまい、その菩提を弔うため、この善六地蔵が建立された」のだという。

峠から東へくだると池河内湿原へ下りる。池河内湿原は、南北約500㍍、東西は約150㍍で約4㌶の湿原である。周囲は低山に囲まれ、周囲からの流水や湧水により潤されている。湿原はハンノキの湿生林が多く、カキツバタ・ゴバギボウシ・ミツガシワ・ヒメザゼンソウ・カキラン・サワラン・トキソウ・モウセンゴケ・ヤチスギラン

峠「坂の頭」の善六地蔵

などが生育し、ヤナギトラノオ・ミズドクサは福井県ではここにしかなく、日本の生育南限だといわれている。そんな湿原は雪に覆われ、湿原を示す景観を全く見ることができず、東岸を通り過ぎるだけ。東岸のゆるい斜面には、朱に色づいた実がタワワの柿の木が何本も立っていたが、採る人がいないようで、雪面のアチコチに熊の足跡と熊に食いちぎられた実が散乱していた。

池河内集落から谷を北へ入る。墓場にあるトチの巨木を見て、その上流の谷分岐まで来ると、前方を猪の家族八頭程が我々の姿に驚き、山中へ逃げ込んでいった。道の消えた谷右俣を遡ると谷分岐。そこから長野尾峠へ古道の登りが始まる。朝の東側の道と同じように、ここからの道も深い溝状でジグザグに登って行く。道の両側が高く、あたりが全くうかがえず、どのくらい登ったかわからない、ただただ登るしかなかった。重い足を持ち上げて、フウフウ言いながら50分も登ると、やっと、長野尾峠へ登り着いた。

ここからはくだるだけ。朝に目に留めていたナメコを探りながらの下り。木に着いたナメコを初めて自分の手で採った彼女達は大喜びで歓声を上げっぱなし。中河内中央広場へ戻ったのは、15時55分であった。

その後、池河内湿原の花が見たくなり、今年6月、この例会に参加できなかった吹田、物集女、高槻の彼女達とある会に参加して、池河内を出発点にして同じルートを歩いた。長野尾峠から池内山の間には相変わらずササやぶが繁っていたが、立派な道が通っていたのにはビックリ。おそらく、湖北の中央分水嶺に道を切り開いている余呉トレイルづくりの人達の尽力によるものだろう。道脇のササを見ると花が咲いていたので、いずれ枯れてしまうかもしれない。

粟谷山の三角点、点名「岳山」を訪れた後、「坂の頭」へ抜けて、古道を湿原へ向かおうとすると、古道の途中には、200㍍もの距離にわたり、斜面から切り出された松の木が放置され、道を塞いでいて通ることができなく、斜面を登り迂回せざるを得なかった。早く処置して、古道を歩けるようにして欲しいものである。

湿原では、ミツガシワの花は終わっていたが、カキツバタ・ドクゼリ・サワオグルマの花は最盛。そのうえ、北海道、本州中部以北に生育し、この池河内湿原が南限であるヤナギトラノオを見ることができたことは、幸いであった。

（平成20年11月22日・平成22年6月8日歩く）

＜コースタイム＞

中河内中央広場（50分）長野尾峠（30分）池内山（5分）送電線鉄塔（50分）車道（20分）送電線鉄塔（5分）点名「岳山」（35分）池河内湿原東（30分）右俣奥谷分岐（50分）長野尾峠（40分）中河内中央広場

＜地形図＞2万5千＝中河内

能な限り、正確な情報を伝えることにした。

制作スタッフの話では、平成21年の放送が好評であったことから、平成22年にシーズン2を制作することになったという。3月にロケを行い、4月に放送予定の旗振り通信をテーマにした番組は「第3回」であり、10回放送の中の「目玉商品」として、監督が最も力を入れて制作しようとしているのだという。確かに、制作費を削減されつつあるはずの最近の事情から考えて、筆者との打合せに制作スタッフ3人を大阪に派遣するというのは、大きな意気込みの表れと感じられた。

3月11日には助監督から決定稿が届き、チェックを行い、通信の合図の流れの改善等を知らせた。この時点では、放送のタイトルは「スピード命旗振り通信（仮）」であった。その後、関東方面でロケ撮影が実施されたようである。

「タイムスクープハンター　シーズン2」は、NHK総合テレビで、3月29日から始まり、毎週月曜夜10時55分～11時25分に10回にわたって放送されることに決まった（最終回は6月7日）。旗振り通信は第3回で、4月12日の放送に決まった（NHK・BS2では、4月19日午後5時～5時半に放送）。3月下旬～4月上旬発売のテレビ番組ガイドには「スピード命！旗振り通信員」と題して次のように紹介された。

「情報伝達手段が発達していない江戸から明治前期にかけて、山で旗を振り、リレー形式で情報を伝えた“旗振り通信”をクローズアップ。それまでは飛脚で1日半かかっていた大阪―岡山間の通信をわずか15分にまで縮めた通信員たち。その苦労と驚異の能力に迫る。」

「沢嶋（要潤）が、山で旗を振り、より早い情報伝達に努める旗振り通信員を取材。江戸時代、日本の米の取引が行われた大坂・堂島では、米価の基準となる堂島の米相場の値段を早く伝えようと奮闘する旗振り通信員がいた。20年のベテランとその弟子に密着する。」

4月4日には、3日に作成されたオフラインDVD「速報セヨ！旗振通信」と、ナレーション原稿が届いた。この時点ではCG映像は完成しておらず、コメントを送ったあと、5日に神谷さんからCG映像制作のための情報確認を求められた。

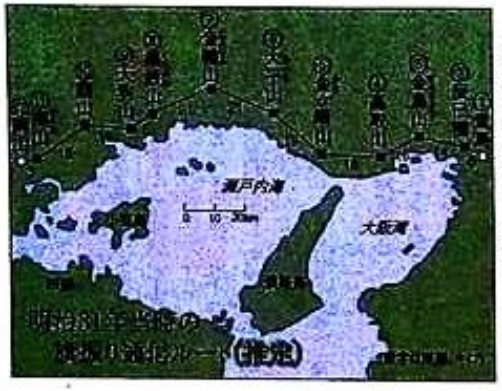
放送3日前の9日夜にも、翌日からの最終仕上げ作業に向けて、神谷さんから確認の電話があり、大丈夫なのかと心配になったが、内容に間違いがあっては一大事という、全国放映の番組ならではの、慎重な確認と考えてお応えした。内容がマニアックなものだけに、神谷さん自身の理解も付け焼き刃であって、不安が拭いきれず、過去のケースでは、全国の視聴者から鋭い指摘が入ることもあって、神経質にならざるを得ないようであった。

4月11日の新聞（翌日は休刊）に掲載された12日の番組表での最終タイトルは「速報セヨ！旗振り通信　飛脚より抜群に速い」であった。筆者が、「旗振り通信員」というよりも、当時は「旗振り師」「めがね師」であること、「旗振通信」よりも「旗振り通信」が一般的であるとアドバイスしたことから、タイトルが何度も変わったことがうかがえる。

4月12日の放送に伴って書き込まれたインターネットでのコメントには、とても好評という声が多く見られ、シーズン1で好評だった「お永様はかくして運ばれた」（加賀藩の大名飛脚）（平成20年9月13日にパイロット版として放送され、シーズン1の第4回として平成21年4月22日に再放送）と並ぶ名作という評価を得ている。監修をした筆者としても、うれしい限りである。

特に、CG映像（中継ルート）の評価が高いようである。筆者は、舞台となった明治31年当時の大阪～岡山ルートを、既知の資料によって再現した結果、次のように想定して、制作者に知らせておいた。

①株式会社大阪堂島米穀取引所（6・25㌔）②尼崎市辰巳橋（14・1㌔）③神戸市東灘区金鳥山（15・7㌔）④神戸市須磨区・長田区高取山（18・35㌔）⑤明石市金ケ崎山（18・7㌔）⑥姫路市・高砂市大平山（20・7㌔）⑦たつの市金輪山（21・3㌔）⑧赤穂市黒鉄山（6・0㌔）⑨備前市日生町寒河・天狗山（15・8㌔）⑩赤磐市熊山（18・45㌔）⑪岡山市操山・旗振台古墳（2・9㌔）⑫岡山市天瀬・岡山米穀取引所



大阪から岡山まで、総計158・25㌔である。通信に要した時間としては、速い記録で15～20分、遅い記録で40分という資料が残されているので、前者に対応する所要時間として、「1回分の送信に1分半」を想定してみた。リレー式に11回の送信で16分半となり、さらに岡山から操山に打ち返して確認ができたら送信完了とみて、1分半を加え、所要時間18分と算出したのであった。実際の所要時間に大きな揺れがあることは当然である。

CG映像は、以上の資料を基にして作られたものである。史実によれば、天狗山では、明治31年（1898）当時、旗振りをしたのが関竹治（1858頃～1938）とわかっているので、ドラマでの舞台は、天狗山を、「旗振り山」に変更してほかし、旗振り通信20年のベテラン・岩村彦右衛門と、彼に弟子入りした川端風助を登場させている。

ドラマの内容については、インターネットに多数のコメントがある。見ていない読者がコメントを読むとネタバレするので、おすすめしないが、再放

送や、将来的には発売されるであろうDVDに期待されたい。

4月12日の放送に対するインターネットでのコメントを読むと、視聴者の鋭い着眼点がいくつか浮かび上がってくる。それをごく一部だけ紹介しておくことにしよう（複数の引用の場合、出典は末尾に記載した）。

「今回は歴史に残る（？）名作でした！ "旗振り師"と言うマイナーな（失礼！）ターゲット、笑いあり涙あり波乱を含みつつの成長物語、TS社の技術を駆使した特殊映像表現の数々、役者さんの自然さ、音楽の格好良さ、『TSH』の面白さが凝縮されていたように感じました。『TSH』知らない人に勧めるならこの話一的な作品。」

「まず"旗振り師"と言う仕事を初めて知りましたが、すごいシステムですね。通信速度もですけど、暗号使ってるとか、誤送信していないか確認してるとか、電話ができても活躍していた、って言うのにも驚き。」

「対する未来の技術、今回は遠眼鏡映像（ズーム）に中継スポット日本地図やカウントダウンと、いろんな映像表現に挑戦している感じでしたね。中でも、中継スポット地図は良かったです！」

「ラストの（莫大な利益を上げた相場師がいた）『だが旗振り師たちに、その利益が還元される事はなかった』には、ずーんときました。まあそりゃそうなんですけどね。」

（以上は「沈黙の螺旋な日々日常」から）

「エラー訂正もやってるとかまさに通信プロトコル」（うらとら）

「いやー、今回かなり面白かった！」

「自分は初めて知りましたが、（旗振り通信は）知る人ぞ知るマイナーメジャーな存在だったんでしょうか」（鹿児島のグルメ・観光情報館）

「これは良作！」（華胥の夢　まったり日記）

「158kmを18分で！凄いわ一明治時代。単純に感動。カウントダウンがリアルで緊張感いっぱい。」（月は東にsatellite）

「素晴しい完成度の回でした。」

「日本地図で彼らの仕事のすごさを表したCG場面では鳥肌が立ちました。お氷さまに匹敵する出来であったと思います。」（あんこ）

「一言で云えば『仕事への責任と情熱を感じさせる内容』でしたねー♪」（某現代日本人）

4月12日放送の際のインターネットでのコメント（テレビジン、2ちゃんねる）を抜粋で紹介しよう。

「『亡国のイージス』のラストで危機を知らせるために潜水艦の甲板（？）から人工衛星に向けて手旗信号を送った」

「ロードオブザリングで狼煙のシーンでちょっとドキドキした」

「こないだの水戸黄門再放送でちょっとやってたねえ」

「こういうマニアックな題材を取り上げてこそのタイムスクープハンター」

「前、BSの熱中人でも取りあげたネタだな」

「もう電信が開通してないか」

「鳩は駄目なのか。鳩は」

「像は逆さまになるんじゃないの」

「忍者の回であった伝言ゲームに通ずるものがあるな」

「当時のレンズは精度がよくないからな」

「望遠鏡って高かったんだろうな」

「バリティーチェックせんのか」

「正しく受信したか、照合しないのかな？」

「これ、インサイダー取引？」

「自衛隊の通信みたい」

「望遠鏡二つもってりゃ良くね」

「えらく高性能な望遠鏡だな」

「ちゃんと照合してるんだ。すげえ」

「三脚をいちいち動かさなくて済むような場所を設定しとけ」

「一応やってるし」

「ちゃんとエラーチェックもしてんだな」

「ダブルチェックするわけね」

「でもアナログなようでデジタルだよな」

「今回はITだった　危うく忘れるところだった」

「やっぱり送信元に確認返信はしてるのか」

「これ、去年、BSの熱中時間でやってたな。アリキリの石井が旗振り熱中人と一緒に実験してたな」

「間違ったとき、『おい、違うぞー』って時はどうするんだろ？」

「訂正サイン送るだけだろ」

「天気悪いとできない？」

「こんなマニアックな仕事があったのか」

「明治のこのころには電話発明されてなかったか？」

「雨天の時はどうすんの」

「伝書鳩とか狼煙はダメなのかな」

「目がよくないとダメなんだね」

「この時代の人視力いくつなんだろ」

「視力が6・0以上で昼間に星が見えるんだっけか」

「アフリカ人なら裸眼で見えるはず」

「せめて数色の旗を使用できないものか」

「だったら、これ江戸時代が舞台でもよかったんじゃないか？」

「そんな長距離に渡って伝達するのか」

「こんな資料が残ってるのか」

「さすが光通信」

「情報ハイウエイだな」

「暗号化プロトコルという奴か」

「今回はなんかドラマ観てるみたいだわ」

「予備人員はいないのか」

「今日は事件がありすぎ」

「飽きさせない展開！！」

次は、5月29日午前2時35分からの再放送の際のコメント（テレビジン、2ちゃんねる）を紹介しよう。

「次の旗振りもなかなかの神回」

「名作旗振りきたー」

「今期では旗振り一番好き」

「メール的なバケツリレー方式ですね」

「通信技術の飛躍的進化ありがたさをかみしめることのできる神回」

「視力もよかったとはいえ、よくこれで通信してたなあ」

「新幹線並みの通信速度かな？」

「もっとはやい」

「この本部映像がまた良いんだよね」

「まあ監督の人がCG作品がメインの

人だからこういうのは朝飯前かもな」
「現代科学も凄いけど昔の人の知恵と努力にはホント驚かされる」
「暗号通信の上にエラー訂正まで」
「このオチはよかったわ」
「つーか旗と遠眼鏡2セット用意しとけ」

なかなか興味深い指摘が浮かび上がる。その多くは、過去に指摘されていることの反復であり、今までの連載で紹介してきた内容と重なるが、多少、コメントしておこう。

旗振りで用いたのは地上用望遠鏡で、正立像であり、レンズの性能も良好であった。天体望遠鏡のような倒立像だと、旗の動きの読み取りが面倒である。

望遠鏡を覗いて旗の動きを読み取るのだから、視力が多少良くなくても、レンズで画像調整できるので、大丈夫である。弟子の言葉で「目が良かったから弟子入り」というのは当てはまらない。ただ、裸眼で良く見えないと、送信先を見つける場合に不利ということは考えられる。良いほうが有利ではある。

アフリカの民族（サン、マサイ）が、狩猟のために遠くを見つめる生活から、視力3・0～8・0の視力を持つと言われ、視力5・0以上、視力10・0の者までいるという（ただし、狩猟をしない者は1・0らしい）。

旗振りの予備人員がいたかどうかは資料が見あたらないが、事故や病気などがあり得る以上、交代要員は要請できるような仕組みが通信社のほうで作られていたことだろう。

プロトコルというのは、データ通信を行う際の規約で、信号通信の手順、データの表現法などを定めている。

最後に、望遠鏡を2台用意するべきという指摘について、コメントしておこう。

筆者は、もともと、制作担当に対して、旗振り場面で、望遠鏡2台を使うほうが合理的であると指摘し、アドバイスもしていた。それでも、ドラマにおいて、1台にした理由は、緊迫感を出す効果を狙ったもので、望遠鏡が2台、旗が2本ある場合、盗まれるというトラブルの演出がやりにくいので、必然性あっての故意の設定と言える。

長距離通信の中継地点の場合、実際には、望遠鏡は2台を使ってリレー式に合理的に送信したはずである。間違いのチェックは、信号を受け取った相手が、次の相手に送信する内容を監視することでまかなうのである。

一方、比較的近い場所への通信の場合なら、送ってきた相手にいったん、信号を打ち返して、間違いないと確認できてから次の中継地に送信した。この場合、望遠鏡1台で運用することができたのであった。ただし、この場合の通信に要する時間は、リレー式に比べると、およそ2倍になる。

次回以降でも、「ふるさとにQ」（平成22年4月放送）をはじめ、過去にテレビで紹介された旗振り通信について報告することにしたい。（つづく）

（平成22年6月12日成稿）

韓国登山シリーズ⑰

連載

近畿道（キョンギド）の山

逍遥（ソヨ）山

ヨシミスポーツ　吉見英樹

韓国

ソウル市内から北へ一直線、近畿道東豆川（トンドチョン）にある。

全羅道内蔵（ホジャン）山に似た五つの峰から構成された馬蹄型をした山だ。五つの峰で構成されているので、端からひとつ登っては次の峰、また次の峰という回峰登りが楽しめる。

各鞍部へはそれぞれ道があるので、どの峰からでも登山可能であり、疲れたらどこからでも下山することができ、ずぼら者にもストレスがなく楽しめる。

いちばん高い峰で586メートルと低山だが、何度も大きくアップダウンを繰り返して峰を渡っていくので、全てを回峰すると楽な山とは言い難い。全峰回峰して、通常6時間ぐらいになる。

逍遥山をバックに

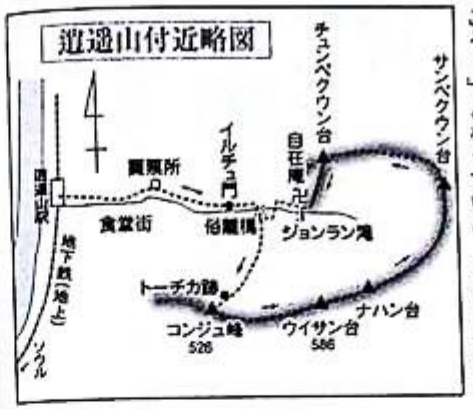
交通アクセス

地下鉄1号線東大門駅から約1時間50分、終着駅逍遥山駅で下車。駅から登山口イルチュ門まで徒歩で40分。もう1時間程車を走らせると、そこは北朝鮮らしい。

コース

この山は、仕事で訪れた10月に地下鉄の中吊りや駅の宣伝板を見て知った。紅葉で真っ赤に彩られた山々、美しい名刹の山門、その下でハイカーが寛いでいるポスターが、どの駅にも貼ってある。

宣伝文句はこうだ。「ソウルから一番近く、クンブン（紅葉）が最も美しい山、ソヨ山（逍遥山）。サー皆で行こうー」となっている。これはぜひとも行かんといかんなと勝手に決めて、大阪に帰ってから交通アクセスを調べてみた。



例のごとく　大阪韓国観光公社のTさんに連絡をとり、乗り換えなどの時間を調べてもらった。

今回は山歩きの先輩N氏とふたり旅だ。先輩も関西～金浦往復15000円という激安運賃に即反応。宿も行きつけの東大門周辺のホテルなら1泊4000円だから、とても安く行けることとなった。

このホテル周辺は、ありとあらゆる食堂があり、おまけに安い。妙に気に入っているのは、チャンオ（長魚）専門の七輪居酒屋で、ウナギに似たドジョウのような妙な魚を生きたまま皮を剥ぎ、ハサミでブツ切りにし、そのまま七輪で直接焼く。七輪の上でグネグネ動く断末魔のウナギモドキを眺めながら、コリコリと食べるものだ。おまけに内臓からは、鮮やかな緑色の液体（海草らしい）がグチュッと出てくる。まるで生まれたてのエイリアンを、七輪で焼いて食べるような光景だ。

登山当日、本来は朝早く（6時過ぎ）出発するつもりであった。逍遥山駅行きの電車はあまり無く、ほとんどすぐに北朝鮮という場所柄でもあり、とても寒いだろう。早立ち早帰りしようと思っていたからだ。

しかし、実際6時に窓の外を見ると真っ暗で出かける気にならず、もうすこし明るくなってからにしようとまた寝てしまい、結局出かけたのは7時半。コンビニでキンパブ・餅を買って出かけた。

地下鉄1号線に乗り、途中で逍遥山駅行きに乗り換え、ゴトゴトと電車に乗って行く。

途中、道峰山の岩峰、水落山が見える。私もここから先へ行くのは初めてなので、車窓からの景色は興味深かった。道峰山駅を過ぎると刈り入れの終わった畑の田園風景になり、電車は低い山並の間を北へ走っていく。

終着駅手前の東豆川には米軍の施設があり、軍用トラックが一面を覆い尽くしている。北朝鮮に近いのだなあと感じさせられる場所だ。

逍遥山駅に到着すると時間は10時前、50人ぐらいの登山者が駅を出てゆく。駅は小さな駅ではなく、駅前にはタクシーも待っているし、売店では登山者向けのキンパブなどの食料も売っており、コンビニもあるのでここで買っても大丈夫だ。

登山口までタクシーに乗ろうとも思ったが、全員歩いて行くので、流れに従って歩くことにした。実際、遅めに出て正解だった。もう少し早いと人がいなくて、どう行くか迷ったに違いない。駅前には登山者用の食堂街もあり、多くの人が訪れるのを示している。登山口には名刹自在庵があり、観光名所としても有名だ。道沿いには宿・食堂・売店が軒を連ね、40分も歩くと山門が現れた。

残念なのは、地下鉄宣伝のような燃えるような紅葉はなく、全山落葉していた真っ茶色であることだ。おまけに天気は曇り、韓国の秋は寒くて曇りの日はさらに肌寒く感じる。

登山口に当たるイルチュ門をくぐり、俗離橋という石橋を渡ると道が左右に分かれ、ここから本当の登山道が始まる。俗離橋をいったん渡ると俗世間から離れるということなので、清らかな気持ちで登山をしないといけないのだ。果たして俗人の固まりのような私達に務まるだろうか心配である。

私達は、各峰を回峰する計画であるので道を右にとり、まず一峰目のコンジュ峰を目指した。道は極端に岩っぽくなく、木の根の間を選んで急勾配の道を高度を稼いで登る。

コンジュ峰は526㍍であり、俗離橋からの比高は460㍍になる。落ち葉の道を歩くこと1時間20分でコンジュ峰直下に到達した。すると頂上すぐ下に枯葉に埋もれた小さな横長のコンクリート壁が見える。そして壁に四角い窓が二つ開いていて中が見えるのだ。トーチカだー。

N氏も「ヨシミさん、これはトーチ

カ跡じゃないか?」と声を出した。コンパスを見ると、トーチカの口は北朝鮮方面の真北に向いている。左側面に廻り込むと、バリケードで塞がれた入口があり、弾薬庫のスペースも判別できる。ここは38度線に近いんだ。登山していても緊張感が伝わってくる。

後で聞いた話だが、最近亡くなられたキムデジュン大統領の太陽政策から後は、北との緊張が和らぎ、米軍の前線は大きく南に下がっているとのことである。だから今はトーチカ跡になっている。トーチカ跡を少し上がると、コンジュ峰の頂上に出る。

ここには米軍のヘリポート跡もあり、トーチカへの物資荷揚げ用に使っていたことが手にとるようにわかる。頂上からの展望は最高!。この山いちばんのポイントである。空は大きく広がり、のびやかな低山の峰々がボコボコと連なり、全てが大らかで気分がスカッとする。

南方向には川が低山の間を曲がりくねって流れ、それを囲むように独の額のような平野が続いている。はるか南、遠方に川を挟んで、左に水落山右に道峰山が見える。これを越えるとソウル市内はすぐだ。遠るものが無いのでとても近くに見えるが、実際は電車で40分はかかる。でもとても近い!。北朝鮮軍が進入すれば、一気に首都ソウルに突入可能だ。東豆川に米軍基地を置いているのが納得できる光景だ。

少し腹ごしらえをし、次の峰、道遥山最高峰ウイサン台(586㍍)に向かう。いったん70㍍下方の鞍部までくだるので急角度の岩場下りとなる。慎重にくだった広めの鞍部から、また岩場を130㍍登り返すと、ウイサン台に到達する。

ウイサン台の北側は断崖絶壁で、ここからは北方面(北朝鮮)の広大な展望が得られる。(ああ~すぐ向こうに見える山は北朝鮮なんだ、韓国の人は同じ民族なのに、すぐそこの北朝鮮に行けないんだ)と複雑な気持ちになる。この感じは昔38度線のイムジンガンに行った折、対岸の北朝鮮を見た時と同じ感慨である。

フォーククルーセーダーズのイムジンガンの歌詞に、「人は行き来できないが、鳥たちは自由に行き飛び交うことができる。ああ~我が祖国、なんと切ないんだ!」というくだりがある。まさしくそういった光景だ。

ウイサン台を辞し、少しくだってナハン台を過ぎ、サンベクウン台に向かう。道は、くだりながらも岩の間をゴソゴソとぬって歩く平行道が続き、サンベクウン台に近づいていく。途中の鞍部には何度もエスケープルートがあるので、疲れたらすぐ下りることが可能だ。サンベクウン台へはまた100㍍を登り返して到達した。

さすがに腹が減ってしまい、ここで昼食となった。木々の葉は全て落ちているので、風を避けるために岩室を見つけてキンパプをほおばった。昼を回ったので、この時間帯になると登山者がドンドン登ってくる。秋の昼り空で今まで人が少なかったので、韓国にしてはえらく寂しいなと気落ちしていた

んだが、やっと賑やかになり、韓国の山歩きらしくなってきた。

さらにドンドンドンドンと下から人が溢れ出てくるように登ってくる。そして大きな声で通過していく。やっぱり韓国登山はこうでなくっちゃ駄目だ!。腹ごしらえを済ますと、最後の峰チュンベクウン台へ向かった。

ここから道がくだりになり、広めの尾根筋歩きになる。このあたりになると名刹自在庵の鐘の音もコ~ンと渡ってくる。お寺も近いゆえか、グループがあちらこちらで宴会を開いている。韓国人は本当にこの山中野宴が大好きで、大概が10~30人で男女混合だ。日本のように男性だけ女性だけのグループはまずいない。

自在庵にて

「どう歩いてきたんか? いつから歩いてる? ルートはどうや?」と、あれこれ話しかけてこられるが、山関係以外の会話にいきなり振られたら頭がついてゆかず、私の語学能力ではとても対応できない。私の韓国語勉強は独学中心なので、どうしてもネイティブな生きた会話をしていない。イントネーション・発音など、推測を離れると太刀打ちできないのだ。

自在庵へは急激な下り道になる。岩場の危険箇所には階段が設置されているので心配はない。そして岩棚を下りると自在庵に到着だ。ここで登山道は終点となる。

ここには、この山唯一紅葉した木が一本あり、何とか紅葉を楽しめたことになる。自在庵は新羅時代からの名刹であり、庵の前には巨岩をくり抜いてその中にお堂がつくってある。その巨岩からはジョンラン瀑布が落ちる。

ここまでは観光遊山客がお参りに多く訪れており、土産物店・観光写真屋もある。私は無事下山のお礼を弥勒菩薩にし、お布施をさせていただいた。

「オヌルド ムサゲ 登山ハルスイッソソ、チョンマル コマスムニダ」

「ナムカンゼオンボサ~ル」

駅への道は 気持ちのよい渓流沿いが続き、朝来た俗離橋分岐に到着した。ここで俗離橋を渡ると俗世界に戻ることになる。所要時間は山中約5時間半ぐらいであった。来いのであまり休憩をしなかったので、韓国人タイムと同じぐらいであった。

早速 道すがらの野外食堂キルに立ち寄り、マッコリ・パジョン(ネギのお好み焼き)で俗世間を心ゆくまで満喫した。きょうも元気だ。マッコリが旨い!

《コースタイム》略

文学歴史探訪ハイク ⑮

鹿ヶ谷・法然院を訪ねて

松永恵一

法然院

専修念佛の祖法然房源空上人のゆかりの法然院。境内は自由に拝観できるが、方丈など伽藍内は非公開。4月1日～7日と11月1日～7日の年二回、一般公開が行われる。杉木立の奥に日本画家の福田平八郎、経済学者の河上肇夫妻、東洋史学の内藤湖南、哲学者の九鬼周造、作家の谷崎潤一郎、見事な仕事を残した人達が眠る。

法然は苦しみ考えた。比叡山の経蔵で、唐の善導大師が著した『観経疏』の中の一節を発見し、これこそが末法の時代に相応しい教えだと直感した。

一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥、時節の久近を問わず、念々に捨てざる者、是を正定之業と名づく。

彼の仏の願に順ずるが故に。

弟子の住蓮房、安楽房と共に六時礼賛を唱え、念佛三昧の行を結んだ道場はいまの法然院よりは東にあったらしい。阿弥陀仏の本願を信じて「南無阿弥陀仏」を唱うれば極楽に往生できる、悪人でも救われると法然は叫んだ。女身でも救済されるという教えに、1人2人、10人、100人、狂喜した女達の溢れるばかりの念仏の声が沸いた。

長くは続かなかった。後鳥羽上皇の女官松虫姫と鈴虫姫の落髪に端を発した建永の法難。専修念仏の停止。住蓮、安楽の弟子4人が死罪、法然並びに親鸞ら弟子7人が流罪に処された。

法然院

荒廃した法然の念仏道跡を再興しようと努力したのは江戸時代の忍澂上人だった。浄土宗の僧侶の堕落を憂い、宗祖法然上人のゆかりの地、善気山に再び道場を建立することを発願した。知恩院の法灯を継いだ三十八世萬無上人の志が、現在の善気山法然院萬無教寺となった。

安楽寺

住蓮山安楽寺は鎌倉時代の初め、法然上人の弟子、住蓮房と安楽房が専修念仏の道場として結んだ鹿ヶ谷草庵が始り。普段は非公開で茅葺屋根の門は閉ざされている。春のツツジの頃と7月25日の「かぼちゃ供養」、秋の紅葉の頃のみ公開される。

後鳥羽上皇が熊野参詣で留守の折、ひそかに御所を出た松虫姫を住蓮上人が、鈴虫姫を安楽上人が剃髪した。このことは上皇の逆鱗に触れる。住蓮上人を近江の馬淵で、安楽上人を六条河原で、それぞれ斬首に処した。

住蓮上人、辞世の詠

極楽に生まれむことのうれしさに
身をば仏にまかすなり希里

安楽上人、辞世の詠

今はただ云ふ言の葉もなかりけり
南無阿弥陀仏のみ名のほかには

許されて帰京した法然上人は、鹿ヶ谷草庵の地に菩提を弔う住蓮山安楽寺を創建した。境内に住蓮房・安楽房の墓と五輪石塔、松虫姫鈴虫姫の墓がある。

霊鑑寺

谷の御所、鹿ヶ谷比丘尼御所とも呼ばれる臨済宗南禅寺派の門跡尼寺。山号は円成山。通常非公開だが、椿と紅葉の頃におりをみて公開される。江戸時代の初め承応三年（1654）に、後水尾天皇の皇女浄法身院宮宗澄尼を開基として建立された。

書院は二世普賢院宮宗栄尼のとき父後西天皇より御所御殿の休憩所を下賜されたもので、狩野派や・円山応挙の絢爛豪華な襖絵で飾られている。徳川家斉寄進の本堂と共に尼門跡寺院の景観を今に伝える。

明治維新まで5人の皇女が住職を務め霊鑑院宮と称した。300点にも及ぶ御所人形、貝あわせ、香炉など皇室ゆかりの寺宝が数多く残る。

境内の庭は回遊式庭園。春はツツジ、椿、秋は紅葉に彩られる。後水尾上皇遺愛の日光椿（京都市指定天然記念物）をはじめ、散椿・白牡丹・舞鶴・衣笠・白玉など30数種の椿の名木があり、椿の寺とも呼ばれる。

泉屋博古館

住友家が収集した東洋美術工芸品のコレクションを収蔵・展示している。泉屋は住友家の屋号「泉屋」、博古は宋の時代に編纂された青銅器の図録「博古図録」に由来する。開館は春（3月中旬～6月）、秋（9月～12月中旬）の年間7ヶ月の季節開館。

1号館四室で常設展示されている住友家十五代住友吉左衛門が収集した中国古代の青銅器や鏡鑑類は、「住友コレクション」の名で海外でも広く知られている。青銅器は単なる実用品ではなく、主に祭祀に用いられた。食器や酒器、楽器などがある。祀りの器であるがために動物の姿を模したり、表面を飾る文様も驚くほどバラエティ豊かにデザインされ、華麗でかつ精密に表現されている。漢字の原型と見られる文字を刻んだものなど、歴史的に貴重な品も少なくない。

2号館では日本・中国の書画や茶道具、文房具などの美術工芸品を折々のテーマに併せた企画展が催されている。

安楽寺

コース概観

秋の深まりを実感すると、今年の紅葉狩りはどこにしようと迷う。哲学の道に少し外れて沿うように建つ法然院、安楽寺、霊鑑寺を訪ねることにした。いずれも参観できるのはほんのわずか。年に数日間のみであるからか、境内は比較的空いていてゆっくりと散策ができる。東山の借景、境内を埋め尽くす庭園紅葉、寺宝を拝見させていただく。

京阪出町柳駅より市バス錦林車庫行きで約10分、浄土寺下車。山に向かって疏水を渡り、10分で法然院に着く。

多くのカメラマンがシャッターチャンスを待っている。JR東海の「そうだ京都、行こう。」のロケ地で有名になった茅葺の山門と紅葉。ひなびたい雰囲気を醸している。

山門を入ると両側に白い盛り砂白砂壇がある。水の流れと季節の草花を砂に描く。おしゃれ心満載。心身が清められ浄域に入る。右側の講堂は、もと大浴室。改装されて講演会・個展・コンサートの会場などに開放されている。

本堂前までの参道が開放されているので、縁側から参拝させていただく。恵心僧都作と伝える美しい阿弥陀如来坐像がまつられている。本尊前の一点の曇りもなく拭き清められた須弥壇上には、仏の道を説くという二十五菩薩になぞらえて、二十五の季節折々の生花が阿弥陀さまの裾を飾るように放射状に散華されている。すばらしい。幻想的で美しい光景が広がる。

方丈の狩野光信筆の襖絵は重要文化財に指定されている。方丈庭園は、中央に阿弥陀三尊を象徴する三尊石が配置された浄土式庭園。京の名水として名高い「善気水」が絶えることなく湧き続けている。本堂北側の中庭には、法然院を代表する三銘椿(五色散り椿・貴椿・花笠椿)が整然と植えられている。3月下旬から4月上旬にかけて美しい花をつける。

ゆるやかな参道から安楽寺へ向かう道は、しっとりと京都らしい風情が漂っている。左手に山門が見えてくる。石段を染める散りもみじ、緑と赤のコントラストの美しさは思わず息をのむ。季節は刻一刻と変わっていく。

本堂の前にはきれいに刈り込まれたサツキの庭が広がる。拝観日には、30分おきに本堂で寺の由来と仏像の解説があるので耳を傾ける。7月25日には「中風まじない鹿ケ谷カボチャ供養」が行われ、京野菜で名の知れたひょうたん型の鹿ケ谷かぼちゃが参拝者に振る舞われる。

安楽寺からぶらぶら歩いて霊鑑寺を訪ねる。昨年、両陛下がご訪問されて、「モミジがきれいですね」と話されたという。通りから石段を登り表門に。本堂の瓦に紅葉が舞う。すぐに大きな紅八重侘助。廻った所に玄関、書院がある。尼門跡寺院らしく華美すぎず質素すぎず、落ち着いた華やかさがある。狩野派や円山応挙の作品といわれる襖絵も落ち着いている。庭の入口右に見えるのが日光椿。樹齢三百年以上、7メートル近い大樹で見事な樹形である。

東山連峰の稜線を借景にした格調高い池泉回遊式庭園が山麓斜面に広がる。上下二段に分かれていて、下段の立石を多く用いた石組の大胆な客殿南庭は、杉苔と斜面の野面石垣と紅葉とのコラボレーションが見事。

「此奥俊寛山荘地」。霊鑑寺横に石碑が立つ。平安末期、後白河上皇の側近だった法勝寺の執行俊寛僧都が、平家の横暴に憤慨し、自らの山荘で同志とひそかに平氏打倒の密議を行った。密告により計画が発覚、俊寛は薩摩国鬼界ヶ島に流されて死亡。能、歌舞伎の「俊寛」で、その悲劇が語られている。

哲学の道から広い鹿ケ谷通りに出て泉屋博古館に向かう。中国古代の青銅器には驚愕する。呆れるほどのイマジネーションがこれらの祭器には詰まっている。「神鼓」は皮の部分がワニ皮を模して作られている。「虎ユウ」は虎が口を開けていて、その中に人間が虎に両手両足で抱きついている。ぴっしりと動物や魚、蟬などの文様で埋められた酒器。商時代(紀元前17世紀頃～紀元前11世紀)とその後の西周前期の青銅器は凄まじいイメージ力。

中庭の東山を借景とした眺めは、静かで落ち着いてのびのびとする。京の秋は人でごった返すのだが、ここは別天地。ゆっくりと静かに数千年前の中国に思いを馳せることができる。

《コースタイム》

京阪出町柳駅(バス10分)浄土寺バス停(10分)法然院(5分)安楽寺(3分)霊鑑寺(15分)泉屋博古館

〈地形図〉2万5千＝京都東北部

〈費用〉

法然院	800円
安楽寺	400円
霊鑑寺	700円
泉屋博古館	730円

(問い合わせ先)

法然院 ☎075(771)2420
伽藍拝観は4月と11月の1日～7日

安楽寺 ☎075(771)5360

霊鑑寺(京都市文化観光資源保護財団) ☎075(752)0235

泉屋博古館 ☎075(771)6411
月曜・祝日の翌日休館

山のレポート

山の地名を歩く㊹

赤石岳（アカイシ）

西尾　寿一

巨大な河口の砂浜で、小さな丸く赤い石を拾って「このきれいな石はどこから来たの」と女性に質問された男が、川を遡って探しに行ったという話は類形が多い。

石は赤でも青でも緑でもよいが、浜の中で際立って鮮かに光る小さな石の魅力は、想像力をふくらませて遠くロマンの世界へ人々を誘う。

大井川の河口にもよく磨かれた小さな赤い石が見つかったことであろう。その赤い石の発生源が赤石岳であるということが知られたのは相当古い時代のことであったろう。

ここでいう赤石岳（3120m）は、言わずと知れた赤石山脈（南アルプス）の大親分のことである。

赤石の名をもつ山は実に数が多い。大部分が火山噴火による山体や火口（カルデラ）の赤褐色を表現したものだが、赤石岳は山体の赤褐色とは別に、岩石に含まれるラジオラリヤ板岩の赤色からきている。その他、鉱山による赤い岩石（特に銅山など）によるものが多い。

かつて小島烏水（うすい）は「須磨明石の（明石）の砂が綺麗なように……」と述べたが、赤石岳の赤は、やはり赤石沢上部に露顕しているラジオラリヤ板岩の赤色によるものとするのが通説となっている。

この石は水に浸すと一層赤色が鮮かに浮きだすので、赤石沢で本物を見ることができた人は幸福である。

赤石沢の赤石を知った静岡側、つまり大井川から赤石沢あたりをよく知る人々によって赤石沢の名が起こり、その名がそのまま山名になったという、ごく自然の成り行きによるものであった。それ以前の名は「駿河岳」というのだが、この名は実物を見ないで便宜的に付したものだろう。

むろん、反対の長野県側でも「釜沢岳・大河原ノ岳」などあったが、赤石岳という大文字の風格に押されてしまったとみるべきかも知れない。

静岡の人達は富士山は別格としながらも、最も好きな山が赤石岳であるという。つまり、有名な日本列島を南北に走るフォッサマグナの南部地域において、赤石楔状帯付近で列島を弓なりに押し曲げ、東西線に変えたのが赤石山脈である、という確信のようなものが、この山の強力なパワーとして認識していることを意味していると思う。

赤石岳は、さすがに有名登山家が等しく絶賛し、紀行文に残している。

ウエストンは小渋川から登っているが、山の印象よりも、道中の出来事に興味を引かれているようで、イサベラ・バード同様、英国人の登山の特徴をよく表していておもしろい。

先にあげた小島烏水は「赤石山の記」で科学的な山岳観を示してくれる。

初期登山家に名文家が多いが、さすがの深田久弥も「赤石岳」の部では、先人達の文章を多く引用している。

小生の好みからいえば、小暮理太郎の「大井川奥山の話」の赤石岳を聖岳の肩越しに見たときの記述である。「聖岳の右の肩には、ガッシリと根を張った古塔の如き赤石山がのし懸るように聳えて、所々偃松の古苔が赤茶化た石の瓦に蒼黒く蒸している」。こんな表現は現代人には向かないかも知れないが、山行中に遠くからでも、初めて見たときの感動をよく表していて秀逸だと思う。

ところで、赤石岳にも修験道場としての役割があったと思うが、それとは別に民間信仰としての登拝があったことが確められている。

「山の神々いらすと紀行」（とよた時）によると、江戸時代には山岳宗教があり、1879年の測量登山が行われた後、「敬神講」の2名が登頂祈祷しているという。

また、加藤文太郎は「南アルプスをゆく」の文中、小赤石の南の剣ヶ峰に「蚤玉大神」の祭地があると述べており、古い地図には祠があるとも記されている。しかし、先のとよた時氏の本では「酔狂にも何回となく訪れたが何も見つからない」とある。

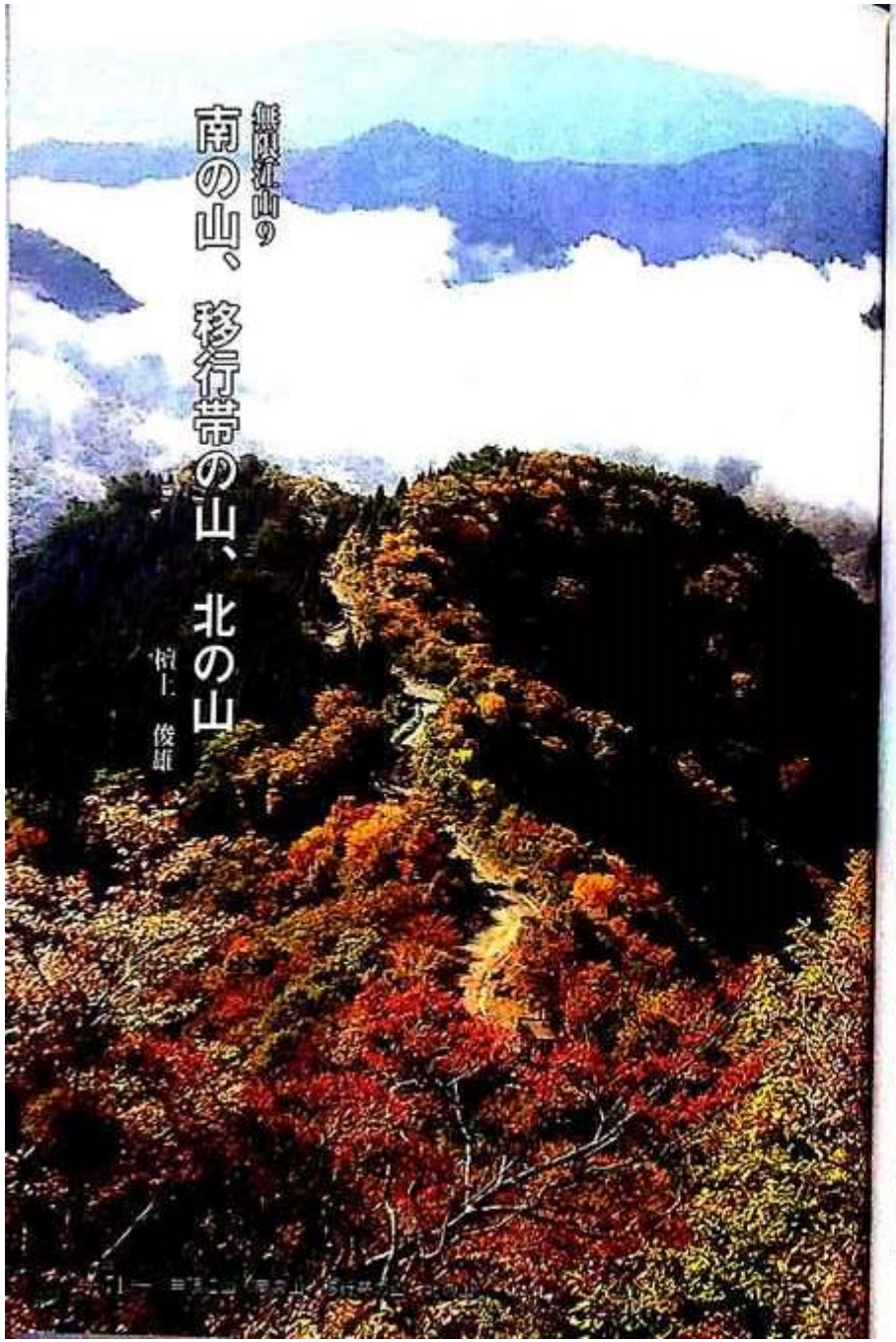
しかし、「静岡の百山」（明文出版社、平成三年刊）では「山頂の一角には祠もあり、石剣が乱立している」とあるのに、小生が赤石沢を遡行し、山頂に2時間も居たのに何も確認していないので本当はどうなのか？　闇の中である。

加藤文太郎の時代にはほとんどの山頂に「蚤玉大神」や、その他「養蚕」に関係する信仰が盛んであった。信州・会津・越後などの低山でも、そうした蚤神の石碑が乱立しているのを確認している。赤石岳にもそんな時代があったものとみえるが、時代の変化とはいえ、いったい誰がそれらの石碑を始末したのか不思議なことである。

冬に聖岳や荒川岳に登ってからも、赤石岳は「赤石沢から登らねばならぬ」と心に決めていた。

1972年8月13日、仲間と3人で静岡からタクシーで椹島（さわら）へ。牛首峠でツェルト泊。沢中で3日の予定が案外はかどり、2日目の夜は百間洞に着く。赤石沢はさすが赤石岳の懐深く十分堪能したが、赤石岳山頂で2時間も休養をかねて楽しむ。奥西河内下降はやめ、小渋川を何度も渡渉を繰り返してくだって行った。

赤石岳の名の源になったラジオラリヤの岩板は、上流で突然現れて喜ばせてくれた。特に沢底に赤く輝く岩板を見たときの感動は現在でも鮮かによみがえってくる。



新ハイキング社の書籍

第30巻 関東周辺のやさしい雪山登山コース　植手崇文 著

A5判196頁／定価1680円　尾瀬、高妻、美ヶ原、白馬、甲斐駒など57コースを掲載
新たに雪山に入る手助けに、厳冬期の山は山小屋が営業し勢の入山する山に限り、一段と難度の高い山は、天候が安定し、雪崩の危険がほとんどなくなるゴールデンウィーク前後を選んで紹介。

高木文一　初登攀の軌跡　岡部紀正 著

四六判・184頁／定価1890円　われ、谷川岳にアルピニズムの灯火を見ゆ
慈恵医大出身アルピニストの谷川岳・一ノ倉沢奥壁初登攀など輝かしい業績を、山岳部後輩の著者が熱情溢れる筆致で詳述。

第29巻 日本300名山スケッチ登頂　深谷健雄 画・文

B5判208頁／定価2200円　スケッチ山旅の画文集
50年をかけて達成した、日本300名山のスケッチ集。800葉のスケッチに丁寧な説明文を添えるとともに、300山を簡潔に紹介。

第28巻 バリエーションルートを楽しむ　松浦隆康 著

A5判304頁／定価1680円　花・巨樹・滝・眺望など魅力の100コース
好評の『静かなる尾根歩き』著者による第2弾。奥多摩・奥武蔵／高尾山・扇山付近／丹沢・箱根／道志・御坂／大菩薩付近など全100コースに略図付き。

第26巻 静かなる尾根歩き　松浦隆康 著

A5判288頁／定価1680円　奥多摩から八ヶ岳まで日帰り100コース
今までむずかしいと思っていたコースへの道を開くガイド書。コースにグレード区分をつけ、最新の踏査にもとづき全て分かりやすい略図入りガイド。

第24巻 山岳巡礼　佐藤光雄 著

B6判362頁／定価1680円　山に魅せられた一登山家の珠玉の紀行集
春の穂高、夏の大雪、秋の越後北方後線、冬の御岳、ひとり拓く山の世界。
本格的に山に取り組む人への良き案内書。

歩き遍路の独り言　後藤典重 著

A5判176頁／定価1200円　あなたも歩ける四国遍路みち　1200キロ
歩いた遍路旅の喜怒哀楽など数多い思い出を日記風にまとめた書。歩くための参考になる四国遍路の歴史、コースタイム（距離・時間・歩数等）・宿泊先など、必要な資料を掲載。

●本誌添付の振込用紙でのご注文は、送料当社負担

新ハイキング社
〒114-0023 東京都北区滝野川7-5-5　Tel/Fax 03-3915-8110

樹林の山では、紅葉が終わって葉を落とすと森は驚くほど明るくなる。落ち葉がつくる錦織のカーペットを踏みしめて歩けば心がときめく。湖西に住んでいると、この季節になると針畑や芦生の森が思い出され、足を運ぶことが多くなる。

登山口である生杉ブナ原生林への道すがら、よく晴れて冷え込んだ朝であれば、針畑の谷には霧がかかることが多い。こうした日はおにゅう林道へ立ち寄ることになる。焼尾地蔵あたりまで上がると霧の上に出て、谷はすっかり雲海に埋まって壮観だ。日が昇り、霧が上がり始めてカメラマンは帰ってゆくが、登山者にとっては、雲海が消えるまでも右岸の芦生の森最高峰三国岳などにかかる霧の風景が刻々と変化し、見ごたえがある。

生杉ブナ原生林から三国峠へ登り、尾根伝いに三角点ピークのシンコボを目指す。気候の移行帯特有のブナ混生林の原生の森は樹種の多さが魅力で、濃密な森は魅力にあふれる。さすがにこの季節になると落葉樹は冬支度に入り、葉が落ちて明るくなった森は静けさに包まれる。

林床一面にうずたかく落ち葉が積もり、靴を沈めて歩くほどであり、原生林芦生の森ならではのもの。ふかふかの中をカサコソと音をたてて歩くのは楽しい。自然が豊かであることがうずたかく積もった落ち葉から感じられ、自分ごとのようにうれしくなる。

最近は余呉の高時川源流にもよく足を運ぶ。地元の人達といっしょに整備する余呉トレイルは行市山から栃ノ木峠までの中央分水嶺ルートだけでなく、敦賀湾五幡への中河内塩買いの道や、大黒山から妙理山を経て横山岳に至る淀川水源の森ルートも歩けるようになった。また中央分水嶺の奥山というべき下谷山やその南尾根、三国岳左千方への安蔵山からの尾根など、高原のような安曇川源流とは対照的で、雄大な尾根と深い渓谷が魅力だ。

山の魅力は山容によるところが大きく、登高欲をそそるカタチにこだわる人が多い。そして通うにつれて肌理の細やかさが気になってくる。山の肌理とは植生であり、森や草原である。自然のままであればいうことないが、仮にスギ、ヒノキやカラマツなどの人工林があってもよく手入れされた森であれば、それはそれなりに鑑賞の対象となる。

もののけ姫の森（屋久島）

原生林の山では、芦生の森とともに思い出されるのが屋久島であり、この季節の明るさや吹き渡る爽やかな風は貴重だ。人気の山は人出が絶えることがなく、自然を愛でるつもりが人の背中ばかり見て歩くことになりかねないので、コース選択には注意したいものだ。淀川の原生林から草紅葉の花之江河を経て岩峰黒味岳へ登るコースなど、縄文杉から宮之浦岳への一般コース以上に晩秋の屋久島にふさわしい。

また、屋久島がそうであるように、玉山のある台湾も晩秋が最も登りやすい季節として知られる。私も昔この時期に登ったことがあるが、澄み切った青空の下での排雲山荘から山頂、そして氷食谷の道を八通関へ至るすばらしい一日は今でも忘れられない。

石狩岳からトムラムシ（北海道）

登山は植物の垂直分布を体感するものであるが、南北に長い日本列島に住むものにとっては水平分布も手軽に味わうことができる。高山から低山へ、北から南へ季節は深まってゆく。これまでは南へ紅葉前線を追いかけてゆくことが多かったが、残暑が厳しいなかで、北へいち早く秋を迎えにゆくのもおもしろそうだ。

そうした意味もあって、私はこのところ北海道の山への思いにかられることが多い。早くから坂本直行の画文集など、北の山の多くの本に親しみ旅はするものの、本格的な登山の機会には恵まれなかった。ここで主だった山にぜひ登ってみたいと思っている。私の注目する中央分水嶺において、大雪山など石狩川と十勝川、天塩川の大水源地帯であり、特に分水嶺上のトムラウシや石狩岳などから始めたい。

昨年秋の札幌から稚内まで旅では、大雪以北の茫洋とした中央分水嶺の山並を望むことができた。北の大河天塩川伝いの国道を進むと、名寄あたりからピヤシリ岳、その北には最北の1000㍍峰である雨岳などがあり、高くはないがこうした未知の山も興味深い。

玄関口稚内で1泊し、朝早く丘の上の氷雪の門に登った。宗谷海峡を利尻や礼文へ向かうフェリーに、そのうちに行くからよろしくとエールを送ったものだが、北の果てではこうした低い丘も周氷河作用で出来た地形であり、植生も本州で考えれば山の上の雰囲気であり、北海道もここまで来ると街の周囲の自然からしてインパクトがある。

身近な芦生の森や余呉奥山、南は屋久島、できれば台湾まで。そして北海道の山をあわせて楽しむことができれば、垂直分布3000㍍、水平分布2000㌔ということで、この国に生まれ、山登りをしてきてよかったということになる。この考え方に従えば、紅葉から雪で山が覆われる間も片時もおろそかにはできないことがわかるだろう。

コースガイド㊤

北河内

（里山シリーズ59　四条畷市・大東市）

観音と城跡と伝説の滝
飯盛山周辺の散策道

一般コース（★★）

長宗　清司

JR京田辺駅から学研都市線（片町線）の快速に乗り、四条畷駅で普通に乗り継ぎ、次の野崎駅に降り立つ。

野崎の観音さんへは、商店街を抜けてゆるい坂の参道を、やがて厳しい百五十段余の石段を上り、山門に入る。左手の植込みには「野崎参り」の歌詞が彫られた石碑。売店の外れには「お染久松の塚」。石段を上り本堂に詣でる。

飯盛山へ登るのは本堂左から。野外活動センターへの標識に従って登る。最初の展望台では、優しい眼差しの慈母観音立像に迎えられた。その脇には、「観音の覚見やりつ花の雲」と彫られた芭蕉の句碑がある。石段の連続に降参して登る途中にはひと息つける東屋、休憩所、ベンチが点々と気配りしてある。珍しい石造九重塔もあった。

野外活動センターに行く若者達に大勢出会った。「絵日傘コース」と名付けられた登山道の周辺は折からツツジが満開である。花は大型でボリュームたっぷり。道に垂れ下がるほどで、りっぱな花道というところである。七曲りの道をつづら折れに登り、二つ目の桜池からは、野外活動センターへの50人の小学生やユニホーム姿の学生達と別れ、尾根に入って飯盛山に向かう。

山城の気配はすでに消えて期待を裏切るが、庶民の森として解放され、本丸跡（千畳敷）には、NHK大阪FMの放送塔が建ち、もとは高槽だった山頂展望台地には、この山で「南北朝の戦」の折に自刃した楠正成の子正行（小楠公）の銅像がある。多くの登山者が車座になって昼食をとっていた。

午後は、銅像の脇からツツジ咲く山道を通り、T点を右にとり、舗装路をくだって日蓮宗飯盛山楠公寺（飯盛山城の馬場）前に出る。

飯森山山頂に建つ小楠公の銅像（楠正行）

休憩のあと、寺の裏側に戻り「滝谷楠水の場」と書いた古木の標識がある支谷へ下りる小道をくだる。山の斜面から滔々と湧き出る清水の味はまろやか。水汲みの人と多く出会った。標識のある「蟹ヶ坂コース」との合流点に出て、室池方面の道に向かう。途中で右折して木の鳥居をくぐると、その先に五大龍王を祀る権現の滝が目に入った。偶然、私達が訪れた日は護摩焚きの日で、20人程が祭事をされていた。

——この滝には伝説があります。今からおよそ千三百年前の奈良時代。村の人々が大旱魃で苦しんでいました。雨乞いをしても利き目のない日々、たまたま村を通りかかった僧行基に「どうかお助けください」と御願いしました。僧行基は、水の涸れた滝壺に自分の衣を敷き、お経を唱えました。するとそこへ見たこともない不思議な人物が現れて、次のように言いました。

「私は、天に住む若い龍です。私の大龍王様が雨を降らさないようにしているのです。私は、あなたたちのお気持ちに答えましょう。でも、大龍王様は怒って私を殺すでしょうが、その時きっと雨が降るでしょう」といって消えてしまいました。やがて、にわかに天空が真っ暗になり大雨が降り出しました。野山の草木、田畑の緑が甦りましたが、大龍王の怒りを受けた若い龍の体は三つに裂けてしまいました。若い龍のお陰でその年は豊作となりました。村人たちは、龍に深く感謝して龍の落ちた場所に、それぞれ寺を建てて、何時までも若い龍のことを忘れませんでした。今もそれらの寺は、龍頭寺（現龍光寺・大東市）、龍腹寺（廃寺）、龍尾寺（現存・四条畷市）として残存しています——

権現の滝

権現の滝は、高さ20㍍足らずだったが、中段で雄滝と雌滝に分かれ、水量多く、滝壺には虹が浮かんでいた。

帰路は、権現川沿いのアスファルト道を下流へ「蟹ヶ沢コース」をたどる。道標にしたがって、高みの住宅街をうねうねとぬい、権現の滝伝説を秘めた龍尾寺やスサノオノミコトをまつる御机神社、住吉平田神社、南北朝時代の四条畷の合戦で戦死した楠正行など24名と、正行の母をまつる四条畷神社、参道の商店街（楠公通り）をくだり、踏切の先にある正行公の霊をまつる墓所などにも立ち寄って、四条畷駅に向かう。

（平成22年5月16日歩く）

《コースタイム》

JR野崎駅（10分）野崎観音（慈眼寺）（45分）桜池（15分）飯盛山（15分）楠公寺（15分）滝谷楠水の場（20分）分岐地点（10分）権現の滝（20分）龍尾寺（10分）住吉平田神社（10分）四条畷神社（15分）楠正行の墓所（10分）JR四条畷駅

◆地形図▽2万5千＝生駒山

（問い合わせ先）

四条畷市役所産業労働観光課

☎072（877）2121

大東市役所

☎072（872）2181

コースガイド(2)

鈴鹿

続・近江側から登る鈴鹿の山々30
高畑・猿ヶ山・比婆之山・イワス

中級コース（★★★）

礒部　純

芹川沿いの北側には、男鬼を挟んで東西に壁のように連なる尾根がある。これまでこの尾根に入谷から取り付いて、高取（683㍍）から比婆之山へと歩いたことは何回もあるが、猿ヶ山・高畑のある甲頭倉の東尾根を歩いたことはなかった。

平成18年4月に岩野さんの例会で初めてこの尾根が採り上げられて以来、何度かこの尾根を歩いているが、季節によってはすばらしい花にも会えた。

今回は、芹川の中村から高畑、猿ヶ山の尾根を登り、比婆之山、イワスを踏んで屏風集落へくだるルートを紹介する。

登山口と下山口の距離が離れているので、下山口の屏風下の道の広場へ置き車をし、東へ向かって寺院広場手前の道の広がった場所へ駐車する（寺院広場へは駐車しないこと）。中村まで車道を戻り、尾根突端の民家の東横が取付点である。道から一段上がると、杉林の尾根は最初から急登で、微かに残っている踏跡を登って行く。尾根にはテレビアンテナのケーブルが走っており、それを目安に登っていけばよい。

尾根が斜面に変わると道跡もいつしか消えてしまう。上へ登るほどに斜面は急になり、落ちてくる小石に注意して登らなくてはならない。石を落とさないように一歩一歩注意しながら登り、斜面に岩塊が目立ちだすといくぶん傾斜もゆるくなり、左からきた尾根に合う。カラタチの木が何本も立っており、秋になると黄色い実を幾つも見ることができる。

ここからカレンフェルトの岩塊がゴロゴロしている尾根に変わる。緑の苔むした岩を乗り越えたり廻り込んだりしての登りで、イヌツゲが行く手を遮りうるさい。ひたすら岩ガラの尾根を登り、勾配がゆるくなって尾根も広くなってくると、雑木の尾根に変わる。

疎林を登って行くと、最後に岩ガラを越えて尾根が左へ振る。この先で右手斜面にある杉林を抜けると、比較的平坦なピークへ着く。ここが標高点608㍍の高畑と呼ばれるピークである。高畑の山名は、このピークの北鞍部に入谷から甲津倉へ越えるミヤマ越の峠道が生きていた頃、この北斜面一帯で畑を耕作していたことから名付けられたといわれている。山頂は雑木林に囲

猿ヶ山への登高尾根

まれ、展望は全く無い。

広い疎林の尾根を北西へくだる。鞍部まで下りて東斜面を眺いてみたが、ミヤマ越は廃道になって久しいのか、杉林のなかに仕事道だけが目に付き、昔の道跡は確認できない。鞍部から北へ、尾根の東側に5㍍程の幅に帯状で立ち並んでいる杉にそって登ってゆくと、猿ヶ山へ着く。以前の地形図には載っていなかったが、最近に測量されたのか、新しい地形図には標高点637㍍と記されている。

山頂は平坦で雑木の疎林。林の間から東方間近に高取が、その後ろには霊仙山の近江展望台が見えている。この猿ヶ山は甲津倉の呼称であるが、山名の由来についてはわかっていない。

猿ヶ山から北西斜面を尾根なりにくだってゆく。北方向へ導かれてしまいそうな斜面であるが、左手にのびている尾根へのらなくてはならない。鞍部へくだって、小さなコブを越えて尾根を登ると、そこには甲津倉から男鬼へ越える古い道跡が残っていた。

2年前に高取から来て、この尾根をくだろうとした時、間違ってくだってしまった尾根を右手に見ながら、急な尾根斜面を杉林に沿って登って行くと、男鬼の南に壁のように東西に横たわる尾根に登り着く。この尾根交点のピークは比較的平坦で、岩野さんによれば、「ここは昔城があった跡だ」と言うが、後で調べてみても、どの時代の誰の城かは不明だった。

このピークへは、入谷の火葬場跡から西の尾根へ取り付いて標高点649㍍へ登るか、谷を北へ直進し、昔の男鬼峠へ出て、東西の尾根を西へ登って標高点649㍍へ登り、高取を踏んで尾根を西進してこのピークに来ることができる。

ピークから尾根を西へ向かうと、以前は腰程まで生い茂っていたササが消えて歩きやすい。尾根はカエデやミズナラの多い雑木疎林。堀切のような溝を越え、小さなコブを越えたあたりに、甲津倉から男鬼へ越えるハナシノ越があるはずだが、尾根の両側を注意して歩いて見ても、その道跡を見つけることはできなかった。道が登りにかかると、以前ササに覆われていたが、左手のササは消えている。最後の急登をピークへ登り、右手へ細長い平坦な尾根を70㍍も歩くと、比婆之山の山名標識のある尾根の盛り上がりへ着く。イワスへ向かうには、ここから西へ下りて尾根へのるのだが、せっかくここまで来たのだから、この北にある比婆神社に参拝しよう。

比婆之山の標識から北へ向かうと、

尾根が広がった場所があり、大木が何本も立っている。そこが標高点669㍍である。方向を東へ振って広い尾根をゆるくくだると、尾根先端の左下に比婆神社の屋根が見えてくる。

比婆神社は、湖北地方が出雲国であったという近江高天原説を信奉する人々により創建された神社である。ご神体は社殿の後ろにある白い大岩であり、ここに伊邪那美命が祀られているという。

神社に参拝したら比婆之山まで戻り、西へくだって尾根へのる。比婆神社から戻る時は間違いやすく、比婆之山の標識を越えて尾根を南へ直進して東から登ってきた地点まで行ってしまい、そこから尾根を西南へくだってしまうので注意が必要だ。

尾根にのるとゆるくくだり、平坦な尾根を歩いて登り返すと送電線鉄塔。南北に展望が開け、北方には、手の届きそうな所に男鬼山があり、左手には彦根の街と琵琶湖が、右手には伊吹山が霞んでいた。

鉄塔からゆったりした尾根道を西へ向かうと、南北にのびる尾根に突き当たる。その尾根へ登って杉林の尾根を左へ向かい、「こんな所に何で?」と思う堰堤を渡って100㍍も行くとイワス山頂。平坦な場所だが、南は石灰岩の採掘で絶壁になっている。

イワスは、岩巣からきていて、石灰岩の多い場所の意から名付けられたといわれ、昔は三角点がこのピークに設置されていたが、住友の石灰岩採掘で山が削られ、このピークも無くなることが懸念され、三角点は西にある山へ移設された。それが標高550・0㍍のイブキである。

イワスの南端に当たる絶壁に立つと、南の景観がすばらしい。左遠くに高室山が見え、正面にはヒヨノ、右下にはイブキの尾根がのびていて、大向の尾根の間に後谷の集落が見えている。木の葉が繁っていなければ、霊仙山や鍋尻山も見えるはずが、場所を変えないと見えない。

下山は、岩壁の東へ廻り込み、南へ

人気商品紹介
◆テクリ・エル◆

オリジナルザック & 登山用品専門店
神戸ザック
http://www.h2.dion.ne.jp/~kobezac
従来のテクリの大型です。
タウンユースからフィールドに小ぶりなディザック。
しっかりした二本締めの設計。底部も強いケミカルラバーを使用しています。雨蓋が大きくなり、山登りの本格仕様になりました。
☆20ℓ☆
•カラー　レッド×チャコール　・マゼンタ×チャコール
パープル×チャコール　・ライム×チャコール
ブルー×チャコール
•重　量　700g
•素　材　高密度ナイロン
•価　格　¥8,000＋消費税
イモック山遊行くらぶ
春夏秋冬、季節を気にせず、
里山・低山・名山を訪ねます。
お気軽にご参加下さい。

OUTDOOR SPORTS SHOP
IMOCK.
KOBE
〒653-0038 神戸市長田区日吉町3丁目1番30号
カナゾノビル2F
TEL (078) 621−5851
FAX (078) 621−3528
営業時間／10:00〜20:00　毎日曜日不定休

下りて尾根へのる。

ここから移された三角点のあるイブキへ行くには、イワスから北へ引き返し、車道の男鬼峠、猫峠を踏んで、尾根を南へ登るか、くだった暗部から採掘場の南端を西へくだり、猫峠まで行って尾根を南へ登ればよい。

今回は屏風へくだるので、このまま尾根を南へ向かう。ゆるく登って、朽

イワス

ちかけた小屋の横を通って林へ入ると、イヌツゲの低い生い茂った岩ガラの尾根。ここでも苔の生えたゴロゴロしている岩を踏んだり跨いだりしての歩きで足が疲れること甚だしい。いつの間にか大向のピークを過ぎ、尾根の先端からくだりになると岩ガラは消え、左へ振ると雑木疎林の広場へ下りる。この尾根を後谷から甲津倉へ越える道があったようだが、ここがホリベタと呼ばれていた峠なのだろう。休憩に最適な場所である。

右手の尾根を南へくだって行く。尾根は自然に左へ曲がってゆくが、それに惑わされずにまっすぐ南の急斜面をくだると、左が檜林右が灌木の平坦な細い尾根へのる。林の境界をくだり、尾根が左へ振って傾斜が急になってくると、右手の林が切れた尾根へ出る。その尾根をくだってテレビアンテナ塔を過ぎると墓地へ下り、東へくだると屏風集落はすぐ。

屏風には十数戸の家があるが、常住しているのは老人ばかり4人だけだという。他の家の持ち主は時々帰ってくるだけのようだが、常住の4人も冬になるとここを離れ、娘や息子の所で暮らすという。昔から山手にある今畑・入谷・甲津倉・屏風・後谷・向倉・桃原など、集落の暮らしは厳しいものがあったに違いない。

屏風から、車道の東下にある昔の道を南へくだる。屏風に住んでいた子供達は、こんな急な道を毎日上り下りしていたのかと、その苦労を身に刻み込んでのくだりであった。屏風岩からくだる道に合い、左へ斜めにくだると、置き車をしていた車道へ下りた。

（平成21年10月16日歩く）

《コースタイム》
寺院道広場（2時間）高畑（15分）猿ヶ山（25分）東西尾根（30分）比婆之山（10分）比婆神社（35分）イワス（1時間30分）屏風集落（35分）屏風下の道の広場

＜地形図＞
2万5千＝彦根東部・高宮

コースガイド③

三河

花の百名山 石巻山

一般コース（★★）

藪木 伸人

石巻山には、千百種を超える植物が自生しているといわれ、タチバナ・カラタチといった分布北限の種もある。山頂部の石灰岩峰に生育する植物群落は独特の分布を呈し、国の天然記念物に指定されている。また、この山は陸貝の宝庫としても知られ、クビナガギセル・イシマキシロマイマイ・オモイガケナマイマイ・ミカワマイマイ・ベニゴマオカタニシ等の希少種が生息している。

『花の百名山』では、オドリコソウが紹介されているが、私達は、分布の限られたイワツクバネウツギやマルバイワシモツケの花を求めて、5月下旬に訪れた。

豊橋駅に10時に着き、豊鉄バス四ツ谷行きに乗車。10時半頃、石巻登山口バス停で下車した。広い車道を東進したため、少し遠回りして間場口の登山口に着いた。「山上社まで1・6K、30分、山頂まで2・2K、50分」の指導標がある。ここからは山林内。

地形図通りゆるやかな山腹道を登って行くと、25分程して日向に出た。左には送電鉄塔が建ち、右には「高井主膳正自刃伝説地」への標識が倒れていた。この人物は、南北朝時代、吉野朝側に味方して石巻山城を守ったが、足利氏に敗れて自害したと伝えられる。ここから15分で車道に出た。クサノオウがたくさん咲いていた。

山頂へは、石巻神社山上社（祭神・大己貴神＝大国主命）の鳥居をくぐって石段を上るが、車道を西方向に戻ると無料駐車場がある（約30台）。石段途中を右に入ると、豊橋市石巻自然科学資料館があり、先に寄っておくと事前に学習でき、自然観察路マップも入手できる（入館無料、午前9時～午後4時30分開館、月曜休館）。

山頂の石灰岩峰

さて、山上社手前を右折して山頂に向かう。ウィキペディア等ネット上では、山頂部がロッククライミングのゲレンデと紹介されているが、現地にはクライミング禁止の注意書があった。ヤマアイやコクサギの縁を見ながら、気持ちよく10分程登って行くと、白い石灰岩塊が現れ始める。

風化水蝕によって出来た「蛇穴」は、看板によれば「径60cm、奥行13m」。冷気を噴き出していて涼しい。以前、キイシモツケを見に行った龍門山にも、このような穴があったのを思い出した。

さらに5分程で「ダイダラボッチの足跡」。続いて「大天狗・小天狗」の岩塊に出合う。道はここから左手に少しくだるのだが、直登して行くと、山頂岩峰の直下に出るようだ。岩峰から垂れ下がる藤花を仰ぎながら、鎖場に近づく。鎖が無くても登れるくらいの場所だった。最後は岩壁北側から金属製の階段を上ると山頂に着く。信仰の山らしく、天辺の岩に注連縄が巻かれている。

南の三ツ口池（豊川用水の溜池）を見下ろすと、けっこう高度感を味わえる。赤岩尾根の向こうには、前に歩いた神石山から座談山の山並が覗いている。西の岩峰との間は垂直のキレットで隔てられていて、その岩壁の底にも白い花が咲いていた。豊橋市街の先には渥美半島が見え、反対側（東北東）には坊ケ峰、富幕山が望まれた。その間にあるはずの富士山は、残念ながら確認できなかった。風は心地好かったが、低気圧が近づいていたので少々強すぎた。帽子を手に持ち花を探すと、マルバイワシモツケがごく一部だけ咲いていた。

今年は開花が遅めのようだ。イワツクバネウツギも見当たらなかった。マサキ・イボタノキ・ナワシロイチゴ・ヤブサンザシ・マメガキ、青い実を付けたビワ等を観察する。石灰岩地特有のクモノスシダはわからなかったが、ホラシノブやカタヒバが着生していた。最後にもう一度、偉容を誇る岩峰と小さな花たちを目に焼きつけてから下山した。

陸貝のほうは、妻が小さなのを見たと言っていたが、それだけだったようだ。貝たちに会うなら雨上がりの日がよいようである。帰途に10分程、自然科学資料館を見学してから、出発地点の登山口へ戻った。石巻登山口バス停の手前で、やって来たバスに手を挙げて乗せてもらった。乗り損なうと半時間程待たねばならないところだった。なお、豊橋駅から金田住宅前行きのバスに乗って終点で降りても、同じ位の道のり（約700m）で間場口の登山口に着く。

《コースタイム》

石巻登山口バス停（17分）間場口（40分）山上社（30分）石巻山（30分）資料館（35分）間場口（13分）石巻登山口バス停

＜地形図▽2万5千＝豊橋

（問い合わせ先）

豊鉄バス豊橋営業所 ☎0532（44）8410

豊橋市石巻自然科学資料館 ☎0532（41）4747

コースガイド④

東紀州

大泊駅から 熊野古道松本峠（伊勢路）

一般コース（★★）

松尾 一郎

気軽に熊野古道の伊勢路ハイキングが楽しめ、石畳が残り、道標もよく完備されており、安心して歩ける。

JR大泊駅で下車。駅前の案内板の右袂から里へくだり、国道311号に沿って駐在所を過ぎて宮川に架かる大泊橋を渡り、国道42号と合流する大泊海岸交差点に着く。信号を渡ると熊野古道伊勢路の松本峠登り口（案内板）とある。松本峠は熊野市の大泊と木本を結ぶ、名勝鬼ヶ城の山手峠越えの道となる。

登り口から改修された階段を登ると、江戸期に築かれたやや不揃いな石畳の登り道が延々と続く。途中、ベンチもあるが鬱蒼と樹木に覆われた古道は昼なお暗い。単調な石畳の登り坂もゆるみ、前方が明るくなってくると竹藪に囲まれた松本峠（127・7㍍）に着く。峠には妖怪と間違われ撃たれた、鉄砲の弾丸跡のある地蔵が立っている。

松本峠から南へ鬼ヶ城展望台への道が分岐しており、立ち寄ってみよう。

地道の尾根をしばらく歩き、東屋のある展望台に着く。南に展開する弓状の七里御浜ビーチの展望は絶景である。遊歩道はここよりさらに南へ岬の先端までのびており、尾根を南進し、木枠階段を登って滝見の丘を過ぎると、だだっ広い鬼ヶ城跡の広場に着く。

三等三角点（153・2㍍）が埋設してあり、広場の岬突端には鬼の見晴台（木製展望台）があり、熊野灘が一望のもとに見渡せる。

なお、三角点のある広場より、東へ鬼ヶ城〔注1〕への下山路があるが、肝心の鬼ヶ城遊歩道が平成21年の台風で崩落し、全面的に通行止（修復には2～3年を要す）となっており、観光施設の鬼ヶ城センターも改築中なので下りないほうがよい。

松本峠（鬼ヶ城跡は左へ入る）

さて、松本峠に引き返し、木本（熊野市街）方面にくだる。登りとはうって変わった明るいルートで、明治初期に築かれた快適な石畳をくだってゆくと梅林が現れる。ここも七里御浜の好展望地だ。途中トイレもあり、ゆったりとくだれば、古道はやがて点在する民家の軒をかすめ、S字状の弧を描くように高度を下げてゆく。つづら折れの石畳道を熊野市街を見下ろしながら、最後は階段道となり、木本側の登り口（道標）に下り着く。

熊野市街へ入れば、木本神社にも立ち寄ってみよう。標識の案内により南方向に町中を散策しながら道なりに歩き、要害山と木本小学校に挟まれた街路を行くと、JR熊野市駅の駅前広場に着く。

鬼の見晴台

花の窟（注2）、獅子岩（注3）へは、駅前からタクシーを利用して花の窟まで行き、順次、熊野市駅へ戻ってくるのが楽で便利だろう。花の窟からは七里御浜の海岸沿い遊歩道または渚（砂浜で歩きづらい）を歩き、神仙洞の傍らを過ぎ獅子岩に着く。

獅子岩からは手前の階段を上がると国道42号の三差路で信号を渡り、熊野市駅への車道に入り、井戸川に架かる亀鈴橋を渡り、まっすぐ進めば熊野市駅に着く。（平成22年2月20日歩く）

《コースタイム》

JR大泊駅（10分）国道42号大泊海岸交差点（松本峠登り口）（25分）松本峠（5分）東屋（展望台）（15分）鬼の見晴台（20分）松本峠（8分）梅林展望所（15分）松本峠下山口（5分）木本神社（16分）JR熊野市駅（タクシー5分）花の窟（18分）獅子岩（17分）JR熊野市駅

〈地形図〉

2万5千㌢木本

（問い合わせ先）

熊野市役所　☎055（89）5501

（注1）国指定の名勝天然記念物。海風の浸蝕と数回に渡る大地震で、隆起した凝灰石が作りだした奇景が約1㌔に渡って続く。

（注2）イザナミノミコトが葬られたといわれる御陵。高さ48㍍の巨岩が御神体で社殿はない。かつての自然崇拝の姿を今に伝える場所。

（注3）熊野灘に向かって吠える如き獅子岩は、高さ25㍍周囲210㍍の奇岩で、国指定の名勝天然記念物。南側の神仙洞と共に、飛らを流れる井戸川上流の大馬神社の如犬とされ、毎年8月17日に近辺の海浜で花火大会が挙行される。

せせらぎ

山に関する最新の情報を随時お寄せください。
1行15字詰め、30行程度です。原稿用紙下部に、ご自分の住所・氏名をお書きください。都合により掲載できないことがあります。

題字　故　小林琥珀三

6月上旬、久しぶりに熊野古道を歩いた。コースは和歌山電鉄の伊太祁曽駅から海藤白神社だが、3年前にはJR布施屋駅から伊太祁曽駅、11年前にはJR海南駅から地蔵峰寺（JR加茂郷駅）を済ませており、残りの区間を踏破したことになる。

今回、最初に訪ねた紀伊一之宮「伊太祁曽神社」では、参詣を済ませてから見た木彫りの作品が注目された。〈木の彫くぐり〉が最高だったが、犬・熊・フクロウなどもあり、製作はチエンソーカービングによるとのこと。その他、霊石「おさる石」など印象に残ったものも多いが、御神木の大杉は特にすばらしかった。

伊太祁曽神社から、次々と熊野古道の名所に立ち寄って行く。強く記憶に残っているのは、奈久智王子社跡、竹内宿福藤温泉の井戸、蜘蛛池、汐見峠、松代王子跡、般戸王子跡が挙げられる。最後に藤白王子跡の藤白神社では、千年楠に久しぶりの再会を果たした。

帰路、海南駅へ向かう途中、藤白の鈴木屋敷を再訪し、家内に紹介する。鈴木姓の元祖とされる古い建物である。

熊野古道はこれまでいろいろ歩いており、熊野本宮大社へも参詣しているのだが、東海道や中仙道と同様、全てを踏破しているわけではないので、未踏のコースをできるだけ体験したいものと考えている。

（枚方市　東谷　宏）

6月末～7月末にかけて北海道の山26峰に登った。本州が梅雨の頃、北海道は記録的な猛暑日もあって好天が続いたが、本州が梅雨明け後はオホーツク海に二つ目低気圧が居座ったりして不安定な天候が続いた。

最終日、カムイエクウチカウシ山に登るため、週末の悪天候をやり過ごして山に入った。この山の取付は林道を2時間、さらに札内川を何度も渡渉して、ヘツったり高巻きをして八ノ沢出合まで2時間歩いて八ノ沢をつめ上がるというものだ。

1日目、八ノ沢出合にテントを張り、翌朝4時出発としたが、3時頃、テントを叩く雨の音で目が覚めた。しばらく様子を見たが雨は止みそうにない。タイムリミットを決めて川をくだることを決断した。

東京からのツアー登山の6人が二つのテントに居たので声を掛けたが、リーダーは「様子を見る」と言って動かなかった。川はすでに増水が始まっていて、深い所では流れが腰まであり、流れも速くギリギリのところで帰ることができた。

翌日の新聞を見ると、このツアーグループが、道警ヘリによって全員遭難救助されたとの記事が載っていた。あらかじめ道警に登山届けが提出されており、南星電話で救助の要請があったそうだ。

私は、もし川を渡れなかったら、ビバーグをして非常食を食いつないで減水を待つ覚悟を決めていたが、このグループはタクシーを呼んで頭越しにあっさり下山していったようなものだ。

何はともあれ、昨年は岩の上で遊ぶナキウサギ、それを追うオコジョを見、エゾ雷鳥やキンザンマシコに会えたが、今年はついにヒグマに会えたのだ。沢から上がってきた二頭のヒグマがいきなり目の前数10の所に飛び出し、奥の方へ走り去っていった。小熊が、母熊にピッタリ寄り添ってモコモコと走り去る後姿は幸せそうだった。「熊さんは人目を避けて森の中でひっそりと暮らしているんだねー」。

（熊谷市　山形　明）

7月18日、新ハイ例会「椹現谷から白谷林道」に参加した。

昨年、夏の沢歩きは集合場所まで行ったのに、準備不足を実感して出発間際に断念し、仲間に迷惑をかけた。次に参加したらお詫びをと、ずっと胸につかえていた。

山慣れしているみんなは、私の気後れなど何のその。「久し振りだね～。生きていたかい」と笑顔で迎えてくれた。今回は花を愛でながらの林道歩き。再出発にはもってこいだ。でも、岩野山行は林道といえどもハンパではなかった。

8時半に歩き始めて、歩き終えたのは4時半。「もう十分で～す」と絶和状態。そんな中、いちばんの楽しみはお昼タイム。間ってきた惣菜・デザートは両手でも数え切れないのに、「今日は○○さんがいないからコーヒーないなあ」とぼやき声。なんと贅沢な。

梅雨明け宣言後の上天気の1日。堂々とした鈴ヶ岳・御池岳、雲のかかった藤原岳、双児峰の三国岳、高室山・鍋尻山・コザトも確認。霊仙山の近江展望台を見上げれば、「あそこは半分くらいだよ」と岩野さん。笹峰で心地好い風に抱かれて小休憩。

家路への高速は超渋滞でクタクタだったのに、思い出すのは楽しかったことばかり。やっぱり山は最高。（大府市　小田妙子）

数年前、新ハイ山行で登った越後駒ヶ岳から見た、怪鳥が羽を広げたような山頂をもつ、峻峰「荒沢岳」が気になっていた。仕事が休みで天気のいい日に登ろうと、地図と山の本を持ち歩いていたが、何年越しかで8月17日に登ることができた。

整備された登山道で「前山」あたりまですんなり歩けた。ブナ・ナラの大木の間にはオミナエシ・アザミ・キキョウが咲き、寂しさを和らげてくれた。やがて絶壁の前嵩ピークが見えてくると、いつもの怖いもの知らずの私の心がワクワクと踊りだし、「鎖と梯子があれば大丈夫」と靴のひもを締め直す。

前嵩を左にトラバースすると、前方は岩から水がしたたる岩壁・絶壁で、ほぼ垂直の鎖場の連続だった。登り切った所に前嵩の標識があってひと安心。

やせた稜線からは、深い谷間に残雪が何本も見え、只見湖には遊覧船が。振り返ると歩いてきた稜線が見えて頂上が近いのを教えてくれた。さらにクサリに導かれた頂上は私ひとり。燧ヶ岳、平ヶ岳の展望が抜群で中の岳が迫ってくる。

地元山岳会の「荒沢岳」の石碑が歓待してくれているように思われ、小屋の弁当は手づくりおにぎりで、ご主人の温かさが感じられ、この聖地でひとりで味わう時間は、何物にも変え難い至福の空間を凝縮したようで、山の神に深々と頭を下げ、下山した。

（神戸市　前田喜久子）

近江八幡市中之庄町、長命寺の東隣芸の里横に天御中主命神社がある。この神は造化三神の元首。高天原に先ず出現、天の最中に座し、神徳遍満、宇宙を主宰したという最初の神である。

この奥の院の岩磐が津田山の山頂にある。木の鳥居の中に周囲を石垣で囲み、岩磐には注連縄が巻かれている。白装束に身を包んだ人達が岩磐の前に供物をし、神酒を石にふりかけて一心不乱に祝文を唱えている姿をよく見かけることがある。

湖東地方のうちで最も琵琶湖に近く、湖辺に連なってそびえる山が長命寺山である。それだけに県内の湖岸からこの山の姿を望むことができる。長命寺山は連山で正しくは奥津島山・奥

島山と呼ばれ、△424・7㍍を最高峰に300㍍級の山が連なっている。

昔は琵琶湖最大の島にそびえる山で、湖上を行き来する人々にとって、この美しい姿の山は湖上に浮かぶ神の住む山・神体山としてあがめられていた。

『長命山霊在岳縁起』によると「霊在岳を取り囲む神島、奥津島は周囲五里全山奇岩怪石を以って点綴され、湖中最大・最高の霊島なり」と記されている。

自宅から近いのでよく登っているが、山頂の「天御中主命」の岩粋を見るたびに、古代原始の山岳信仰が今日まで生き続けている証でもあると思っている。

なお、山頂南の「高天岩」からの眺望は最高だ。守山の伊勢遺跡により邪馬台国近江説が浮上している今、『古事記』が伝える「トヨアシハラミズホノクニ」は、見渡す限り葦原と瑞穂が育つ琵琶湖畔、湖東平野と思っている。皆さんも近江の古代を見直してみてはいかがでしょう。

（近江八幡市　岩野　明）

6月26日、曇りのち小雨、車で行きやすい日影平山・牛首山・湯ヶ峰の三山に行った。

27日、蕎麦角山と本堂山に行った。蕎麦角山ではササユリがきれいだった。

7月3日、高峰山・岩山に小雨のなか行った。岩山は踏跡程度で山頂へは20分ぐらいか。

7月は北海道の山へ。7～9日幌尻岳、11日アポイ岳から吉田岳へ縦走往復、13日カムイ岳、14～15日ペテガリ岳、16日ピセナイ山、17日楽古岳、20～21日カムイエクウチカウシ山、22日十勝幌尻岳、23日剣山が最後だったが、山頂には剣が刺さっていた。北海道の山は沢もあり皆きつい。ペテガリ14時間、カムエクでも15時間歩いた。

27日、例会で伊吹山古道。

31日、野滝山・湯ヶ峰・御殿山に。二つとも続岐阜百山（湯ヶ峰は岐阜百山）

8月1日、日影平山・吐月峰へ。距離があり三山目は行けず。

7～8日、中央アルプスの越百山から仙涯嶺、南駒岳へ縦走。

13日、寺地山～北の俣岳～黒部五郎岳へ。14日は雨で下山。雲の平、鷲羽岳、薬師岳は来年に。

21日、続岐阜百山の水晶山と午前ヶ岳に行った。

23～24日、富士山へ。白山岳の三角点も見たが大きかった。

28日、天狗森山へ。風神神社の祭りで多くの人が来ていた。

29日、秋葉山・鹿遊山・岩山の三山に行く。岐阜百山も残り60を切った。残り58山。

（海津市　山田明男）

1995年から続けてきた自然観察山行を、一区切りつけることといたしました。

定年退職を数年後に控えた頃、山を自然の原点と考えるハイキングを生涯のライフワークとして定着させようと改めて勉強し直しました。第二の人生も悠々自適というわけにはいかず再就職しましたが、土・日曜がほぼ確実に休めるという利点を活かし、一昨年の秋からは市民講座、今年の4月からはNHK文化センターの教室として、各々自然ハイキング講座を開設し、卒業者を核に自然観察トレッキングクラブも立ち上げてきました。

今は、自然に親しむハイキングと自然の癒しを体験するハイキングという二つの目標を立て、山や森での感動を共有することを大切に活動しています。

これらの活動に加え、8月からは視覚障害の人達の山の会の応援を依頼されました。私の職歴からはなかなかお断りすることができず、現在、目の不自由な人達と共感できる自然体験のあり方などを模索中ですが、活動スケジュールは過密な状態となってしまいました。

若干の迷いはありましたが、自分なりに考えていた自然観察山行の役割もそろそろ終わっているものと判断し、休止することといたしました。

新ハイにおける自然観察山行の経験は、私の中で貴重な財産となっています。これまでの皆さんのご協力に深く感謝申し上げる次第です。

（各務原市　鷲見守康）

サービスチェーン
SHC
新ハイキング

どこへ行こうか
新ハイキングクラブ（SHC）
サービスチェーン

サービスチェーンには右のような看板が掲げてあります。

新ハイキングクラブに協力してくださる宿やバス・タクシー会社です。自然を大切にし、ハイカーを仲間として歓迎してくれます。時間と体力と気持ちに余裕を持てば、安全な山行につながります。ぜひご利用ください。

ほとんどのチェーンがホームページをもっていて、新ハイのホームページからたどれば大体の様子を簡単に見ることができます。
ご利用の際はそれぞれの宿のホームページの予約欄か、電話または往復はがきで必ず予約してください。予約のときに、料金を確認してください。

利用するときは、新ハイキングクラブの会員証を持参してください。

岩手山・八幡平・姫神山・七時雨山への登山に最適
日本山岳ガイド協会認定山岳ガイドの気取りのない、気取れないオーナーがおもてなす、アットホームで楽しい宿
ペンション　あるぺじお
〒028-7306
岩手県八幡平市安比高原
電　0195-73-5750
http://arpeggio.appi-resort.com

秋田駒登山基地
岩手の秘湯・名物露天風呂
国見温泉　石塚旅館
〒020-0582
岩手県岩手郡雫石町橋場
国道　090-1933-4734
5月から11月10日まで営業
連絡先　019-692-3355

大雪山黒岳ロープウエイへ徒歩5分
〈2008年グループ割引〉
8名以上で1名無料！（6・8・10月のみ）
5月連休および6月から営業
大雪山層雲峡ユースホステル
〒078-1701
北海道上川郡上川町層雲峡
電　01658-5-3418

東大雪のニペソツ山・石狩岳・ウペペサンケ山の宿泊所。朝・昼用弁当用意します。渓流釣り、新しいお風呂で（SHC会員1000円引、会員証提示）
温泉ペンション　森のふくろう
〒080-1403　北海道河東郡上士幌町字ぬかびら源泉郷南区2
電　01564-4-2013
http://www5.ocn.ne.jp/~mfukuro

ログハウスから眺める花の名山　森吉山・秋田駒ケ岳への最適な宿
マイカー送迎サービス・宿からの縦走パック・高原の手作り料理
森吉山登山口および阿仁前田駅まで送迎無料
田沢湖・十和田湖・白神山地まで車で100分
妖精の森　コテージラウル
1泊2食付き6300円
〒018-4511
秋田県北秋田市森吉森吉高原
電　0186-76-2107
http://www5.et.tiki.ne.jp/~masugi/

岩手山への登山に最適なお宿
三ツ石の登山口、三ツ石のスキー場まで送迎OK
網張温泉まで徒歩の宿（夏冬）も坂下3分
あみはりロッヂ
〒020-0585
岩手県岩手郡雫石町長山字岩手山
電　019-693-2313
http://www.onyx.dti.ne.jp/~amihari

羅臼岳登山、知床連山縦走、知床岬ネイチャーウォッチングボート
知床五湖、カムイワッカに一番近い宿
知床岩尾別ユースホステル
（知床国立公園内）
〒099-4356
北海道斜里郡斜里町字岩尾別
電　0152-24-2311

雨と北の植物や草花が咲き乱れる花畑・種差海岸ウミネコの繁殖、一年三角点峰の階上岳
地場産・旬の食材料理の手作り料理
種差海岸駅（JR八戸線）徒歩30分
民宿　石橋
1泊2食付　6300円から
〒031-0841
青森県八戸市鮫町棚久保14-12
TEL　0178-33-2221
FAX　0178-38-2567

花の百名山・秋田駒ケ岳・乳頭山へ
夏は登山、ハイキング
冬はスキー、雪中かんじき体験
田沢湖高原温泉
駒ケ岳観光ホテル
〒014-1201　秋田県仙北市田沢湖生保内字駒ケ岳2の30
電話　0187-46-2211
http://www.komakan.com

快適なお風呂とおいしい料理のお宿
西吾妻・飯豊の登山口と米沢駅まで送迎致します。（白布・大日杉）
さんそう　もみの木
1泊2食付き　6500円から
〒992-1121
山形県米沢市万世町刈安
（米沢スキー場）
電　0238-28-1051
F　0238-28-2990

山行計画
（11・12月）
新ハイキングクラブ関西

山行計画には、「会員に限る」と特記してあるほかは会員外の方でも参加できます。一人ずつ（夫婦は連名可）往復ハガキに記入例によって必ず山行日の7日前までに到着するよう、申込み先を確認のうえ申し込んでください。電話・FAXでの申し込みはお断りします。

「実費費用」のほかに、本部の「山行運営費」として400円をお支払いください。申し込み後、参加できなくなった場合はすぐ申込み先に連絡してください。体調の悪い方、幼児と飛入りはお断りします。

なお、例会参加者全員に傷害保険が掛けられています。出発点呼の際、係に保険料日額50円と救援対策費日額50円合計100円（我行日帰りの場合は2日になり200円）を支出していただきます。

傷害保険特約内容は次の通りです。（損害保険ジャパンと契約）

・死亡・後遺障害保険	金額	1000万円
・入院保険金	日額	5000円
・通院保険金	日額	3000円

保険の対象は集合から解散時まで。事故があった場合は解散までに係に申し出てください。この保険に該当しないものは次の通りです。①ピッケル・6本爪以上のアイゼン・ザイル・ハンマー・ワカンを持参することを明記した山行 ②スキー使用の山行 ③沢・岩・氷雪登はんを目的とした山行 ④宿泊場所での事故 ⑤病死の場合（詳細は本部まで）

（記入例）
（往復ハガキを使用）

例会申込み書

山行名（正確に記入すること）
期日
住所〒
氏名
会員番号
（会員でない方は会員外と記入）
血液型
電話番号・FAX番号
生年月日
緊急時の連絡先　TEL
（山行中の連絡先を記入）

返信ハガキの宛名欄には、ご自分の住所・氏名に「様」と必ず記入しておいてください。

11月	地域	対象の山	定員	リーダー	チェック
6(土)	奈良	音羽山	6	中	
6(土)～7(日)	紀伊	果無山脈縦走	24	狩野	
7(日)	鈴鹿	御池岳	*	岩野	
7(日)	湖北	大黒山～妙理山	40	村田	
10(水)	京都北山	妙・法の山～深泥池		仲谷	
11(水)	大峰	トサカ尾山	25	西上	
13(土)	朽木	地蔵峠～三国岳	24	狩野	
13(土)	湖北	大黒山		高鳥	
14(日)	京都北山	鎌倉山～峰床山	40	村田	
17(水)	京都北山	比叡山～大原		仲谷	
18(木)	大峰	大川口～鉄山	25	西上	
19(金)	湖東	津田山		村田	
20(土)	朽木	おにゅう峠～駒ヶ岳西尾根	24	狩野	
21(日)	鈴鹿	雨乞岳	*	岩野	
21(日)	但馬	西床尾山～東床尾山	25	村田	
23(祝)	丹波	三郎ヶ岳～北舎峠		仲谷	
23(祝)	大峰	大所山～1335ピーク峰	25	西上	
25(木)	美濃	養老山	22	壽井	
27(土)	鈴鹿	鬼ヶ牙～白粁ヶ岳	6	中	
27(土)	飛騨	船山	10	山田	
28(日)	四国	石鎚山	7	古賀	
28(日)	奥高野	清水峰	25	西上	

＊＝マイカー山行

山行計画の実施と申し込みについて

① 山行例会は、前もって保険を掛け、登山届けを提出しますので、必ず実施日の7日前までに、「往復はがき」で申し込んでください。参加人数によっては事前にバスやタクシーをチャーターする必要があります。また、山ではいかなる事態が発生するかもしれません。緊急時の連絡先、および血液型・生年月日など必ずご記入ください。

② 詳細の山行案内は、実施日の10日前頃に返信します。直前にならないと参加人数がはっきりせず、交通機関への手配等、費用もはっきりしないからです。また、早くから返信すると、コース状況等、何か変更になった場合に再連絡するのが大変だからです。早くから申し込まれた方はそれまでお待ちください。

③ 定員制の計画は先着順に受け付けます。すでに定員に達し、キャンセル待ちの場合はその旨をすぐに返信します。お断りが無い場合は、定員枠に入っているものと判断ください。

④ 山行のグレードは、目安として次の5ランクに決めています。
（初級向き）初心者でも安全に歩けるコース（3～4時間コース）
（一般向き）日頃山歩きしておられる方なら誰でも歩ける標準コース。あまり危険のない山（5時間コース）
（中級向き）かなり経験を要するコース。危険な所はないが、距離がやや長いコース（6～7時間コース）
（やや健脚向き）距離は中級向きだが、危険な所があり、きつい登高・急坂が長く続くコース（6～7時間コース）
（健脚向き）距離が長く、つらい急な登高、危険な岩場、谷の渡渉、やぶ漕ぎの連続など、ハードなコース（7時間以上）

⑤ 雨天中止・決行の判断は、前夜（17時発表）に当地の気象情報を確認し、返信案内の判断基準の降水確率を見て各自で判断ください（係から連絡はしません）。降雨山行が嫌な方は、雨天決行・小雨決行の計画には申し込まれないようにお願いします。

12月	地域	対象の山	定員	リーダー	チェック
3(金)	北摂	竜王山～阿武山		村田	
5(日)	鈴鹿	綿向山～奥草山～政子	*	岩野	
5(日)	奥高野	陣ヶ峰～城本山	25	西上	
5(日)	鈴鹿	烏帽子岳	30	山田	
8(水)	京都北山	船形の山～釈迦谷山		仲谷	
11(出)	播磨	小野アルプス縦走		狩野	
11(出)～12(日)	湖北	太平良山～神明山～黛木山	20	高鳥	
12(日)	湖北	金糞岳～白倉	25	村田	
15(水)	京都西山	保津川船曳き道		金谷	
16(木)	台高	木梶山～加杖坂峠	25	西上	
18(土)	京都西山	愛宕山	10	中	
18(土)	湖北	椿坂峠～河内山	25	村田	
19(日)	奥高野	夏虫山	25	西上	
19(日)	鈴鹿	水無山	*	岩野	
21(火)	南山城	良山～大焼山～万灯籠山		仲谷	
23(祝)	大峰	扇形山	25	西上	
23(祝)	京都北山	花背交流の森	40	村田	
26(日)	生駒	飯盛山～十三峠		村田	

＊各計画の概要は次ページ以降に紹介している。

奈良・音羽山（一般向き）

11月6日(土)　日帰り
集合　JR石山駅7時00分／JR・近鉄桜井駅南口9時00分
行程　石山駅(車)桜井駅(車)下居登山口—音羽山—経ヶ峰—熊ヶ岳—大峰—不動滝—下居温泉(入浴・車)石山駅(解散18時頃)
費用　車代(ワリカン)2万5千＝古市場・紘
地図　倚山
係　◎中　照行
申込　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員6名(禁煙者に限る)
関西百名山。＊申込ハガキに集合駅を明記ください。
雨天中止

週末ハイク115　紀伊　果無山脈縦走（一般向き）

11月6日(土)～7日(日)　1泊2日　貸切バス
集合　〈6日〉JR新大阪駅(1階伊丹空港行きバスのりば付近)7時30分
行程　〈6日〉新大阪駅(バス)広域林道・安堵山登山口—安堵山—和田ノ森—小森登山口—丹生ヤマセミの郷(自炊泊)
〈7日〉ヤマセミの郷(バス)安堵山登山口—黒尾山—冷水山—公門ノ頭—ブナの平—果無峠—果無峠登山口—柳本橋(バス)近鉄大和八木駅(解散19時頃)
費用　約11000円(バス・宿泊代)
地図　2万5千＝恩行司・発心門・伏拝・十津川温泉
5万＝龍神・十津川
係　◎狩野東彦
申込　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員24名
5月に雨天で中断したコースを最初から歩きます。今回はヤマセミの郷で自炊泊(食料持参のこと。炊事道具・食器などは備えてありますが持参利用も可)。雨天決行

鈴鹿を歩く343　御池岳を逍遥（一般向き）

11月7日(日)　日帰り　マイカー
集合　国道306号鞍掛トンネル西口広場8時00分
行程　広場—鈴北岳—元池—夕日のテラス—丸池—ボタンブチ—幸助の池—丸山—池ノ平—真ノ池—鈴北岳—トンネル広場(解散)
費用　交通費各自
地図　昭文社＝「御在所・霊仙・伊吹」
係　◎岩野　明○後藤東幸○一芝義雄
申込　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
広大な御池岳の山頂部の池巡りと紅葉を楽しみながら、のんびり歩きます。雨天中止

湖北・大黒山から妙理山（中級向き）

11月7日(日)　日帰り　貸切バス
集合　JR京都駅八条口7時40分
行程　京都駅(バス)椿坂峠—大黒山—南尾根—鉄塔三角点—南東尾根—水場—妙理山—西尾根—椿坂八幡神社(バス)京都駅(解散18時)
費用　約3000円(バス代)
地図　2万5千＝中河内
係　◎村田智俊
申込　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　村田智俊まで

＊定員40名
ブナ林の大黒山からは、新しく切り開かれた尾根道を南下し、妙理山へと歩く。
雨天中止

ゆっくり歩こう12　送り火の山1　妙・法の山から深泥池（初級向き）

11月10日(水)　日帰り
集合　京都地下鉄松ヶ崎駅10時00分
行程　松ヶ崎駅—善泉寺—松ヶ崎大黒天—法の山(東山)—妙の山(西山)—深泥池—地下鉄北山駅(解散15時20分頃)
費用　交通費各自
地図　昭文社＝「京都北山」
係　◎仲谷礼司○神　伸
申込　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
送り火の山を回って見たいと思います。第1回目は妙・法の山です。ゆっくりペースで歩きます。雨天中止

大峰・トサカ尾山（一般向き）

11月11日(木)　日帰り　貸切バス
集合　近鉄橿原神宮前駅中央口8時05分
行程　橿原神宮前駅(バス)川迫ダム—尾根出合—トサカ尾山—尾根出合—川迫ダム(車)洞川温泉(入浴・バス)橿原神宮前駅(解散17時30分)
費用　約3000円(バス代)
地図　2万5千＝弥山
係　◎西上利和○下部正年
申込　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員25名
川迫川を渡渉して登山口に取り付きます。展望はあまり期待できませんが、危険なルートもなく静かな山歩きが楽しめます。最短コースで上り下りし、帰路には洞川温泉で汗を流します。雨天中止

週末ハイク116　高島トレイル⑲コース　朽木・地蔵峠から三国岳（一般向き）

11月13日(土)　日帰り　貸切バス
集合　JR京都駅八条口7時40分
行程　京都駅(バス)生杉休憩舎—地蔵峠—カベヨシ—岩谷峠—三国岳—茶屋跡—桑原橋(バス)京都駅(解散18時頃)
費用　約3000円(バス代)
地図　昭文社＝「京都北山」2万5千＝古屋・久多
係　◎狩野東彦
申込　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員24名
7月に雨天中止になった高島トレイル終点ポイントを桑野橋まで歩きます。雨天中止

余呉トレイル　湖北・大黒山（一般向き）

11月13日(土)　日帰り
集合　JR木ノ本駅8時40分
行程　木ノ本駅(車)椿坂峠—大黒山—ブナの巨樹—鉄塔巡視路—大黒山—椿坂峠(車)木ノ本駅(解散)
費用　交通費各自
地図　2万5千＝中河内
係　◎高島伸浩
申込　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
大黒山からブナの巨樹を探訪。＊集合はマイカーか電車か？いずれかを明記ください。
雨天決行

京都北山歩き141
鎌倉山から峰床山
（一般向き）

11月14日(日)　日帰り　貸切バス
集合　JR京都駅八条口7時40分
行程　京都駅（バス）坊村―プナ平―鎌倉山―オグロ坂峠―峰床山―俵坂峠―ナメラ谷―寺谷林道―峰定寺（バス）京都駅（解散18時）
費用　約3000円（バス代）
地図　昭文社＝「京都北山」
係　○村田智俊
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　村田智俊まで
＊定員40名
紅葉の始まったブナ林が続く尾根を鎌倉山から峰床山へ縦走し、ナメラ谷をくだる。
（今号特集18ページ参照）
小雨決行

ゆっくり歩こう13
北山トレイル東部1
比叡山から大原（初級向き）

11月17日(水)　日帰り
集合　京阪坂本駅前坂本観光案内所9時30分
行程　観光案内所―坂本ケーブル駅（ケーブル）延暦寺駅―釈迦堂―横高山―水井山―仰木峠―大原バス停（解散15時頃）
費用　交通費各自
地図　京都一周トレイル＝「北山東部」
係　○仲谷礼司○沖　伸
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
比叡山への登りはケーブルを利用して、尾根道をゆっくり歩きます。前回雨で流れた企画。雨天中止

大峰・大川口から鉄山
（やや健脚向き）

11月18日(木)　日帰り　貸切バス
集合　近鉄橿原神宮前駅中央口8時05分
行程　橿原神宮前駅（バス）大川口登山口―ザンゲ平―鉄山―ザンゲ平―大川口登山口（バス）橿原神宮前駅（解散17時）
費用　約3000円（バス代）
地図　2万5千＝弥山
係　○西上利和○下郡正年
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員25名（会員に限る）
晩秋の大峰の山並を心ゆくまで眺めたいというリクエストが多くあり、5月に実施した再山行です。雨天中止

金糞里山ハイキング33
湖東・津田山
（一般向き）

11月19日(金)　日帰り
集合　JR近江八幡駅8時30分
行程　近江八幡駅（バス）長命寺バス停―長命寺本堂―長命寺山―津田山―弊座巨岩―林道出合―伐採展望地―休暇村近江八幡駅（入浴・バス）近江八幡駅（解散16時10分）
費用　交通費各自（入浴700円）
地図　2万5千＝近江八幡・沖島
係　○村田智俊
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　村田智俊まで
琵琶湖を見下ろす巨岩からの展望は抜群。休暇村では温泉に入浴しゆっくりする。
＊今回から本来の金曜に実施します。小雨決行

週末ハイク117
高島トレイル⑧コース
朽木・おにゅう峠から駒ケ岳西尾根
（一般向き）

11月20日(土)　日帰り　貸切バス
集合　JR京都駅八条口7時40分
行程　京都駅（バス）おにゅう峠―根来坂―百里ケ岳―木地山峠―桜谷山―与助谷山―駒ケ岳―駒ケ岳西尾根―木地山バス停（バス）京都駅（解散19時30分頃）
費用　約3000円（バス代）
地図　昭文社＝「京都北山」2万5千＝古屋
係　○狩野東彦
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員24名
6月のコースと同じですが、ブナの黄葉シーズンに歩きます。雨天中止

鈴鹿を歩く344
雨乞岳
（中級向き）

11月21日(日)　日帰り　マイカー
集合　藤切谷田林道入口広場8時10分
行程　広場―桜地蔵―奥ノ畑谷―奥ノ畑峠―南雨乞岳―雨乞岳―西雨乞岳―炭焼コバ―向山鉱山跡―シデノ大木―広場（解散）
費用　交通費各自
地図　昭文社＝「御在所・霊仙・伊吹」
係　○岩野　明○後藤康幸○一芝義雄
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
秘境の奥ノ畑谷から清水の頭の尾根に登って雨乞岳。西尾根を向山鉱山跡へくだります。秋たけなわの紅葉の雨乞岳登山です。雨天中止

但馬
西床尾山から東床尾山
（中級向き）

11月21日(日)　日帰り　貸切バス
集合　JR新大阪駅正面口7時40分
行程　新大阪駅（バス）糸井川不動滝―西床尾登山口―羅漢谷―西床尾山―東床尾山―糸井の大カツラ（バス）よふど温泉「極楽湯」（入浴・バス）新大阪駅（解散19時頃）
費用　約3500円（バス代）
＊入浴代別途
地図　2万5千＝直見・出石
係　○村田智俊
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　村田智俊まで
＊定員25名
西床尾山から縦走し、近畿百名山の東床尾山へ登る。羅漢谷は滑りやすいので登高につかう。雨天中止

火曜ハイク75
丹波・三郎ケ岳から北舎峠
（一般向き）

11月23日(火)　日帰り
集合　JR八木駅8時20分
行程　八木駅（バス）旭バス停―松尾神社―北尾根―三郎ヶ岳―南尾根―北舎峠―出雲神宮前バス停（バス）亀岡駅（解散16時10分頃）
費用　交通費各自
地図　2万5千＝亀岡
係　○仲谷礼司○沖　伸
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
三郎ヶ岳を縦走の形で歩きますが、道は一部荒れています。前回雨で流れた企画。雨天中止

大峰
大所山から1335㍍峰
（中級向き）

11月23日(祝)　日帰り　貸切バス
集合　近鉄橿原神宮前駅中央口8時05分
行程　橿原神宮前駅（バス）林道終点登山口―岩清水―尾根出合―大所山―1284㍍峰―135㍍峰―女郎ヶ岩―琵琶の滝遊歩道出合―林道終点登山口（バス）橿原神宮前駅（解散17時30分）
費用　約3000円（バス代）
地図　2万5千＝洞川
係　◎西上利和○下郡正年
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員25名（会員に限る）

尾根取付までの登りは少し厳しいですが、山頂からの縦走路は広々した自然豊かな尾根歩きです。1335㍍の頂を踏んで往復し、スリリングな岩場と急坂の続く支尾根をくだります。小雨決行

平日ふれあいハイク76
美濃・養老山
（一般向き）

11月25日(木)　日帰り　貸切バス
集合　JR京都駅八条口7時40分
行程　京都駅（バス）養老の滝上駐車場―もみじ峠―笹原峠―小倉山―養老山―三方山―養老の滝上駐車場（バス）京都駅（解散18時）
費用　約3000円（バス代）
地図　2万5千＝養老
係　◎寺井恒夫
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員22名

年間1万人の登山者がある人気の山です。紅葉した養老の滝を見て帰ります。雨天中止

鈴鹿・鬼ヶ牙・白杵ヶ岳
（一般向き）

11月27日(土)　日帰り
集合　JR石山駅7時00分
行程　石山駅（車）石水渓―鬼ヶ牙―舟石―白杵ヶ岳―石水渓（車）温泉（入浴・車）石山駅（解散17時頃）
費用　車代（ワリカン）
地図　2万5千＝伊船・土山
係　◎中　照行
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員6名（禁煙者に限る）

鈴鹿南部の岩峰歩きと展望を楽しむ。雨天中止

展望の山74
飛騨・船山
（一般向き）

11月27日(土)　日帰り
集合　JR西岐阜駅8時15分
行程　西岐阜駅（車）アルピコアスキー場―船山―（往路）―スキー場（車）西岐阜駅（解散）
費用　交通費各自（車代約3000円）
地図　2万5千＝三日町
係　◎山田明男
申込　〒503―0535　海津市南濃町松山624の19　山田明男まで
＊定員10名

「岐阜百山」の山。位山三山の最後です。時間が余れば隣の「続岐阜百山」にも登りましょう。雨天中止

四国・石鎚山
（健脚向き）

11月27日(土)～28日(日)　1泊2日
集合　（27日）JR大阪駅前8時00分／JR三ノ宮駅前8時50分
行程　（27日）大阪駅／三ノ宮駅（高速バス）西条駅（バス・ロープウェイ）成就（泊）（28日）成就―前社ヶ森―夜明峠―石鎚山―（往路）―成就（ロープウェイ・バス）西条駅（高速バス）三ノ宮駅／大阪駅（解散21時30分）
費用　約23000円（バス・ロープウェイ・宿泊代等）
地図　2万5千＝石鎚山
係　◎古賀慶二
申込　〒675―0112　加古川市平岡町山之上684―33　17A403　古賀慶二まで
＊定員約7名
＊10月末まで

初冬の石鎚山。四季折々の表情を見せる新雪の天狗岳は格別で、冬山です。＊定員に満たない場合は中止する場合があります。雨天中止

奥高野・清水峰
（中級向き）

11月28日(日)　日帰り　貸切バス
集合　近鉄橿原神宮前駅中央口8時05分
行程　橿原神宮前駅（バス）奈良教育大演習林登山口―十坪平―九号鉄塔―清水峰―平田平―七号鉄塔―十坪平―奈良教育大演習林登山口（バス）橿原神宮前駅（解散18時）
費用　約3500円（バス代）
地図　2万5千＝上垣内
係　◎西上利和○下郡正年
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員25名

登りは整備された尾根ルートから山頂を目指します。下りはトチノキ・ミズナラの巨木が点在する沢筋ルートで、晩秋の景観を楽しみながらゆっくりくだります。小雨決行

金曜里山ハイキング34
北摂・竜王山から阿武山
（一般向き）

12月3日(金)　日帰り
集合　阪急茨木市駅8時40分
行程　茨木市駅（バス・JR茨木駅経由）忍頂寺―竜王山―穴仏―岩屋―車作―竜仙峡―竜仙の滝―武士自然歩道―阿武山口―阿武山―桑原橋（バス）茨木市駅（解散16時頃）
費用　交通費各自
地図　昭文社＝「北摂・京都西山」
係　◎村田智俊
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　村田智俊まで

初冬の里山を感じる北摂の自然歩道をのんびりと歩き、竜王山から阿武山へたどる。小雨決行

鈴鹿を歩く345
綿向山・奥草山・政子
（中級向き）

12月5日(日)　日帰り　マイカー
集合　国道477号蔵王ダム広場8時00分
行程　広場（車）平子峠（置車）西明寺林道―奥ノ平―綿向山―ブナの木平―奥草山―政子―平子峠（解散）
費用　交通費各自
地図　昭文社＝「御在所・霊仙・伊吹」
係　◎岩野　明○後藤康幸○一芝義雄
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

綿向山から南の野洲川ダムへと続く長大な秘境尾根を歩く。雨天中止

奥高野・陣ケ峰から城本山
（一般向き）

12月5日(日)　日帰り　貸切バス
集合　近鉄橿原神宮前駅中央口8時05分
行程　橿原神宮前駅（バス）コンビラ峠登山口―陣ケ峰―天狗木峠（古道入口）鐘割辻―城本山―砂グラリ峠―紀和トンネル（バス）西吉野温泉「きすみ館」浴（バス）橿原神宮前駅（解散17時30分）
費用　約3000円（バス代）
地図　2万5千＝狼谷貯水池
係　◎西上利和○下部正年
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員25名

一等三角点の陣ケ峰と弘法大師が高野山開山にゆかりのある古道（高野山発見の道と表示あり）を訪れます。下山後は西吉野温泉「きすみ館」で汗を流します。小雨決行

展望の山75（忘年山行）
鈴鹿・鳥帽子岳（一般向き）

12月5日(日)　日帰り
集合　JR関ケ原駅8時00分／三岐野尻駅8時00分
行程　各集合駅（車）上石津町縄野登山口―新道―鳥帽子岳―（往路）―細野（車）藤原町山口「故近藤郁夫氏ログハウス」（忘年会・解散）
費用　交通費各自（車代参加費共約2000円）
地図　2万5千＝篠立
係　◎山田明男
申込　〒503―0535　海津市南濃町松山624の19　山田明男まで
＊定員30名（今年度の山田例会参加者優先）

「続岐阜百山」の山。2年前に出来た新道経由で往復します。＊マイカー参加者は禁酒。飲む人は電車で集合ください。雨天決行（コース変更あり）

ゆっくり歩こう14
送り火の山2
船形の山から釈迦谷山
（初級向き）

12月8日(水)　日帰り
集合　市バス停神光院前（西賀茂車庫前の一つ手前）10時00分
行程　神光院前バス停―西方寺―登山口―船形火床（給山）―秋葉山―釈迦谷山―金閣寺（解散15時40分頃）
費用　交通費各自
地図　昭文社＝「京都北山」
係　◎仲谷礼司○沖　仲
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

送り火の山の2回目は船形です。釈迦谷山は少しやぶ漕ぎがあります。ゆっくりペースで歩きます。雨天中止

週末ハイク118
播磨・小野アルプス縦走
（一般向き）

12月11日(土)　日帰り
集合　JR小野町駅9時40分
行程　小野町駅―岩倉峠―紅山―惣山（小野富士）―アンテナ山―絵山―筋畑峠（アザメ峠）―安場山―愛宕山―前山―高山―白雲谷温泉「ゆぴか」（入浴）―市場駅（解散17時頃）
費用　交通費各自、入浴代要
地図　2万5千＝社・三木
係　◎狩野東彦
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

多数欠席のあった3月とは逆コースを歩き、下山後には入浴し、加古川駅前にて有志による忘年会あり。雨天中止

余呉トレイル（宿泊忘年山行）
湖北
太平良山・神明山・堂木山
（初級向き）

12月11日(土)～12日(日)朝
1泊2日
集合　（11日）JR近江塩津駅9時40分
行程　近江塩津駅―祝山―太平良山―極現峠―神明山―堂木山―余呉町役場（送迎バス・余呉駅経由）余呉湖荘（忘年会・泊・翌朝解散）
費用　交通費各自（宿泊忘年会参加費11000円）
地図　2万5千＝木之本
係　◎高島伸浩
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員20名

余呉湖畔の低山を巡り、国民宿舎「余呉湖荘」にて宿泊忘年会をします。＊忘年会不参加で日帰り山行のみ希望の方は、「日帰り希望」と明記ください。雨天決行

湖北・金糞岳から白倉
（健脚向き）

12月12日(日)　日帰り　貸切バス
集合　JR京都駅八条口7時40分
行程　京都駅（バス）鳥越林道小朝の頭登山口―連状の頭―小朝の頭―大朝の頭―金糞岳―白倉峠―白倉―花房尾根―奥山―高山キャンプ場（バス）京都駅（解散18時頃）
費用　約3000円（バス代）
地図　2万5千＝近江川合
係　◎村田智俊
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　村田智俊まで
＊定員25名

冬枯れの尾根からの展望は良い。多少の積雪があれば最高で、樹氷も見られる。雨天中止（暫決行）

忘年山行
（続）北山ちょっと歩き
京都西山
保津川舟曳き道（一般向き）

12月15日(水)　日帰り
集合　JR保津峡駅9時30分
行程　保津峡駅―トロッコ保津峡駅―保津川舟曳き道―嵐山渡月橋（解散15時00分頃・忘年会）
費用　交通費各自
地図　昭文社＝「京都西山」
係　◎金谷　昭○磯部　純　○谷　守
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

旧山陰線保津峡駅（トロッコ保津川駅）から保津川下りの舟曳き道をたどって嵐山にくだります。解散後、有志で嵐山渡月橋公園にて忘年会（参加費無料、各自食材持参、近くにコンビニあり）。保津川の水量が多い場合はコース変更あり。雨天中止

台高・木梶山から加杖坂峠
（中級向き）

12月16日(木)　日帰り　貸切バス
集合　近鉄橿原神宮前駅中央口8時05分
行程　橿原神宮前駅（バス）木梶林道―展望休憩所―登山口―木梶山―梅尾―岳山―加杖坂峠（バス）橿原神宮前駅（解散17時）
費用　約3000円（バス代）
地図　2万5千＝大豆生
係　◎西上利和○下部正年
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員25名

初冬の台高の景観を楽しみながら、木梶山から東に派生する尾根を縦走します。終盤は岩場のヤセ尾根をくだります。小雨決行

京都西山・愛宕山（一般向き）

12月18日(土)　日帰り
集合　JR京都駅前京都バスのりば8時00分
行程　京都駅（バス）清滝―表参道―愛宕山―月輪寺―清滝（バス）京都駅（解散16時頃）
費用　交通費各自
地図　2万5千＝京都西北部・亀岡
係　◎中　照行
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員10名（禁煙者に限る）

関西百名山で火遁要慎のお礼の山。雨天中止

湖北・椿坂峠から河内山（中級向き）

12月18日(土)　日帰り　貸切バス
集合　JR京都駅八条口7時40分
行程　京都駅（バス）椿坂峠―中央分水嶺県境尾根―長野尾峠―河内山―池河内湿原（バス）京都駅（解散18時頃）
費用　約3000円（バス代）
地図　2万5千＝中河内
係　◎村田智俊
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　村田智俊まで
＊定員25名

椿坂峠から余呉トレイルを北上し、河内山から池河内湿原にくだる。
雨天中止（雪決行）

奥高野・夏虫山（一般向き）

12月19日(日)　日帰り　貸切バス
集合　近鉄橿原神宮前駅中央口8時05分
行程　橿原神宮前駅（バス）大股登山口―桧峠―夏虫山―音小屋―大股登山口（バス）橿原神宮前駅（解散18時）
費用　約3000円（バス代）
地図　2万5千＝上垣内
係　◎西上利和○下郡正年
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊定員25名

三等三角点の山であるが展望は無い。この季節なら夏虫もないと思うが、天気が良ければ山頂の裾から伯母子岳の稜線が望めます。小雨決行

鈴鹿を歩く346（忘年山行）水無山（一般向き）

12月19日(日)　日帰り　マイカー
集合　国道477号蔵王ダム広場8時00分
行程　広場（車）専用ロッジ（車）林道終点―水無山―（往路）―専用ロッジ（忘年会・解散）
費用　交通費各自
地図　昭文社＝「御在所・霊仙・伊吹」
係　◎岩野　明○後藤康幸○一芝義雄
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

水無山に登った後、専用ロッジで狂食忘年会を開きます。料理は各自持参（マイカーの方は禁酒）。雨天中止

火曜ハイク76　南山城　艮山・大焼山・万灯籠山（一般向き）

12月21日(火)　日帰り
集合　郷ノ口バス停9時15分（京阪・JR宇治駅、近鉄新田辺駅から京阪宇治バスに乗車）
行程　郷ノ口バス停―農道終点―手平峠―艮山―大焼山―万灯籠山―JR山城多賀駅（解散16時10分頃）
費用　交通費各自
地図　2万5千＝田辺

係　◎仲谷礼司○沖　伸
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

裏山から入りますので少々のやぶ漕ぎをしながら艮山から大焼山へ廻ります。少しロングコースです。前回雨で流れた企画。雨天中止

忘年山行　大峰・扇形山（一般向き）

12月23日(祝)　日帰り　貸切バス
集合　近鉄橿原神宮前駅中央口8時05分
行程　橿原神宮前駅（バス）川戸―片透―カヤ小屋跡―第一鉄塔―扇形山―小南峠（バス）洞川温泉浴（バス）橿原神宮前駅（解散15時30分）
費用　約3000円（バス代）
地図　2万5千＝中戸
係　◎西上利和○下郡正年
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

本年最後の山行もやはり大峰の山で締め括ります。下山後は洞川温泉で汗を流し、大和高田駅前で忘年会。参加希望者は「忘年会参加」と明記ください（会費約3600円）。小雨決行

忘年山行　京都北山歩き142　花背交流の森（初級向き）

12月23日(祝)　日帰り　貸切バス
集合　JR京都駅八条口8時00分
行程　京都駅（バス）峰定寺―花背の三本杉―こもれびの森展望台―緑風の森―天神の森―ちしよろ谷―交流センター
エリア「翠峰荘」（入浴・忘年会・バス）京都駅（解散18時30分）
費用　約8000円（バス・忘年会費等）
地図　昭文社＝「京都北山」
係　◎村田智俊
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　村田智俊まで
＊定員40名

花背の三本杉から初冬の交流の森を散策し、センターエリアの鍋料理で忘年会をします。雨天決行

年末にロングコースを歩く　生駒・飯盛山から十三峠（中級向き）

12月26日(日)　日帰り
集合　JR四条畷駅8時00分
行程　四条畷駅―四条畷神社―飯盛山―室池―生駒山上―暗峠―大原山―鳴川峠―十三峠―近鉄平群駅（解散17時）
費用　交通費各自
地図　2万5千＝生駒山
係　◎村田智俊
申込　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　村田智俊まで

飯盛山から生駒山縦走の峠を越えて十三峠まで歩く。雨天中止

山行報告
（7・8月号）
新ハイキングクラブ関西

高島トレイル⑱コース
朽木・地蔵峠から三国岳
（週末ハイク109）

7月3日(土) ○狩野東彦
＊雨天のため中止しました。

安曇50名山④
鳥帽子・高峰

7月3日(土) くもり
（集合）JR姫路駅9・15～25（バス）道の駅（バス）登山口11・15—大岩12・00—高峰12・40—登山口13・45（バス）一宮温泉14・00（入浴）15・30（バス）姫路駅17・30（解散）

雨の予想でコースを短縮して往復したが、登山中は雨が降らずに推移し、拍子抜けの1日だった。
（参加者）三輪直文　松上美代子　岩城豊子　中島　隆　光川二美子　十鳥　喬　今津省司　君塚徳子　木村紹恵　朝倉松雄　小林優子　若林文夫　兼田幸子　須藤浩子
○大和　紘
○須磨岡　輯（計16名）

湖南アルプス・笹間ヶ岳
（金糞峠山ハイキング29）

7月3日(土) ○村田智俊
＊雨天のため中止しました。

飛騨・池ノ尾山（展望の山70）

7月4日(日) ○山田明男
＊雨天のため中止しました。

元越谷（沢歩き）
（鈴鹿を歩く336）

7月4日(日) ○岩野　明
＊雨天のため中止しました。

大峰・弥山から八経ヶ岳

7月4日(日) くもり時々晴れ
（集合）近鉄橿原神宮前駅8・05～15（バス）トンネル東口10・00—一のタワ分岐11・15—弁天の森12・10—弥山小屋13・35（昼食・八経ヶ岳往復）14・50—弁天の森15・50—トンネル西口分岐16・15—トンネル西口17・00—トンネル東口17・20（バス）橿原神宮前駅19・20（解散）

終始曇り空で展望には恵まれなかったが、稜線は意外と涼しく快適に歩けた。開花にはすこし早いかなと思いながらもお目当てのオオヤマレンゲに会えて感激した。
（参加者）渡部和美　兼子衣代　川戸せつ　辻中　貢　田中　操　小石徳子　三野　旭　岩澤裕子　森井　潔　大森康行　村岡雄志郎　山野　啓　○今泉　勲
○西上利和（計14名）

東山トレイル3
ケーブル比叡から銀閣寺
（ゆっくり歩こう7）

7月7日(水) くもりのち雨
（集合）叡電八瀬比叡山口駅9・25—ケーブル八瀬駅9・50（ケーブル）ケーブル比叡駅10・00—水飲対陣跡11・10—石烏居11・35（昼食）12・30—天子山12・40—天子分岐13・05—瓜生山13・55～14・05—大山祇神社14・45—北白川仕伏バス停14・50（解散）

梅雨の合間の山行だったが蒸し暑さもなく、天子山や北白川城の出城などに寄り道をしてトレイル道を楽しんだ。瓜生山からの下りで突然雨に遭う。
（参加者）中山　賢　林　義朗　浅野　剛　夏山春子　柴田慶一郎　藤村勝彦　浄　紀子　大野宣子　巻田　晃　林　信男　森嶋靖子　横井秀子　水見周二　水見真砂子　八木爽子　松井明忠　守田光太郎　堀家洋子　加藤浩二　兼田幸子　谷沢芳江　小林博子　小林　桂　中岡昌子　○川上久堅
○仲谷礼司（計26名）

台高・伊勢辻山から地蔵谷

7月8日(水) ○西上利和
＊バス定員未満で中止しました。

高島トレイル⑦コース
朽木・横谷峠から駒ヶ岳西尾根
（週末ハイク110）

7月10日(土) くもりのち晴れ
（集合）JR京都駅7・40（バス）横谷峠9・35～45—P693付近10・25～30—池原山分岐10・55～11・05—ブナ原生林の池11・25（昼食）12・20—駒ヶ岳南尾根12・35—駒ヶ岳13・05～20—駒ヶ岳西尾根13・40—木地山バス停14・45～55（バス）朽木温泉「てんくうの湯」15・25（入浴）16・35（バス）京都駅18・15（解散）

梅雨の晴れ間だったが蒸し暑さはそれほどでもなく、ブナの緑陰を快適に歩いた。曇りがちのため展望は今ひとつ。下山後、てんくう温泉で汗を流した。
（参加者）青木一雄　西谷眞実子　三輪直文　岩村春子　松原眞由美　沖　伸　竹内正子　久保田玲子　高橋義治　里見綽生　木村　豊　大嶋　勉　岩鶴健司　呉比裕美　岩佐　修　和田純子　小川宮士雄　山根弘美　朝倉松雄　船本裕巳子　井上浩子　岡崎知子　細津謙治
○仲谷礼司　○狩野東彦（計25名）

敦賀の山
西方ヶ岳・蟻螺岳

7月10日(土) 晴れ
（集合）JR敦賀駅9・00（車）浦底登山口10・10—水島展望所10・45—長命水11・20—一枚岩12・00—蟻螺岳12・15（昼食）13・25—かもしか台13・55—西方ヶ岳14・40—オーム岩15・15—銀命水15・40—奥ノ院展望所16・15—常宮登山口16・40（解散）

梅雨最中の好天に恵まれ、敦賀半島の背骨を縦走。北陸のハワイ「水島」はさながらマリンブルーの首飾り。一枚岩、かもしか台、オーム岩、奥ノ院展望所などの巨岩から雄大な敦賀湾を眺めた。
（参加者）今村克英　佐々木輝子　鈴木恒男　堀田輝子　中澤美香子　堀江房経　木下朝子　中澤典司博　大和　紘　渋谷義光　加藤國計　賀堂猥路　谷　守　岩本彩子　神野孝允　磯部　純　冥岡克子　石原君子　大総慶一　川島勝美
○高島伸治（計21名）

湖北・権現谷から河内山

7月11日(日) ○村田智俊
＊雨天のため中止しました。

奥越・吉野ヶ岳と取立山

7月11日(日)～12日(月) 1泊2日
○森脇貞義
＊バス定員未満で中止しました。

台高
江馬小屋谷から野江股の頭

7月15日(水) ○西上利和
＊雨天のため中止しました。

丹後・由良ヶ岳と依遅ヶ尾山

7月17日(土)～18日(日) 1泊2日
○中　照行
＊リーダーの都合で中止しました。

上信越・雨飾山

7月17日(土)～19日(祝) 2泊3日
（17日　晴れ）（集合）JR京都駅7・40～45（バス）小谷温泉「山田旅館」16・00（泊）
（18日　晴れ）旅館6・00（バス）キャンプ場登山口6・20～40—尾根広場7・05（朝食）7・30—ブナ平8・00—荒菅沢8・40～9・00—笹平10・30～11・00—雨飾山11・30（昼食）12・30—雨飾山荘分岐12・50～13・00—中ノ池13・30～40—アルミハシゴ上広場14・15～30—難所ノゾキ15・20—梶山新湯「雨飾山荘」15・50（泊）
（19日　晴れ）山荘9・00（バス）京都駅16・45（解散）

17日から全国的に梅雨明け宣言。山行当日は晴天の酷暑に見舞われた。水分不足でバテる人もいるほどに急斜面の上り下りは厳しかった。山頂はガスで大展望には恵まれなかった。山行前後は宿の秘湯をゆっくり楽しんだ。
（参加者）小林　修　武部美美子　川田洋子　山本幸子　多田　徳　朝倉松雄　岩鶴健司　上嶋秀夫　呉比裕美　内田康夫　小栗大直　竹内正子　荻野暢子　西田俊治　吉野桑子　田辺弘子　小林　桂　入江　勲　西村恵美子
○安倉正勝　○村田智俊（計21名）

権現谷林道から白谷林道
（鈴鹿を歩く337）

7月18日(日) 晴れ
（集合）河内線尾穴手前寺院広場8・10（車）山女原8・20—奥ノ権現9・00—白谷出合9・45—横ヘアピン上11・55（昼食）13・00—尾根13・40—林道終点14・45—笹峠15・15—今畑16・10—山女原16・40（解散）

山女原から西南尾根下の白谷林道終点まで、花々を求めて約5時間30分の真夏の林道歩きは厳しい。しかし、権現谷のキンバイソウ・オオハンゲ・コオニユリ、白

谷林道の巨大なタイミンガサなどを確認。以前記録された約50種に近い花々の約2分の1が消え、新にホウズキ・オニルリソウ等が増えていた。

（参加者）岩本彩子　磯部　純　水戸鉄治　稲津謙治　吉岡うた子　小田妙子　大西精郎　奥野太一郎　木下朝子　○後藤康夢　○山田登三　◎岩野　明（計12名）

大峰

釈迦ケ岳から不動小屋山

7月22日(木)　晴れ

（集合）近鉄橿原神宮前駅8・05～10（バス）峠の登山口10・30―古田の森―千丈平12・30（昼食）13・00―釈迦ケ岳13・30―千丈平―古田の森14・30―不動小屋山15・40―旭登山口16・45（バス）橿原神宮前駅19・00（解散）

ようやく梅雨も明けて好天気の山行日和となった。稜線から見える山並を心ゆくまで楽しみながらノンビリと歩き、千丈平で昼食をとり、山頂直下の水場にザックをデポして空身で山頂を目指した。下りの不動小屋ルートのやぶもたいしてひどくなく、順調に通過できた。

（参加者）今泉　勲　川俣　勲　渡部和美　前川和佳子　別所　癸　三野　旭　松村雅子　竹村英樹　岩佐　修　佐藤優美子　狩野東彦　小栗大直　鮫田二郎　岡本正明　中江南海雄　岩澤裕子　梶原泰彦　森藤哲良　志水明美　木内範文　河村順子　○竹田勝英　山野　啓　○西上利和（計25名）　○下部正年

三頭山から地蔵山

（京都北山歩き139）

7月25日(日)　晴れ

（集合）JR八木駅8・20～24（バス）越畑9・10～20―芦見峠9・50～10・00―三頭山10・40～50―（往路）―芦見峠11・20―横林広場12・05（昼食）12・40―地蔵山13・30～40―愛宕裏参道出合14・10～20―神明峠15・10―芦視路分岐15・45～16・05―愛宕谷林道16・30―不動滝16・50―保津17・20―亀岡駅17・30（解散）

三等三角点の三頭山へ往復後、芦見峠から一等の地蔵山へ登った。風もなく大変な暑さで汗まみれで歩いた。水分補給で何度も休憩しながらアップダウンを繰り返し、最後は緑陰の愛宕谷林道を亀岡へくだった。真夏のロングコースとなり、疲れ切って亀岡駅に着いた。本日の北山歩きはまるで耐暑訓練となった。

（参加者）島田　廣　山崎みよ子　森井　潔　西島芳洋　中嶋日出男　矢野　稔　岡崎知子　堀内預智　林　義朗　平塚明美　岩城豊子　多賀久子　青木一雄　吉岡うた子　森　和久　若林文夫　久馬麻登珂　妹尾一正　池田繁子　中川光郎　○岡本正明　◎村田智俊（計22名）

八淵の滝

（比良を歩く84）

7月25日(日)　晴れ

（集合）JR近江高島駅9・03（バス）ガリバー旅行村9・30～50―大摺鉢10・23～30―貴船ノ滝10・55～11・05―七淵返しの滝入口11・20―オガサカ道分岐11・47（昼食）12・30―カラ岳13・30～40―シャカ岳13・54～14・03―雄松山荘道分岐15・00～10―南小松16・05―八幡神社16・25～43―近江舞子駅16・55（解散）

涼風の滝めぐりは快適だったが、直登ルートのカラ岳への登りでは大汗をかいた。

（参加者）大川直澄　橋本加代子　鈴木恒男　岩本健二　岩本彩子　沖　伸　大和　紘　市井ユリエ　上田裕子　○田辺弘子　上田裕子　○田辺弘子　◎桑　康夫（計11名）

湖北・伊吹山古道歩き

（平日お花見山行⑤）

7月27日(火)　晴れ

（集合）JR関ケ原駅8・30（車）伊吹ドライブウェイ七合目9・00～10―周遊道11・00―山頂駐車場11・30（昼食）12・05―伊吹山頂12・45―古道分岐13・15―七合目14・40（車）関ケ原駅15・15（解散）

6月に見た花は終わりになっていた。山頂部はメタカラコウが咲き、シモツケソウは今いち。花が遅れていたが、イブキジャコウソウは群落で咲いていた。イブキフウロもはっきりとわかり、8月にはサラシナショウマが多く見られるだろう。

（参加者）多田　徳　松上美代子　金森節子　竹田勝英　宮路ちへ子

有吉桂三　渡部和美　小林一世　◎山田明男（計9名）

若狭の山

久須夜ケ岳

8月1日(日)　晴れ

（集合）小浜市役所9・00（車）久須夜ケ岳頂上駐車場9・30―一等三角点9・45蘇洞門へ下山開始9・55―泊乗越10・25―蘇洞門11・30―広場11・50（昼食）12・40―泊乗越14・05～30―久須夜ケ岳15・05（解散）

一等三角点を見学後、蘇洞門へ先に下山するという登山形態。全国最大規模のオオキツネノカミソリの大群生が最盛期で見事。天下の奇勝「蘇洞門」を堪能の後、涼しい所で昼食。昼食のあとの登りはきつかった。

（参加者）多田　徳　松上美代子　堀江房磨　高杉　博　川島勝美　岩本彩子　木下朝子　神野孝九　谷　守　池田繁美　光川二美子　大能慶一　◎高島伸浩（計13名）

飛騨・三方岩岳から野谷荘司山

（自然観察山行280）

8月7日(土)　◎鷲見守康

＊バス定員未満で中止しました。

宍粟50名山⑤

奥播磨・一山

8月7日(土)　晴れ

（集合）JR姫路駅9・15～20（バス）道の駅「はりま一宮」（バス）阿含利登山口11・20―谷渡り11・42―作業道終点12・08―一山12・50（昼食）13・35―大松分岐14・03―馬見塚三角点14・25―高野峠14・50（車）まほろば温泉15・10（入浴）15・50（バス）姫路駅17・25（解散）

道の駅で弁当を受け取り、予定通り登山口へ。風の通らない急登のススキの原は残暑厳しかったが、頑張れば展望の山頂が歓迎してくれた。夏季にしてはスッキリとした眺望を楽しみながら昼食。下りはナラ林のなかをゆったり気分で高野峠へくだった。

（参加者）小田潤子　西谷眞実子　柳川常雄　上住忠雄　松上美代子　十島　喬　菱子衣代　船本裕巳子　今津省司　岩城豊子　平井満千枝　中島　隆　君塚郁子　朝倉松雄　木村紺恵　金谷　昭　小林優子　篠田幸子　川島勝美　青木一雄　小松志信　○大和　紘　◎須磨岡　輯（計23名）

比良・釣瓶岳

8月8日(日)　晴れ

（集合）JR京都駅7・40（バス）朽木柳生9・00～10―P449.1―9・40～50―地蔵峠分岐10・10―簔峠分岐10・55～11・00―イクワタ峠手前展望広場11・20（昼食）12・00―イクワタ峠12・10―釣瓶岳13・00～15―ナガオ―アカサカ道出合14・20―大摺鉢15・20～30―ガリバー旅行村15・50～16・15（バス）北小松駅17・00（解散）

下界は35℃の猛暑だが、山中は25℃の別天地。比良北稜に着けば琵琶湖から冷風が吹き上がり、快適に歩けた。湖北方面の展望もよく伊吹山がかすんで見えた。ガリバー旅行村には予定通り下山できたが、帰路の国道が大渋滞したので北小松駅で解散した。

（参加者）木村紺恵　武部美美子　金森節子　後藤純子　山崎みよ子　小池一郎　萩野暢子　佐々木輝子　林　義朗　大嶋　勉　横本加代子　山野　啓　相澤浩美　吉岡うた子　川島勝美　宮崎靖久　宮崎由美子　岩本彩子　上嶌秀夫　石倉真佐子　吉村富式　久保田玲子　○安倉正勝　◎村田智俊（計24名）

大峰・高塚山

8月8日(日)　くもりのち晴れ

（集合）近鉄橿原神宮前駅8・05～10（バス）トンネル東口10・00―一のタワ11・06―尾根分岐―P1418.1峠分岐12・00―高塚山12・25（昼食）13・00―P1194.1峠―西原泉谷林道15・00（バス）橿原神宮前駅16・45（解散）

前回の弥山では奥駈道出合まで快適に登れたが、今回は蒸し暑くて厳しい登りになった。高塚山に向かう尾根に入り、ようやく谷から涼風が吹き、ひと息つくことができた。帰路の下山ルートを間違えたので、尾根から林道までゲキ下りになった。

（参加者）多賀久子　渡部和美　岩鶴健司　狩野東彦　松原眞由美　小栗大直　鮫田二郎　三野　旭

辻中　貢　志水明美　中川善弘
川村信子　濱川佳秀　名加恵美子
植田義夫　丸山敏之　他田繁子
○下郡正年　◎西上利和（計19名）

大峰・頂仙岳から熊渡

8月12日(木)　◎西上利和
＊雨天のため中止しました。

尾瀬会津

至仏山・燧（ひうち）・会津駒ヶ岳

8月13日(金)～17日(火)朝
前夜発4泊4日（東中2泊）
（13日）（集合）JR京都駅21・00（バス）
（14日　小雨のちくもり）（バス）
鬼待峠6・40（朝食）7・35―ベンチ9・30―小至仏山10・20―至仏山11・00（昼食）11・40―（往路）―鬼待峠13・55～14・15―山ノ鼻15・05―牛首16・00～15―見晴「弥四郎小屋」16・50（泊）
（15日　晴れ）小屋7・00―見晴新道入口7・30―柴安嵓（ばんがん）（昼食）11・05（昼食）12・00―鼠嵓12・25～40―熊沢田代13・45～14・00―広沢田代14・50～15・10―御池「御池ロッジ」16・00（泊）
（16日　晴れ）ロッジ7・00（バス）
湯沢林道登山口7・30―水場9・20～40―駒ノ小屋11・10―会津駒ヶ岳11・30～40―駒ノ小屋12・00（昼食）12・40―（往路）―湯沢林道登山口15・30（バス）駒ノ湯15・40（入浴）17・00（バス）そば店「まる家」17・05（打ち上げ夕食）18・00（バス）
（17日）（バス）京都駅4・40（解散）
百名山三つに登った。ガスで大展望には恵まれなかったが、湿原に咲く花の名を田中明氏に尋ねながら歩いた。燧ヶ岳の山頂直下のガレ場の急登はつらかった。会津駒ヶ岳はブナ林の尾根を往復した。最後は温泉で汗を流し、檜枝岐名物の蕎麦で打ち上げた。
（参加者）多賀周二　多賀久子
相澤清美　下山　登　北川さゆり
川田洋子　有原八郎　木村絹恵
田中　明　岩城登子　呉比裕美
岩鵜健司　富田義博　船本裕巳子
朝倉裕雄　井上恭子　上田裕子
金森節子　内田康夫　白木やす子
遠谷節枝　岡崎知子　遠藤　率
○宮野哲郎　○安倉正勝
◎村田智俊（計26名）

播州・七種（ぐさ）山

8月14日(土)　◎中　照行
＊リーダーの都合で中止しました。

丹生・帝釈山から稚児墓山

（金剛里山ハイキング30）
8月21日(土)　晴れ
（集合）神旗箕谷駅9・40～52（バス）衝原10・10～15―船木千年家10・25～40―丹生山登山口10・45―明要寺窓地11・40（昼食）12・20―丹生神社・丹生山12・40―コル13・00～10―帝釈山13・30～50―コル14・10―丹生神社参道分岐14・35～45―丹生神社前バス停15・10～20（バス）箕谷駅15・35（解散）
無風の猛暑に汗が流れ落ちる。熱中症にならないかと心配するほど。途中で早目に昼食をとり、体力を回復して丹生山に登った。丹生疑走路は木陰で快適だったが、帝釈山（関西百名山）に登ってからコルに引き返し、丹生神社の参道を下山することにした。夏の低山歩きは厳しいと実感した日であった。
（参加者）石田里美　別所　奏
金森節子　宮西和子　西島芳洋
若林和人　小田潤子　河内正治
矢野　稔　志水明美　林　信男
柳川常雄　林　義朗　森実喜美子
渡部和美　君塚郁子　岩城登子
○大東　恒　◎村田智俊（計19名）

鎧山　（鈴蘭を歩く338）

8月22日(日)　晴れ
（集合）希望ヶ丘リッチランド入口9・00―鳴谷池9・40―東尾根稚児谷地蔵堂屋仏10・40―竜王山11・10―鎧山（涼み岩）11・20―奥鳴谷広場11・50（昼食）12・50―鳴谷南尾根―P274m13・10―モトクロス山13・30―リッチランド入口14・50（車屋でミーティング）15・00（解散）
遠目の猛暑のなか、みんなビッショリで汗のシャワーを浴びて登頂。昼は涼を求めて小川の流れる木陰広場で昼食。モトクロス山は炎天下で外かったが、美しいせせらぎとサギソウが暑さを和らげてくれた。それにしても下山口のアウトレットパークの人出の花には驚いた。
（参加者）金谷　昭　磯部　純
高杉　博　岩本彩子　松上美代子
谷　守　一芝義雄　一芝美知子
小松志信　神野孝允　光川二美子
木下朝子　永戸鉄治　吉岡うた子
西村敏夫　多田　徳　湯口靖孝
武村千鶴　○後藤康幸
○山田慈三　◎岩野　明（計21名）

湯北・伊吹山古道歩き

（展望の山71）
8月22日(日)　くもりのち晴れ
（集合）JR関ヶ原駅8・30（車）伊吹山ドライブウェイ七合目8・30―山頂遊歩道10・45―山頂駐車場11・20（昼食）11・50―伊吹山頂12・30―遊歩道分岐13・15―七合目14・15（車）関ヶ原駅15・00（解散）
山頂遊歩道のピンクのシモツケソウは終わり、サラシナショウマが咲きだしていたが、華やかさには欠けていた。クガイソウに代わってルリトラノオが咲きだした。葉の出方が違うから見たらわかる。輪生と互生で、ルリトラノオは互生である。
（参加者）堀江房蔚　栗栖崇吉
島田　廣　広瀬重見　広瀬恵美子
匿名　◎山田明男（計7名）

比叡・古黒谷道から比叡山

（火曜ハイク72）
8月24日(火)　晴れ
（集合）ふるさと前バス停9・00―八幡天満宮9・10―首切地蔵9・50―古黒谷道―黒谷青龍寺10・55―峰峠11・30―釈迦堂11・50（昼食）12・40―根本中堂13・15～35―天梯ヶ峰13・55―本坂―坂本観光休憩所15・05～15（解散）
古黒谷道の取り付きは道が悪く悪戦苦闘する。まだ猛暑が続き山頂で29℃、休憩が多くなる。帰路は天梯ヶ峰に寄ってブナの大木を見る。悲田谷は現在通行不可のため変更して本坂をくだったが、本坂は10年前と変わらない悪路であった。ヤマジノホトトギス一輪が秋の気配であった。
（参加者）浅野　剛　中山　治
加藤浩二　木本恭子　岩本彩子
夏山春子　林　信男　柴田慶一郎
林　義朗　松本忠雄　小川富士雄
藤村勝彦　和田直樹　守田光太郎
川上久臣　辻垣調子　後藤純子
塚本忠次　小松志信　船本裕巳子
青木一雄　高島春美　加納由紀子
竹田善英　武村千鶴　○沖　伸
◎仲谷礼司（計27名）

大峰・行仙岳から転法輪岳

8月26日(木)　晴れ
（集合）近鉄橿原神宮前駅8・05～10（バス）白谷トンネル東口10・45―行仙岳11・50（昼食）12・20―倶利伽羅岳13・35―転法輪岳14・20―倶利伽羅岳15・00―行仙岳捲道分岐16・25―白谷トンネル東口17・10（バス）橿原神宮前駅19・40（解散）
好い天気に恵まれ、行仙岳で展望を楽しみながら昼食をとり、北にのびる奥駈道に向かった。風も無く蒸し暑く、バテ気味で転法輪岳を踏んだ。帰りは行仙岳の捲道をトラバースして予定通り下山できた。
（参加者）塚本忠次　林　正義
川保　敏　沖　伸　渡部和美
古山幸男　別所　奏　岩城登子
繁田広美　小栗大直　前川和佳子
鮫田二郎　三野　旭　中江南海雄
島田　廣　堀内預智　梶原泰彦
森藤哲良　桜庭　栄　志水明美
萩野暢子　上嶌秀夫　○竹田勝英
○下郡正年　◎西上利和（計25名）

テント山行

奥播磨・蓬無山と扇ノ山

8月28日(土)～29日(日)　1泊2日
（28日　晴れ）（集合）JR新大阪駅7・30～40（バス）蓬無峠10・00～15―蓬無登山道コル11・30―蓬無山12・40（昼食）13・15―若杉高原大屋スキー場14・40（入浴）15・30（バス）八頭町ふるさとの森キャンプ場16・30（泊）
（29日　晴れ）キャンプ場7・00―扇ノ山林道登山口8・00―扇ノ山9・20～45―大ヌッコ10・10―河合谷林道水公園11・15～30（バス）芳賀温泉13・20（入浴・昼食）14・45（バス）新大阪駅18・05（解散）
下界は猛暑日でも1000mを超す山に登ればとても涼しい。蓬無山への最短アプローチは志倉道谷林道の蓬無峠の取付から。道谷の林道入口に「通行不能」の看板

があったが、マイクロバスが取付まで入ってくれて楽に登ることができた。キャンプ場も涼しくて楽しく過ごし、ぐっすり寝た。周ノ山は美しいブナ林のなかを快適に縦走することができた。

（参加者）岩村春子　西谷眞実子　今泉　勲　木村和恵　北川さゆり　松本勝子　須藤浩子　武部美美子　小松志信　川戸せつ　加納由紀子　石田里美　岡崎知子　佐々木輝子　森井　譲　田辺弘子　小川富士雄　大嶋　勉　安井昇太　名畑恵美子　遠藤　寿　○宮野哲郎　○村田智俊（計23名）

鈴鹿・御池岳

（平日お花見山行⑥）

8月31日(火)　晴れ

（集合）JR関ケ原駅8・30（車）鞍掛トンネル9・10～15―鞍掛峠9・40―鈴北岳11・00―丸池11・35（昼食）12・05―御池岳12・25―鈴北岳13・00―鞍掛峠14・00―トンネル西口14・20～45（車）関ケ原駅15・30（解散）

暑いからゆっくり歩いても汗が出る。途中でひとりダウンし、カリガネソウだけを見て、休憩して帰りを待ってもらった。カリガネソウは過去最大の群落で見られ、群落は五ヶ所ある。

（参加者）堀江房群　竹田勝英　鈴木恒男　金森節子　小林一世　広瀬重見　島田　廣　○山田明男（計8名）

（7・8月の参加者　延437名）

・読者の皆様へ・

平素「新ハイキング別冊関西の山」をご愛読いただき、また筆者の方々には山の原稿をお寄せいただき深く感謝申し上げます。

諸般の事情により、平成23年度「116号」から当誌の書店販売をやめることにします。

これを契機に、「新ハイキング」別冊としての雑誌形態を改め、「新ハイキングクラブ関西」の会員向け会報誌として再出発することにしました。

会報誌としての性格上、当クラブの山行活動を主体とした誌面づくりになります。判型を大判のB5判とし、ページ数は漸次減らしていく方向です。よって、雑誌に不可欠の設者による投稿記事（紀行・連載・コースガイド）の掲載は徐々に減らしていきます。そのぶん、山行例会など、山行活動と密着した記事・写真を積極的に掲載していきます。

これまでご寄稿されてこられた方々はその発表機会を失することにもなりますが、東京本部の「新ハイキング」誌が関西の情報を増やすなどし、受け皿となりますので、新ハイキング社へお願いします。

また、書店購入の方は、今後は本部の「新ハイキング」誌（月刊580円・定期購読年間6000円・入会金600円）のご購読をおすすめします。

＊116号（新春1・2月号）よりタイトルを「新ハイ関西」と改め、当会員だけに配布する会報誌として発行します。

＊「新ハイキングクラブ関西」会員として今まで同様当誌を読まれ、山歩きを楽しみたい方は更新をお願いします。年会費は今までと同額です。

＊次号より内容・レイアウトなどは全面的に変えますが、年間6号発行は続けます。例会への参加は「会員に限る」を原則とします。

よろしくご了承ください。

平成22年11月1日

（代表）村田智俊

会員募集

当会は、「新ハイキングクラブ」の関西会員を中心にしたハイキングの集いです。山の知識を深め山に登り、健康な身体をつくりましょう。自然のなかを歩く喜びが実感できることでしょう。

「新ハイキングクラブ」は昭和21年発足以来、関東を中心に60年間余、好評のうちに活動しています。関西は平成3年秋発足で20年目に入りますが、すでに数千名の会員で活動しています。

会員になれば当会のイベントに参加できます。多くの仲間達とハイキングを楽しみましょう。

会員には会報誌「新ハイ関西」（隔月刊・年6号発行）を毎号お届けします。

係（リーダー）はすべて無償の奉仕で、各自で切符を買い茶代を払い、宿泊料もすべてワリカンです。会員が例会に参加されるときは、実費の他に山行運営費として400円を支出していただきます。

四季の自然に触れながらの山歩きからウォーキングまで、ハイキングを通じて若々しい心と健康をいつまでも持続するのはすばらしいことです。これから始めてみたい方、すでにベテランの方もみなさんご入会いただけます。

入会金　500円（ワッペン共）
年会費　3300円（定期共）

入会の申し込み（随時）は、この会誌に挿入の振替用紙をご利用ください。第何号からの送本かを忘れずにご記入ください。

お友達の住所・氏名をハガキで紹介くだされば、「新ハイ関西」を参考資料として無料で送ります。

○山行係（リーダー）募集

係は2ケ月に一～二回程度の山行例会を実施していただきます。

経験のある方、やってみたいと思われる方は、新ハイキング関西までご連絡ください。

「新ハイ関西リーダー必携」をご参考にお送りします。

○新入会員（定期購読者）紹介

新しいお仲間のみなさんです。会員番号5564番から5572番まで（敬称略）。

【京都】渡辺雅人　馬淵晶子　柳本恵子　西村　元

【大阪】池浦健次　岡田かよ子　中西博武

【奈良】片桐良子　野間さよ子（9名）

訂正とお詫び・誤記の誤り訂正します

○114号（初秋）

＊14ページ上段1行「称名滝」のルビ「しょうな」→「しょうみょう」

＊15ページの下段7行、牛ノ首から称名滝間が通行止めと書きましたが、9月に仮復旧し、健脚者なら通行できるようになりました。

＊77ページ付近図中「隣を照らす会館」→「一隣を照らす会館」

＊同ページ下段17行「三石岳」のルビ「みついし」→「さんごく」

＊79ページ上段5行「紀貫之への」→「紀貫之邸への」

＊同ページ下段5行「権現磐正」→「権大磐正」

＊同ページ下段9行「無道寺へ」→「無道寺坂道へ」

＊80ページ四段1～2行「展望があつる」→「展望が見渡された」

＊88ページ下段計画表9月30日の「砂」→「砂」

＊89ページ同計画表14行「ヒノキ」→「ヒキノ」

書店でお求めの方へ

次号より、書店での販売を中止しますので、店頭ではお買いお求めできません。当クラブの会員になっていただきますと、毎号お自宅へお届けします。